

正大 · 治明 · 末慕

史率十八顧回

特268-292

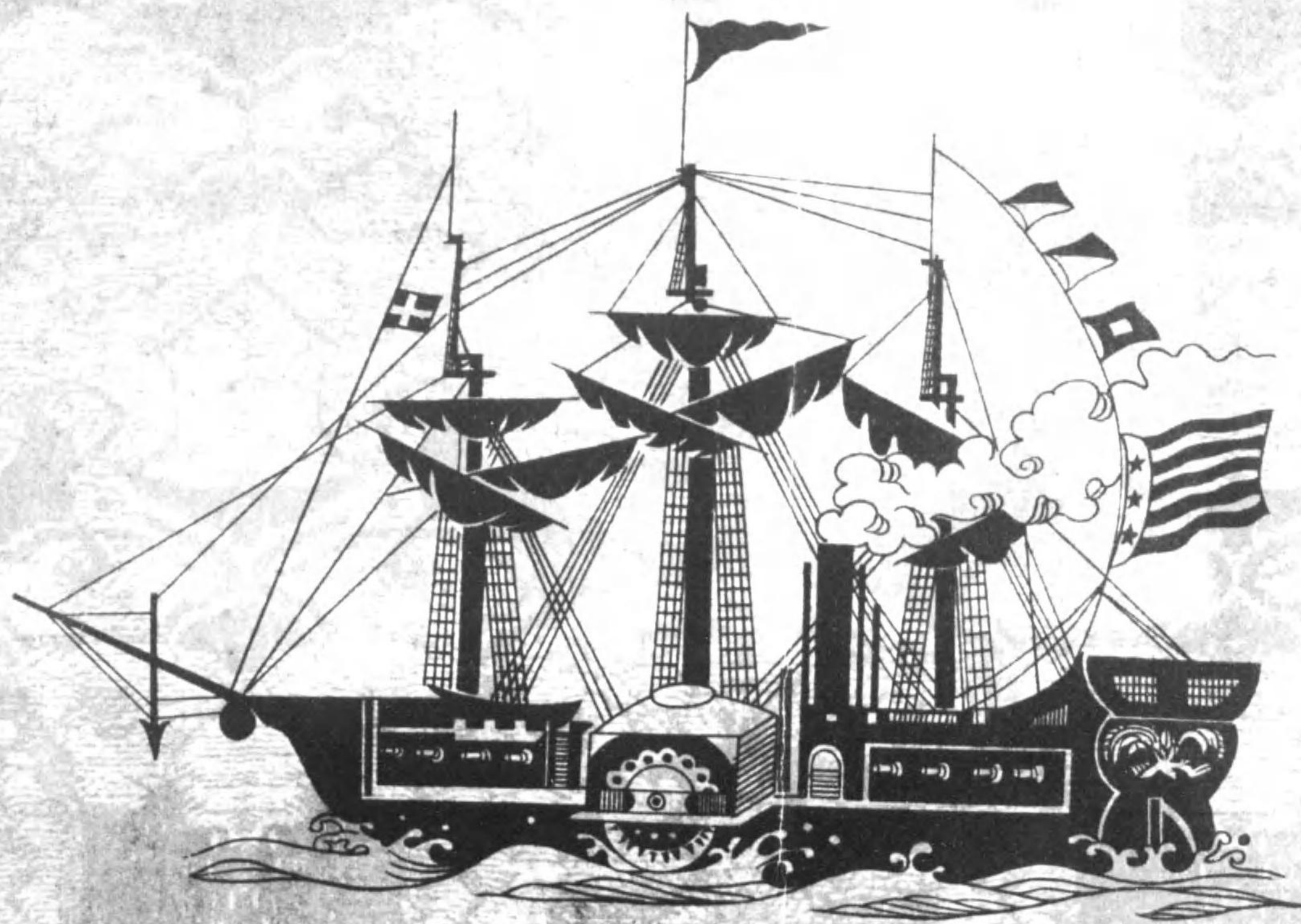


12733501125994

363

10

292



輯七十第

行發 · 會協化文洋東 · 京東

6
7
8
9
4
0
1
2
3
4
5
6
7
8
9
5

◎口繪解説◎

◎『御即位式・鳳輦東京御發輦』

大正天皇の御即位式は大正四年十一月十日と御發表あり、依つて十一月六日午前六時十五分宮城御出門、賢所御羽車に扈從し給ひて京都に向け御發輦あらせらる。六頭曳きの特別儀装の美しき御馬車に召され鳳輦の金色燦然として朝陽に映ずるところ、御輦薄は肅々として淨砂を踏み、馬場先門なる東京市の大奉祝門を通過、東京驛に向はせらる、眞に一輦の壯麗極りなき大繪巻であつた。

◎『御即位式に御參列の各皇族殿下』

御即位式に御參列の爲京都に御入洛の各皇族殿下である。右より。前列、竹田宮妃、朝香宮妃、伏見宮博恭王妃、閑院宮妃、東伏見宮妃、梨本宮妃及び北白川宮妃。第二列、東伏見宮、伏見宮貞愛親王、閑院宮、伏見宮博恭王、第三列、東久邇宮、梨本宮、久邇宮、朝香宮。第四列、北白川宮、竹田宮、久邇宮多嘉王の各殿下。

幕末 明治 大正
回顧八十年史 第十七輯 目次

口 繪 (原色版)

「御即位式・鳳輦東京御發轍」……………
「御即位式に御參列の各皇族殿下」……………

玻璃版

主基齋田の御田植式…………… 四〇九

主基齋田御田植式、主基齋田の御田植式々場、田植の早乙女。

悠紀齋田の御田植式…………… 四一〇

悠紀齋田御田植式、悠紀齋田御田植式の田植願、御田植終了奉告式。

齋田の刈入れと御用品の調製…………… 四一一

悠紀齋田の稲刈、悠紀齋田收納倉内の稲曳き及び米磨ぎ、悠紀齋田の供納米の撰米、賀茂神社内御水井舎、大饗宴會場の羽二重御帷幔の謹製。

大正天皇御即位式(一)…………… 四一二

近衛騎兵の先驅、賢所御羽車の進御、鳳輦奉祝門通御、馬場先門附近の奉送者。

大正天皇御即位式(二)…………… 四一三

賢所御羽車京都烏丸通進御、鳳輦堺町御門内に進御、烏丸通の拜觀者の堵列。

大正天皇御即位式(三)…………… 四一四

承明門より見たる紫宸殿、紫宸殿上の南廂西端より謹寫せる高御座、御登極の高御座、皇后宮の御假臺、衣冠束帯にて壽詞を奏せる大隈首相及び夫人。

大正天皇御即位式(四)…………… 四一五

大正四年十一月十六日及び十七日の二條離宮内の方四十一間の大饗宴場、二條離宮舞樂殿に於ける五節舞、上野奉祝會に行幸の大正天皇、上野公園に於ける東京市奉祝會、東京市奉祝會式場に於ける名士。

御即位式御調度品…………… 四一六

青櫛衣、御用の各種幡、皇族大禮使の佩刀、石帯、御太緒、御履、皇后陛下の御櫛扇及び釵子。

大禮特別大觀兵式…………… 四一七

青山練兵場に於ける大禮特別大觀兵式、歩兵の分列行進。

大禮特別大觀艦式…………… 四一八

大禮特別大觀艦式、參列艦の皇禮砲發射。

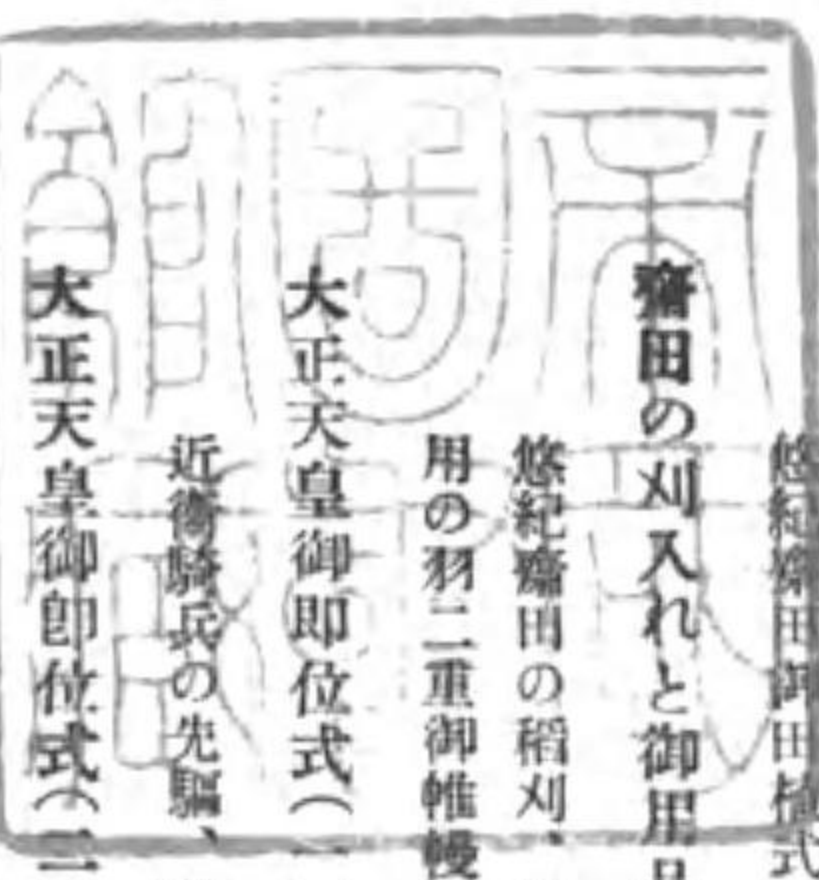
米國曲乘飛行家アート・スミスの來朝…………… 四一九

米國曲乘飛行家アート・スミス、飛行中のスミスと其愛機、スミスの夜間宙返り飛行、スミス歡迎會、低空同乘飛行、スミス氏に恩賜金傳達、大正五年六月十六日札幌にて墜落せし當時の寫眞。

來朝せる外人飛行家と民間飛行界…………… 四二〇

米國曲乘飛行家チャールズ・エフ・ナイルスと大正四年十二月十一日青山練兵場に於ける得意の宙返り飛行、磯部海軍少佐のロンブラー飛行機、萩田氏のモータス單葉、剪風號、米國飛行家チャンピオン、スチンソン嬢、ルース・ロー夫人、高左右隆之の高左右式複葉機、坂本壽一の坂本式複葉機、東京大阪間郵便飛行一着賞者佐藤章と愛機。

李王殿下の御來朝…………… 四二一



御來朝の李玉殿下、李玉殿下の笠山御出發、李玉殿下の御參内。

裕仁親王の立太子禮

立太子禮當日の迪宮裕仁親王殿下、立太子禮當日の馬場先門附近。

奠都五十年祭

上野公園東京市奉祝式々場に臨御あらせられたる大正天皇及び皇后陛下、上野祝賀式々場に向はせ給ふ大正天皇、東京市大祝宴、東京驛前の大行列。

奠都五十年奉祝博覽會

奠都五十年奉祝博覽會全景、第一參考館、ジオラマ「草津宿行在所」、ジオラマ「東海道芝生村外人拜觀」。

第三回極東オリンピック大會(一)

大正六年五月八日芝浦に於ける第三回極東オリンピック大會入場式と名譽會長大隈伯の開會の辭、五月九日十哩短縮マラソンの出發、五月十一日支那對ヒリツピン排球本競技、五月十二日の二百二十ヤード水泳決勝、五月十二日二十五哩マラソン。

第三回極東オリンピック大會(二)

百二十ヤード・ハイ・ハードル決勝、槍投一等齋藤兼吉、二十五哩マラソン一着橋本源吉、水上二百二十ヤード及び八百八十ヤード一着内田正保、走高飛一等斎藤兼吉、テニス優勝熊谷一彌、一哩リレー一着多久儀四郎、砲丸投げ一等アルパレス・カベニラ。

コンノート殿下の御來朝

東京驛前の歡迎門と奉迎の市民、御參内のコンノート殿下。

米騒動(一)京阪神に於ける暴動

大正七年八月十二日京都市公設外米販賣の廣告、八月十二日夜深草歩兵第三十八聯隊の京都市中警戒、八月十二日焼拂はれたる神戸鈴木商店、八月十二日名古屋泥江橋交番暴徒の爲に破壊さる、八月十三日京都下京區一ノ橋小學校に於ける外米販賣、八月十三日午後十一時暴徒の爲に焼打されたる岡山精米會社、八月十一日夜大阪米騒動に出動せる在郷軍人團の武装。

米騒動(二)東京市の恩賜デー

大正七年八月十三日東京市比谷公園内音楽堂附近の警戒、恩賜の廉賣券、米券配付を監督しつゝある田尻市長、白米巡廻廉賣、東京府より献上せる外米及び朝鮮米。

名士のおもかけ

板垣退助、大島圭介、品川彌二郎、高崎正風、森有禮、林權助、大浦兼武、芳川顯正、三浦梧樓、佐々木高行、福羽美靜、伊東巳代治、清浦奎吉、河野敏鐘、後藤新平。

醫學界の名士と女流教育家

緒方洪庵、橋本綱常、長谷川泰、長與專齋、石黒忠憲、佐藤進、青山胤通、入澤達吉、高峰讓吉、北里柴三郎、スクリバ、ベルツ、税所教子、奥村五百子、下田歌子、棚橋絢子、山脇房子、嘉悦孝子。

大正初年の相撲界

第一回學生相撲、常陸山引退相撲三横綱の土俵入、鳳の土俵入、大錦の土俵入、東京相撲の大阪乗込み。

宮城前の觀兵式・大隈侯の文士招待

宮城前の觀兵式、電氣博覽會、大隈侯の文士招待、古式蹴鞠の復活、歌劇の全盛時代、寶塚歌劇團「離祭」、バンドマン歌劇團の來朝、観音劇場喜歌劇「マスコット」、家庭踊。

記事

大正三年

東京驛の開通……明治神宮御遺費確定……明治天皇紀編修。

大正四年

大正天皇御即位大禮……恩赦の詔書……贈位と敘位敘勳……養老賑恤……東京市の奉祝……各地方の賜饌と奉祝……大觀兵式と大觀艦式……潰職事件と内閣改造。

大正五年

露國大公來朝・首相襲撃さる……寺内内閣組織さる……立太子禮御舉行。

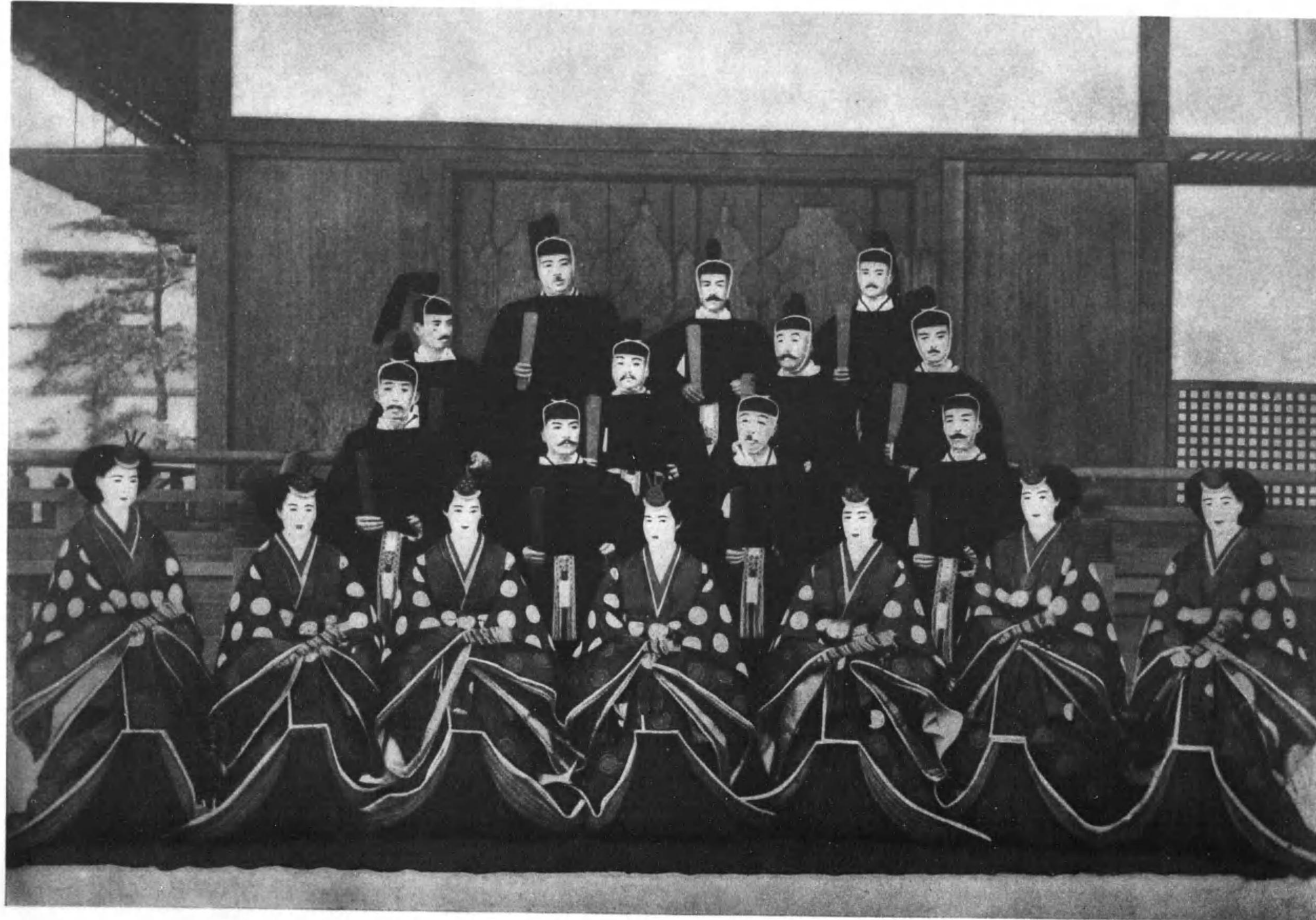
大正六年

皇后宮奈良女高師へ御歌を賜ふ……孝明天皇五十年御式年祭……不信任案と衆議院解散……軍艦筑波の爆沈……極東選手権競技大會……日米共同宣言。



皇 發 御 京 東 皇 鳳 ・ 式 位 即 御

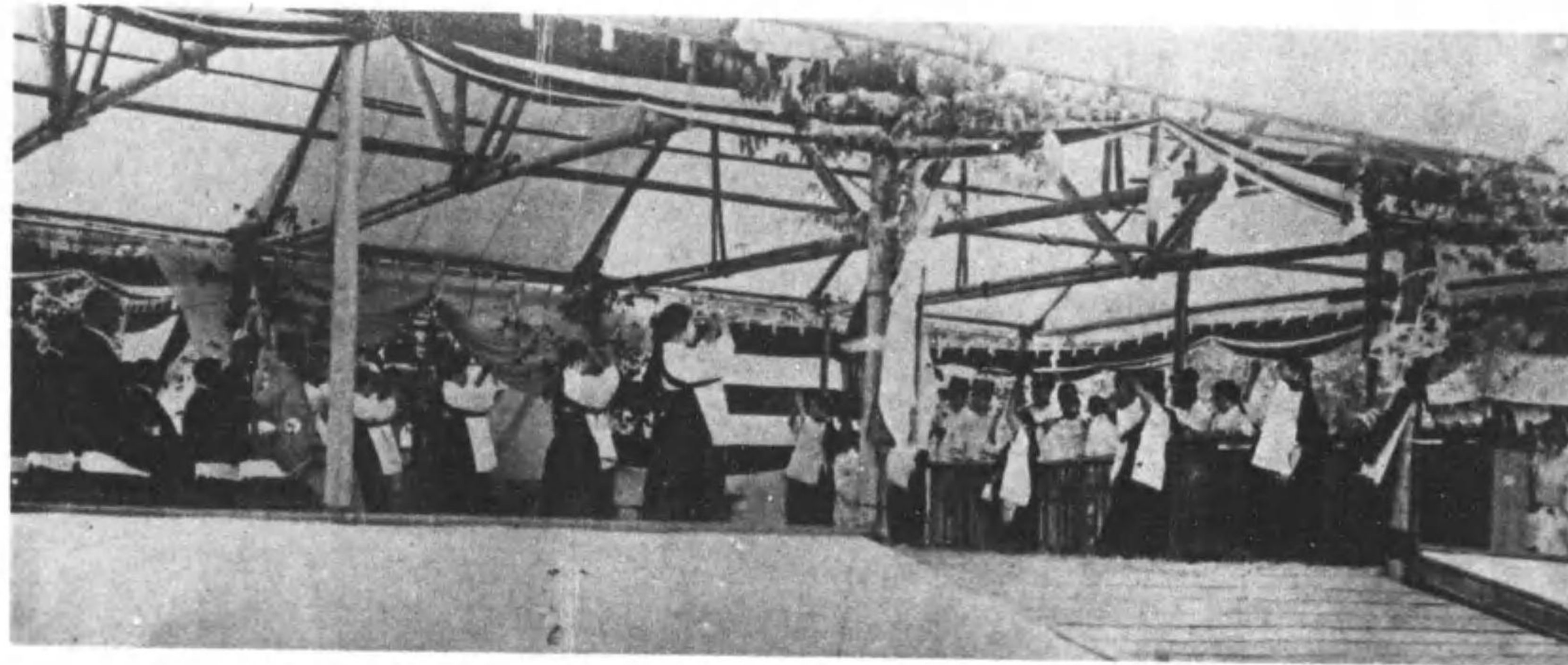
るな麗華に正てき輝に光朝肇鳳り登に天東日旭てき行れ薄く漸露曉柄折。るらせらあ肇發御城宮け向に都京てひ給せは従に車羽御所賢分五+時六前午は皇天正大日六月一十年四正大
るあて横有の過通御門祝奉市京東の門先場馬は圖。たつなに車發御を驛京東に裡るた々般の砲禮皇時七同び及に間四十町五に實長全の薄直御く如がる見を巻繪



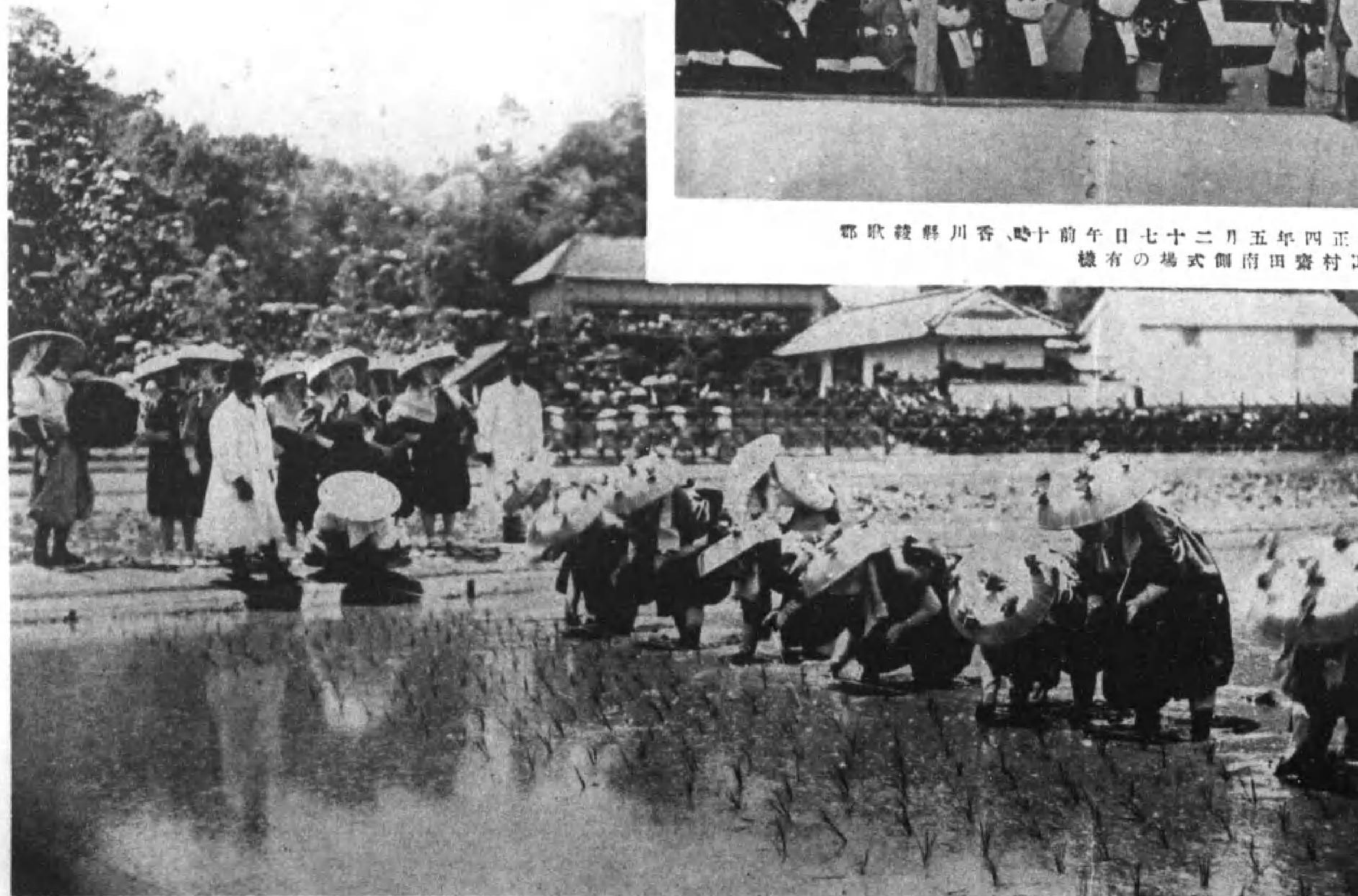
大正天皇即位式に御参列の各皇族殿下
 東 列二第 妃宮川白北及び 妃宮本梨 妃宮見伏東 妃宮院閑 妃王恭博宮見伏 妃宮香朝 妃宮田竹 列前より右 下殿族皇各の洛入御に都京爲の列参御に式位即御皇天正大
 下殿各の王嘉多宮邇久 宮田竹 宮川白北 列四第 宮香朝 宮邇久 宮本梨 宮邇久東 列三第 王恭博宮見伏 宮院閑 王親愛貞宮見伏 宮見伏

主 基 齋 田 御 植 式

(日七十二月五年四正大)式植田御田齋基主、下



郡歌綾縣川香、時十前午日七十二月五年四正大。場々式植田御の田齋基主
織有の場式側南田齋村田山



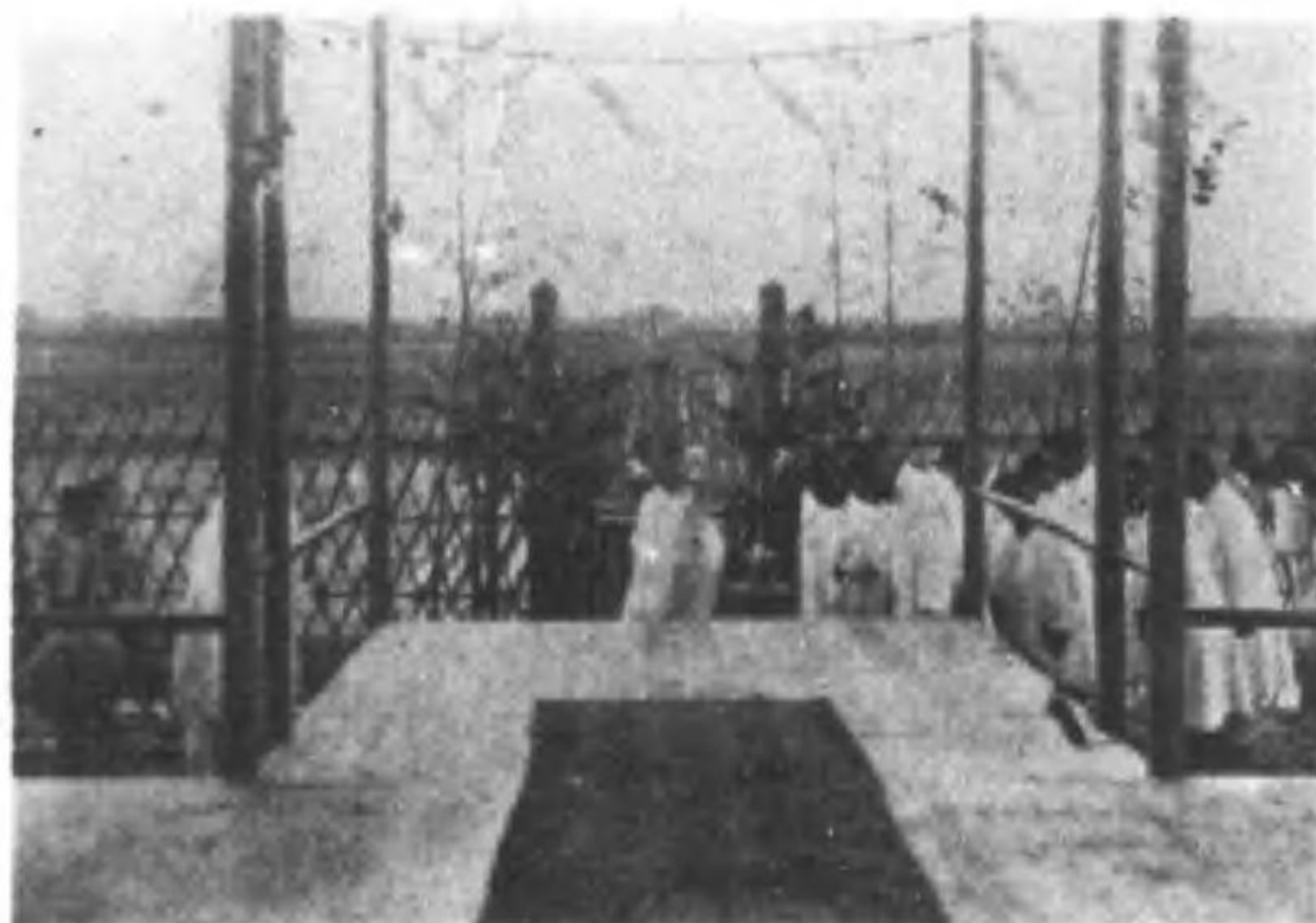
(409)



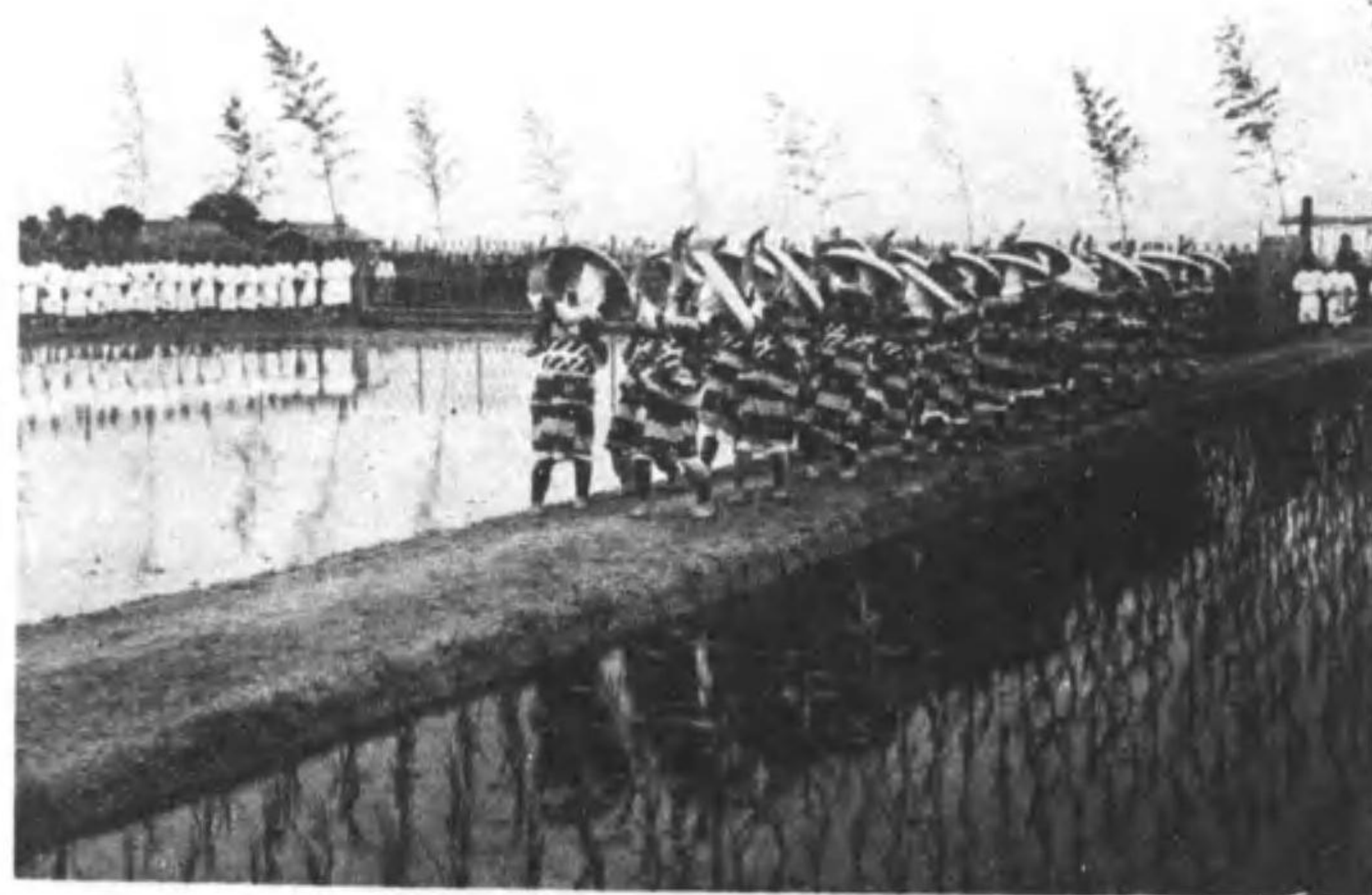
女乙早の植田
群脚掛の緋に袖長の色藍濃綿木岡真

節節の歌植田御の作新に歩十二畝五反三が女乙早の人五十二、りあ式植田御日十二月五年四正大れらせ定決と田の有所郡三長瀬岩村田山郡歌綾縣川香は田齋基主、黒結の定點田齋
。たつあて人萬七に實のもる集りよ郊近てとん見を織盛北日此がたし映挿つひ覗く白

悠紀齋の御田植式



悠紀齋御田植式、下
大村美ツ六郡海碧縣知愛午正日五月六年四正大
れらせは行に田の有所助之定川早、上ノ島中字
、様育の映揮るた



上、御田植終了奉告式（大正四年六月七日）

上悠紀齋御田植式の田植踊（大正四年六月五日）

歌植田と音の鼓太がと者初奉の名九十二と女乙早の名九十、ひ行を式植田御午正日五月六年四正大りも定點御と田の有所助之定川早、上ノ島中字大村美ツ六郡海碧縣知愛は田齋悠
るあでのたし映揮に田齋てせは合に聲唄の

製調の品用御とれ入刈の田齋



(日八月十年四大)米擗の米納供の田齋紀悠



。き磨米び及き奥粗の内舎納收田齋紀悠



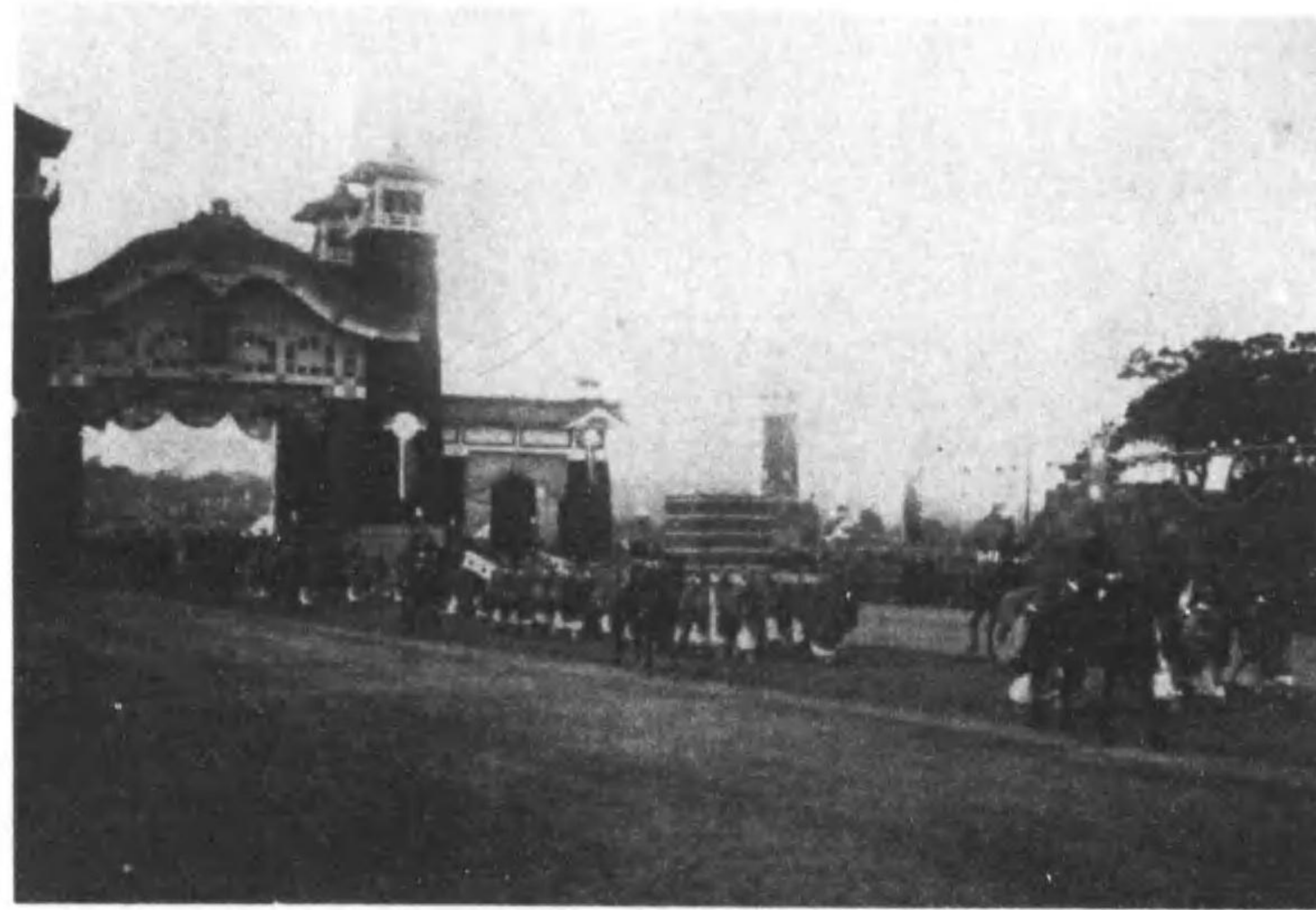
悠紀齋田の稻刈 (大正四年九月三十日)



右上、賀茂神社内御水井舎
(おものゐや)
黒酒、白酒御醸造の水を
汲む井戸である。
上、大鑿堂會場用の羽二重御
帷帳の露製(京都初音尋
常小學校にて)

てしが搗に右左てに中の袋の綿木白し爲をき奥扱てし而。たしをり刈稻てつ行を式穂扱て上の會立官使禮大日十三月九年四正大はてに田紀悠し熟成に事見は稻の田齋兩紀悠、基主
。るあでのたしと用禮大御てし造醸を(きろし)酒白(きろく)酒黒てつ取を水井の舎水井御内社神茂賀上郡京、し納上てめ納に櫃唐し白袴てし爲を『き磨し流』

(一) 式位即御皇天正大



左、賢所御羽車の進御



右、近衛騎兵の先驅



右、馬場先門附近の奉送者



左、鳳堂奉祝門進御

(412)

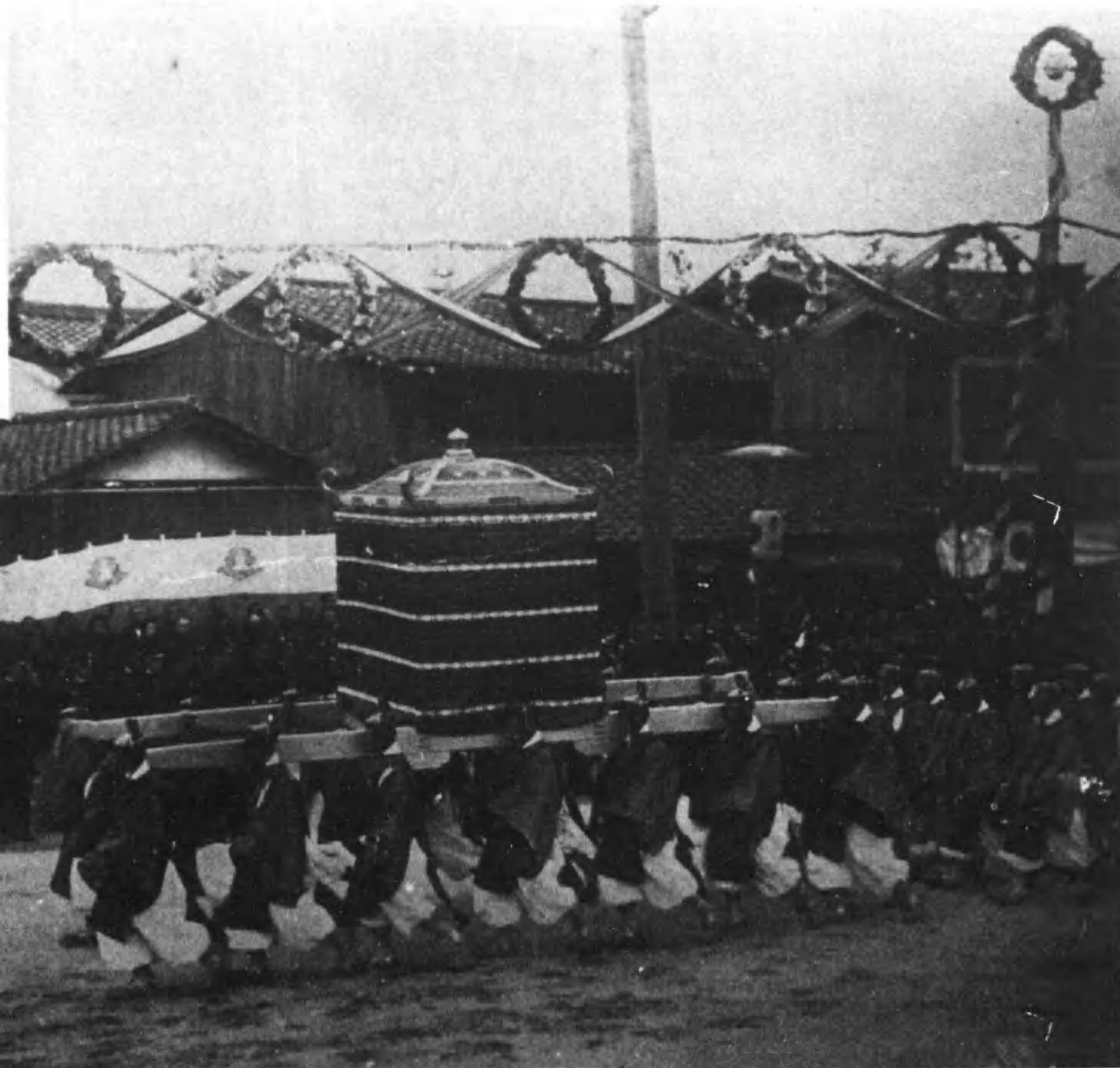
きで出を城宮てひ給せは従に車羽御所賢れき召に車馬装儀取特の立頭六、時六前午りあ儀御の御移所賢半時三前午。るさば遊覽發御を京東け向に都京は皇天正大日六月一十年四正大。
たつあで巻輪大の輻一に眞、るた戦副旗彩の隊仗儀、聲派きし々美、車御るな殿壯き輝に方四てしと然操色金てえ映り照に聲風光朝り登に天東日旭てき行れ薄く漸露曉。ふ給せ。
たれさば遊車發御を都京東け向へ都京に廻るた々殿の砲禮皇時七前午てし而

(二) 式 位 卽 御 皇 天 正 大



御 進 に 内 門 御 町 堺 登 鳳、上
列 緒 の 者 觀 拜 の 進 丸 島、下

御 進 進 丸 島 都 京 車 羽 御 所 賢
(時 二 後 午 日 七 月 一 十 年 四 正 大)

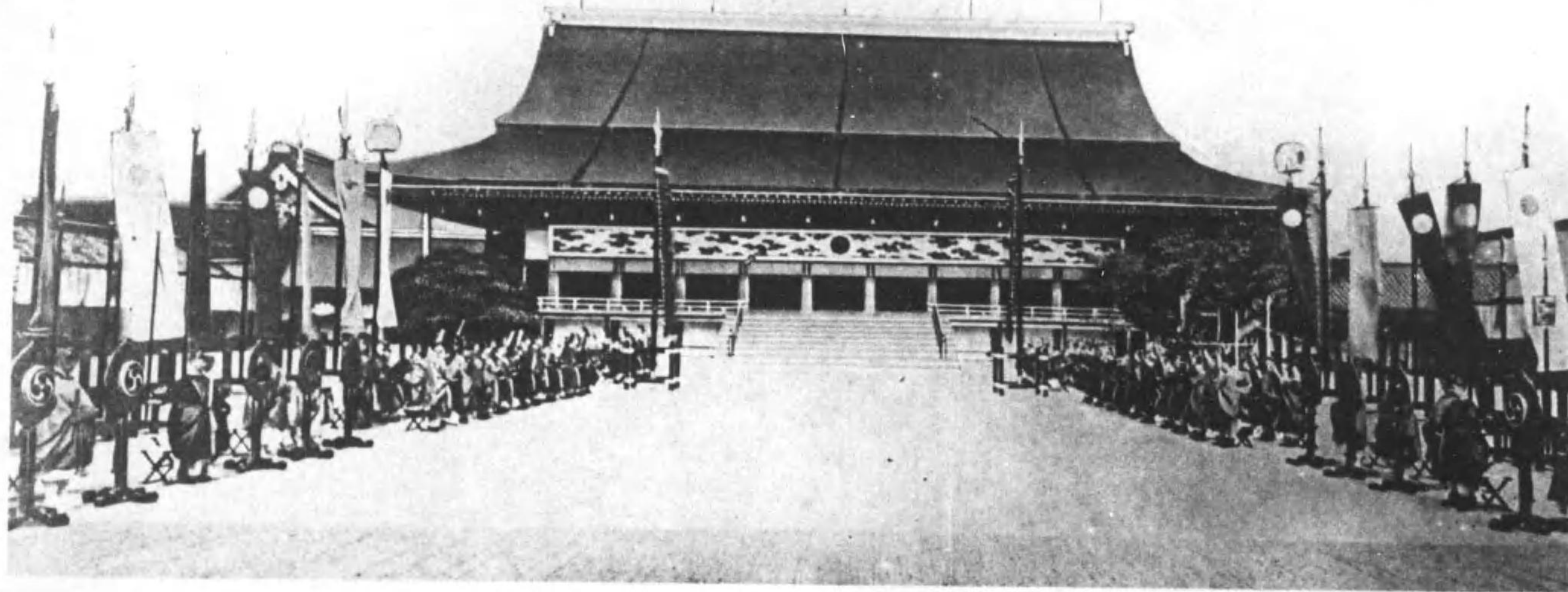


(413)

入に居皇都京に直、暫御都京分五十五時一後午日同、車登御屋古名分十五時九前午日七翌、りあ泊一御に宮離屋古名日同は皇天正大るたれらせらあ登登御京東日六月一十年四正大
緒に荻葉歌し滋横分氣視奉てりへ觀に町旗彩く悉はに市全都京日此がたれらせは行を式儀御の御渡り至に殿典春にも直は所賢り入りよ門禮建てし奉を所賢分十二時三後午、れらせら
。たつあでひ賑き如かく湧は市全ても

大正天皇即位式(三)

承明門より見たる紫宸殿(上)
大正四年十一月十日御即位日當日威儀の本位に就きて準備全くなれる紫宸殿前庭



十日午後一時四十七分参列員着席午後三時八分、大正天皇は高御座北階より昇御椅子に着かせ給ひ立御諸員の最敬禮を受けさせ給ふ。總理大臣大隈重信西階より下り右側承明門内に入り威儀諸員の間を過ぎ南階の下に立立すれば天皇は幼語を給ひ大隈首相は鞠躬如として南階を上り詔詞を奏し終つて階を下り左右萬歳給ひ立ちて北面して萬歳を三唱した。時に午後三時三十分、殿上殿上の参列員又萬歳を三唱し儀仗兵の喇叭、百一發の祝砲の殷々たる聲に日本全國同時に萬歳を三唱して御大禮を奉祝した。



(上) 座御高の極登御



(下) 靈帳御の宮后座

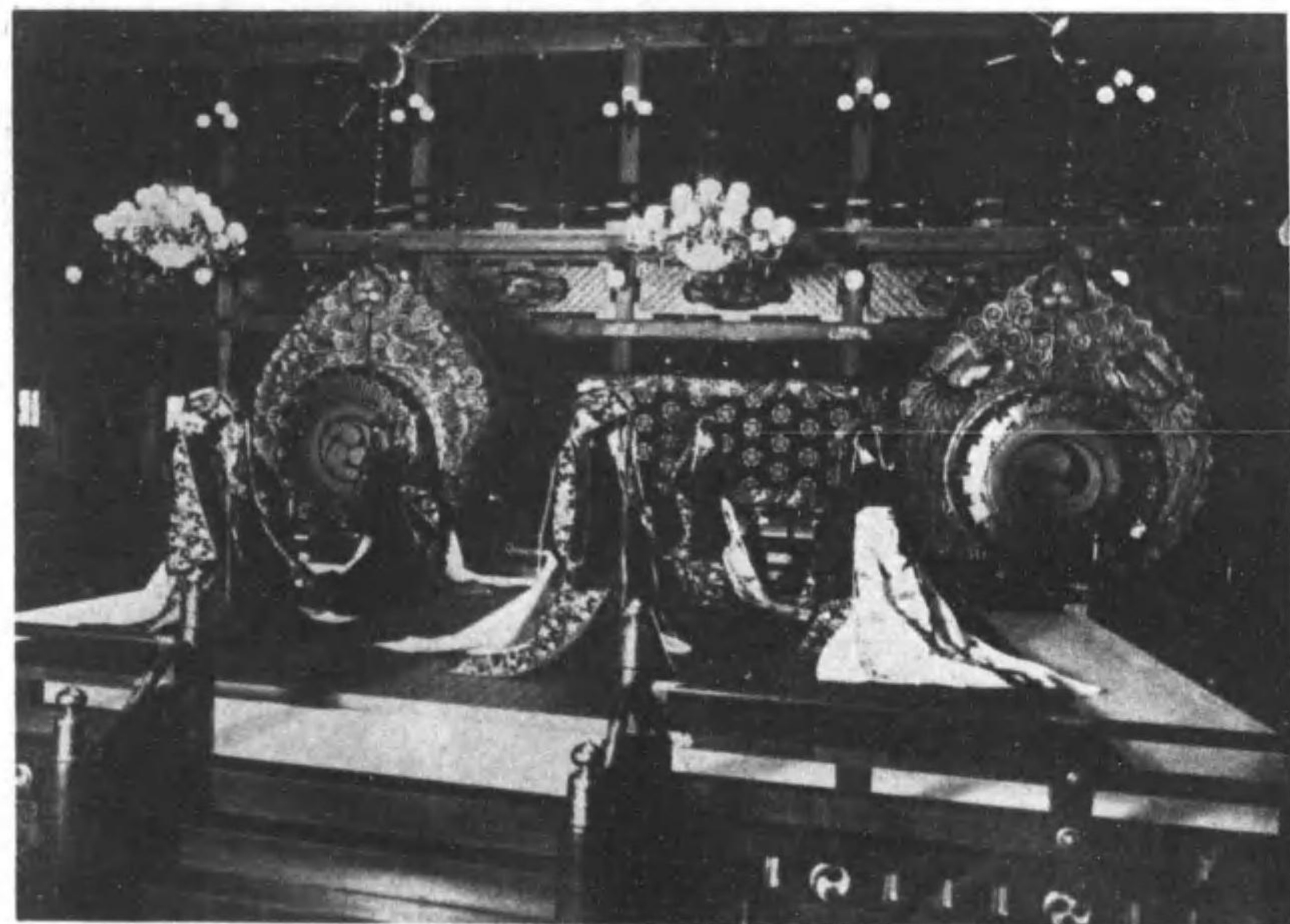


座御高るせ寫註りよ端四廂南の上殿宸紫
(右)靈帳御及び(央中)

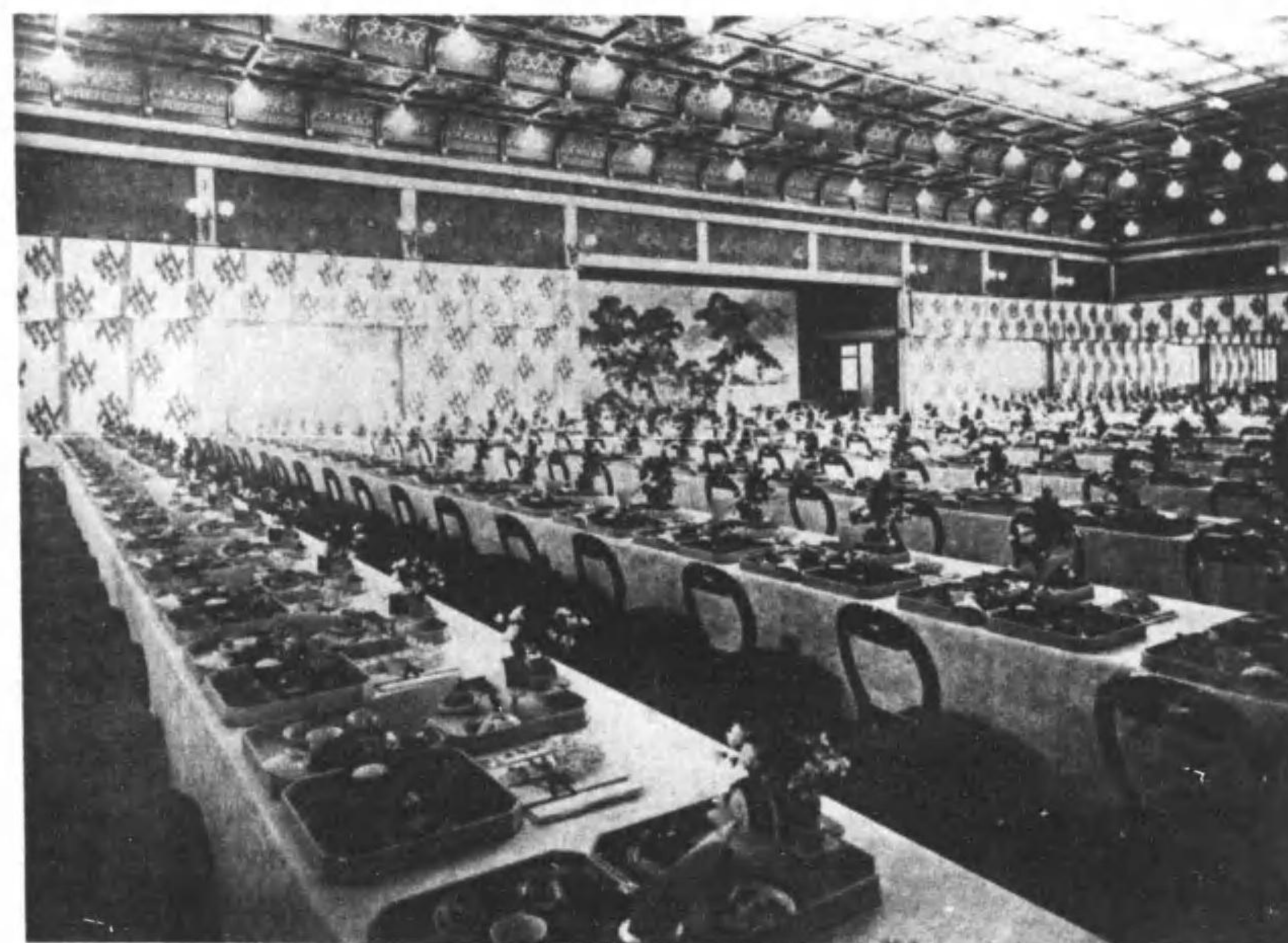


限大るせ奏を詞詔てに帶東冠衣
人夫及び相首

(四) 式 位 卽 御 皇 天 正 大



(日六十月一十) 舞節五るけ於に殿樂舞宮觀條二



歌節の面正。揚宴饗大の間一十四方の内宮離條二の日七十及び日六十月一十年四正大
(高拜日六十は眞寫)。圖『松年千』墨水の筆年景尾今は障

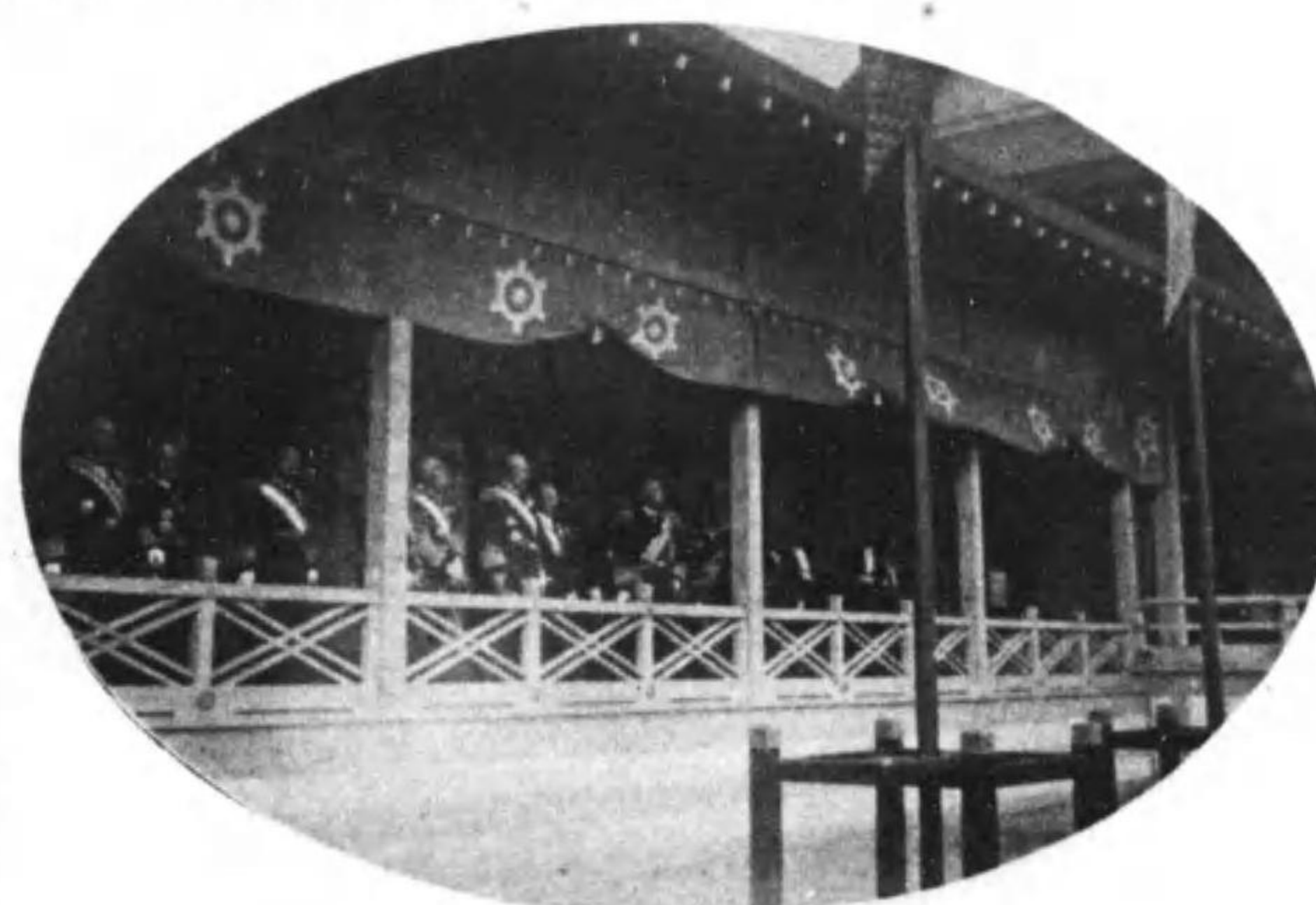


(415)

皇天正大の幸行に會觀奉野上

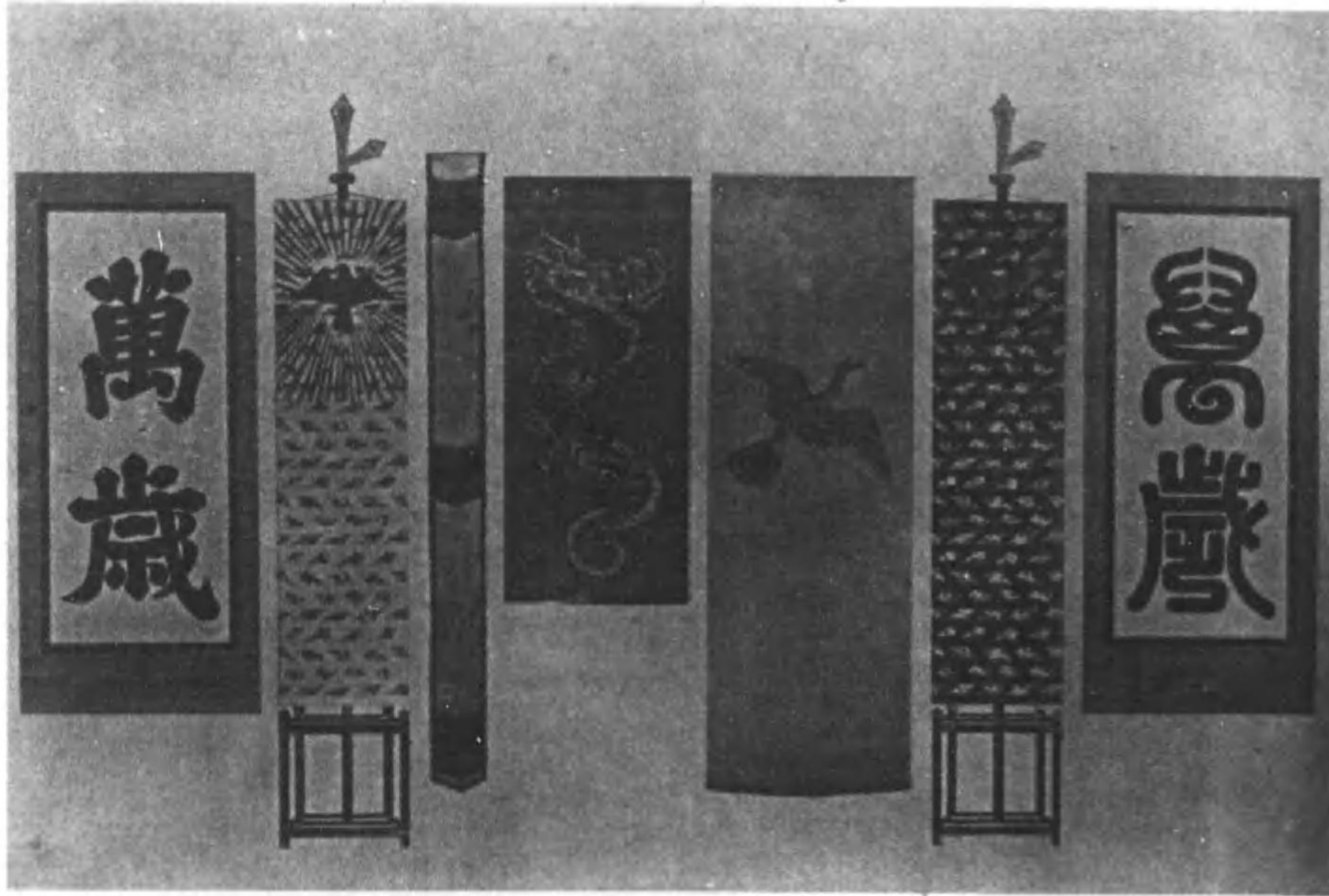


(日九月二十)會觀奉市京東るけ於に園公野上
唱三を歳萬に前御の皇天、員列參の萬六てに聲發の長市田典
。那刺るせ



士名るけ於に揚式會觀奉市京東

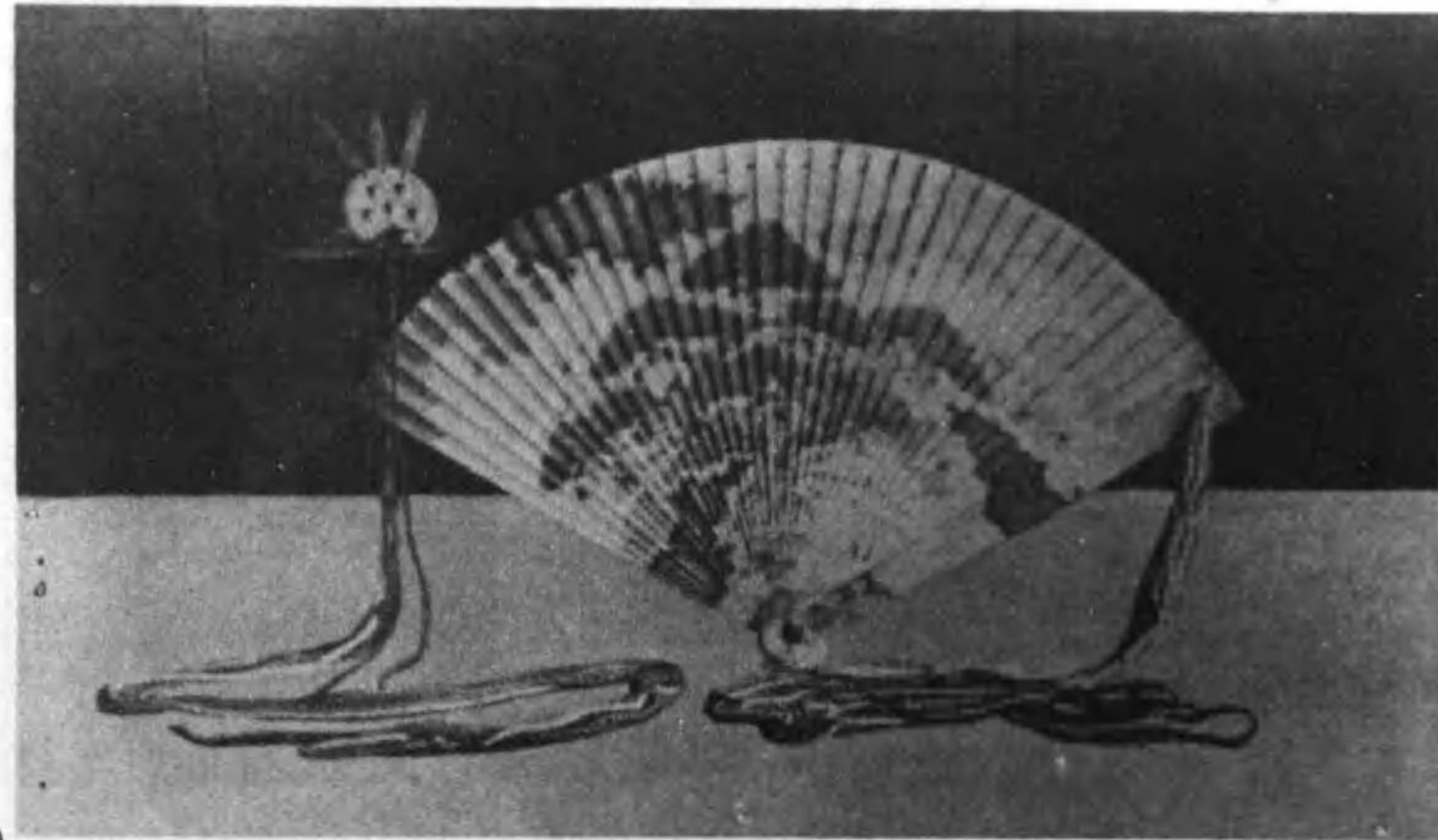
御即位式調度品



御用の各種燈籠(上左)
 衆旅殿南庭に飾らるべき諸燈。右より。萬歳燈。
 頭八咫鳥大錦燈。雲像燈。龍像燈。轆足。靈鷲
 形大錦燈。萬歳燈。



青櫛衣(アwasuyoromo)(上右)
 大嘗祭饗魂祭の御儀に大嘗宮南面神門外掖に奏す
 る儀舞。大嘗祭後大嘗第一日に舞樂殿にて奏する久
 米舞等に着するものにて小忌(オミ)とも云ふ。

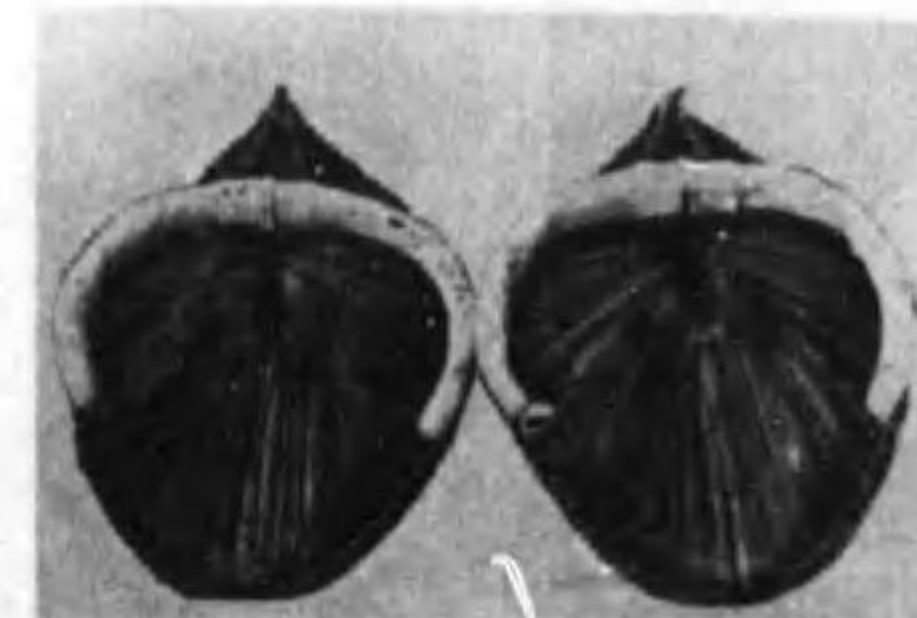


(416)

侍典は子鏡。るあてい蓋を軸に松り作てに繪の色白。子鏡及び扇槍御の下座后皇
 のもるふ用の等侍典儀



御座(上)
 下部は革。上部は善哉錦
 大正天皇の御時には威儀
 の本位のみ用ひられた。



御太櫛(オメフト)(下)
 全部革製。縦八寸三分。
 横六寸二分。先格天皇御
 用のものを拜寫。



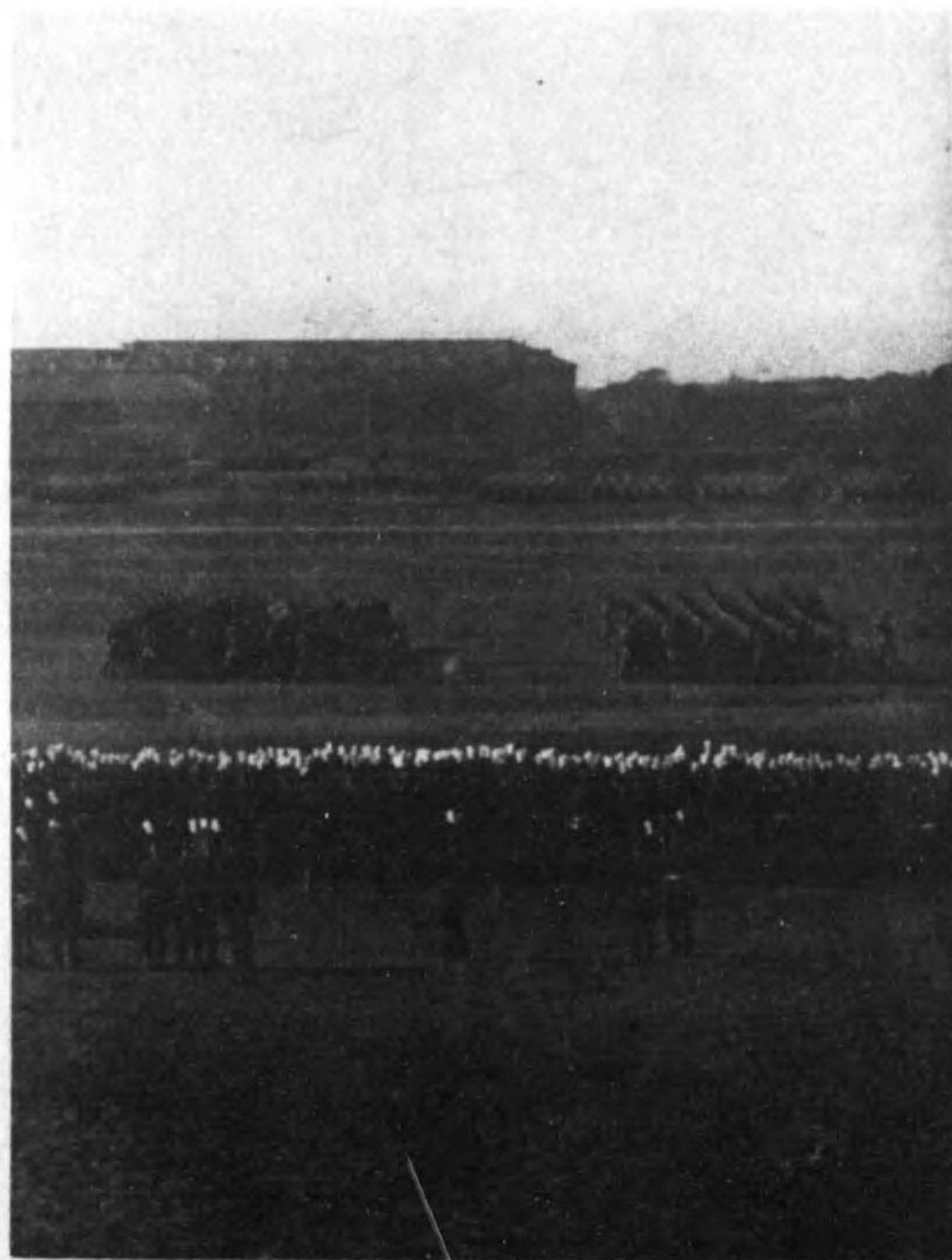
(びおのしい)帯石
 のもるめしに腰方上の劍帶



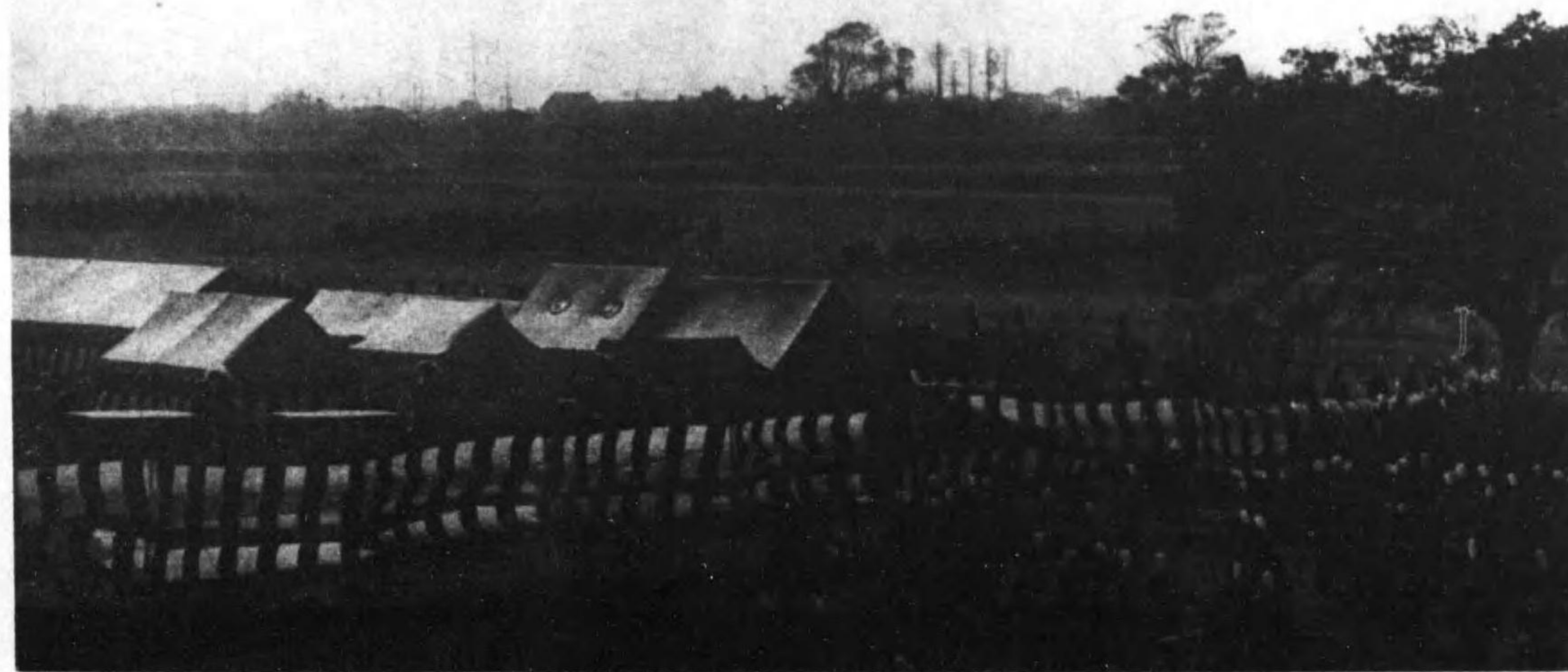
刀佩の使禮大族皇

式 兵 觀 大 別 特 禮 大

下、少兵の分列行進



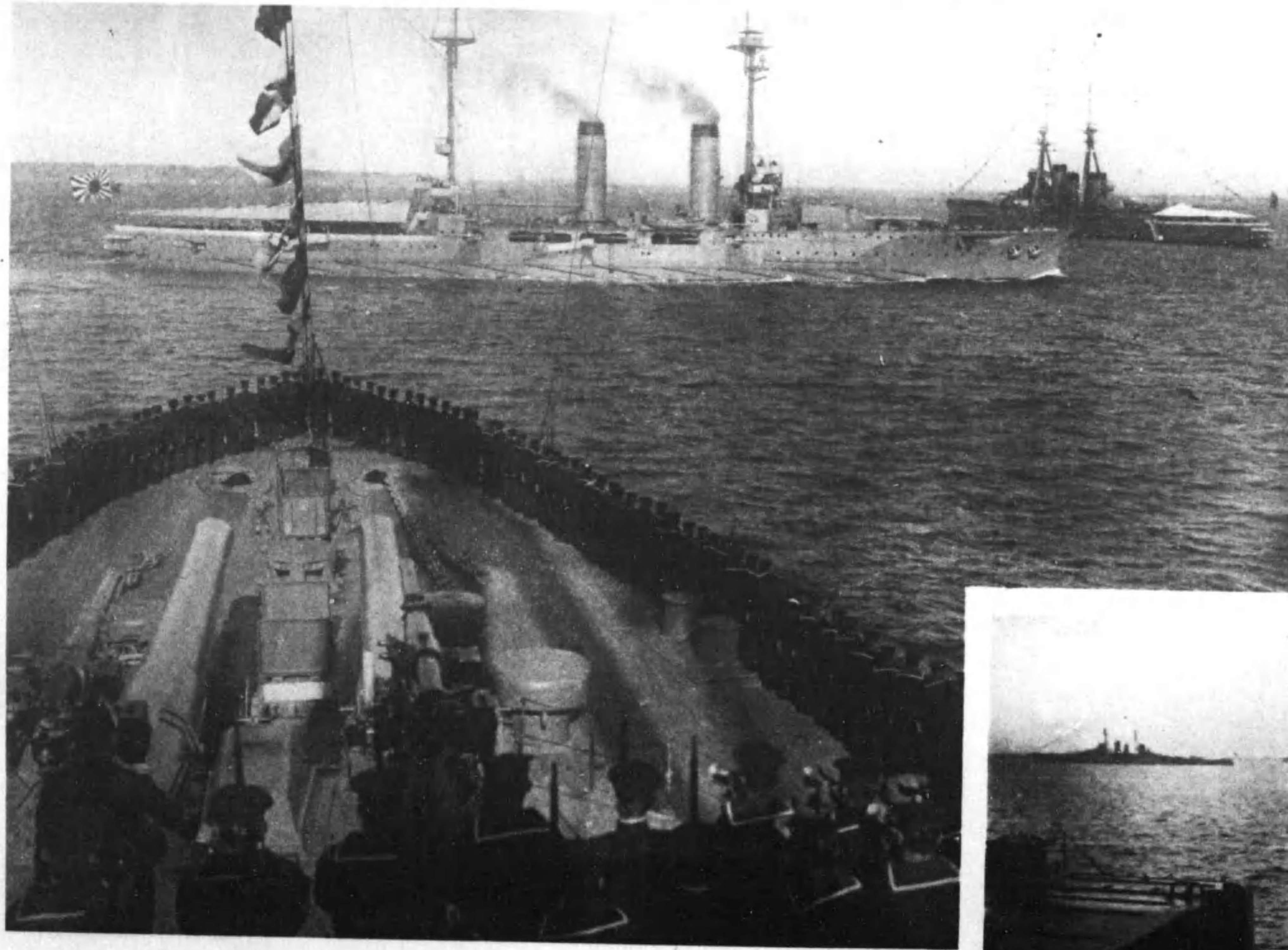
(417)



式兵觀大別特禮大るけ於に場兵練山青
觀壯の式列分中空の『號飛雄』船行飛び及機行飛と進行列分の兵砲、行舉御日二月二十年四正大

、人餘千九萬三隊部表代隊備守各、軍屯乳各、團師各及び衛正、れさ遊園觀御を式兵觀大別特てい於に場兵練山青日二月二十年四正大は皇天正大るたひ給せら了を禮大るけ於に都京。
。たつあで觀盛の有曾未に眞し加參皇一『號飛雄』船行飛、臺十機行飛、門百二砲、千五匹馬

式艦觀大別特禮大



下、參列艦の轟砲発射



式艦觀大別特禮大
艦戦と航進の波筑艦召仰、式艦觀大るたれき行舉てに頭海京東りよ時十前午日四月二十年四正大
。艦艦登の内河

(418)

りよ隊空航軍海るな濱道賀須横、りあ閣親仰をント千五萬十六數ント總、隻五十二百下以桑扶艦標の軍海國帝。るらせは行を式艦觀大別特禮大てい於に海京東日四月二十年四正大
。たつあて觀艦の前空てしと徽象の本日國海に實は唱三の歳萬と艦軍る起りよ艦各と砲禮島るた*般ひ行を式列分中空るな烈壯れは現に空上場式てい衝を風烈機七式ソマルアフ

朝來の スミス・トーア 家行飛乗曲國米

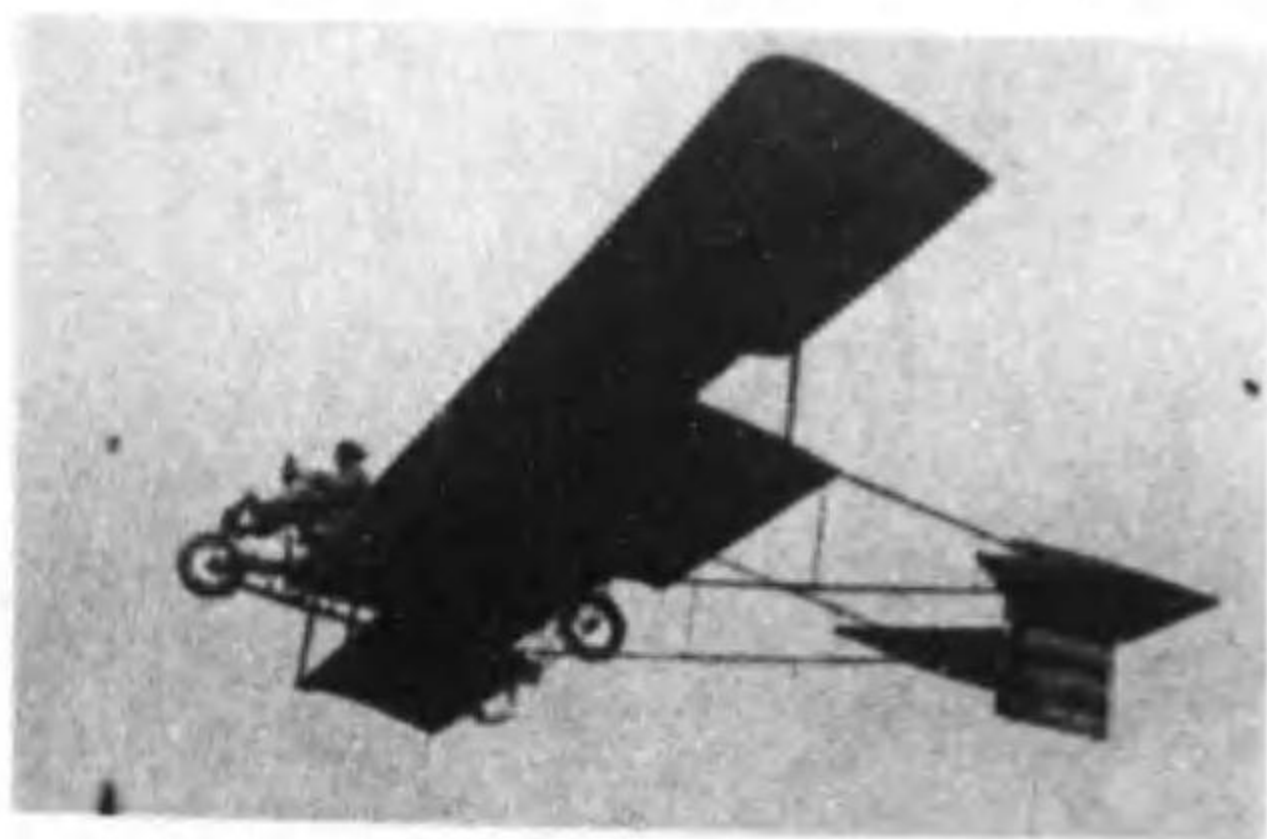
長るす遠傳を金賜恩のりよ下陸上今しに在に子太皇時當 (下遠傳金賜恩に氏スミス
 (てに場會行飛場兵練山青日五月六年五正大) 氏スミスるあつし泣感に恩望と(左將中獨



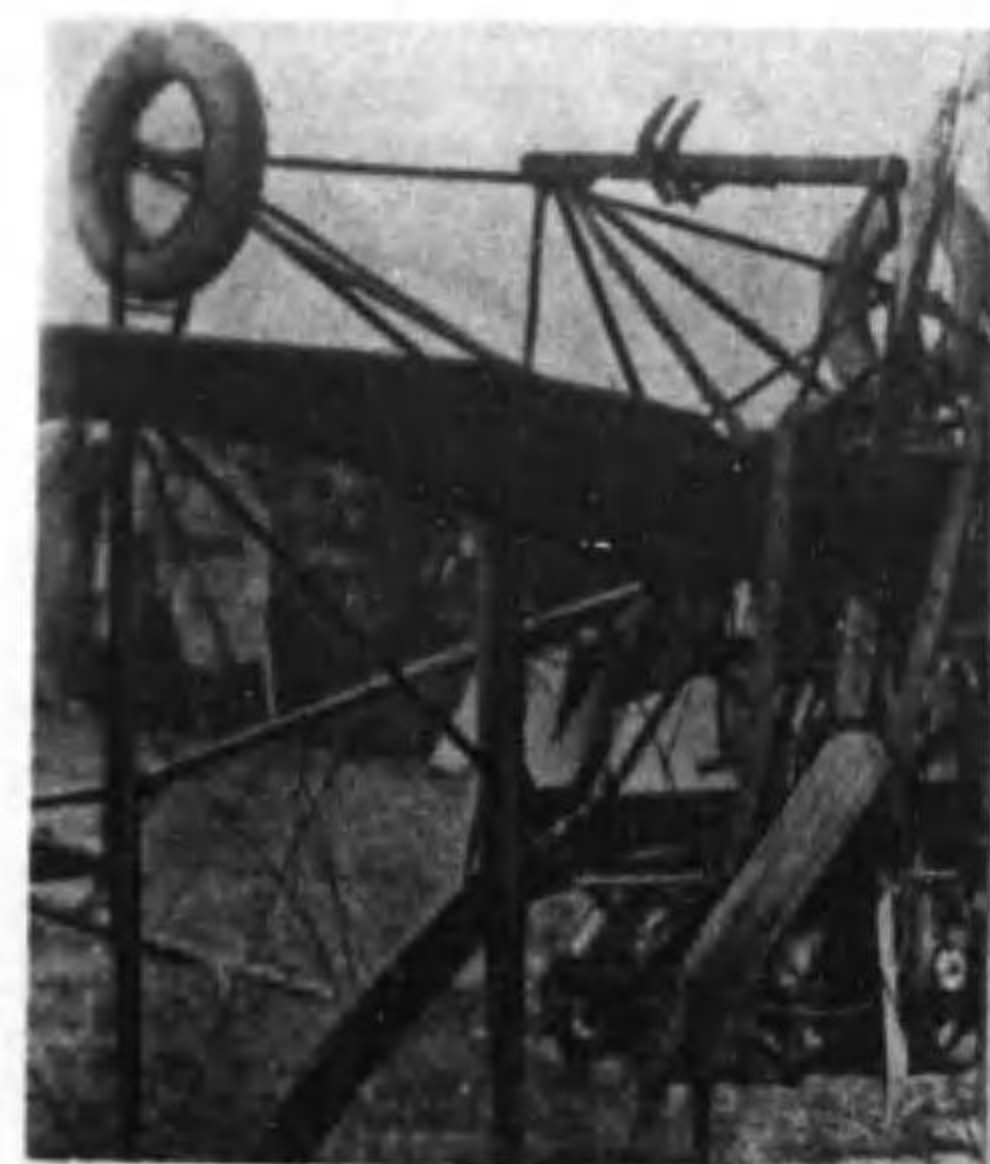
家行飛乗曲國米 (上)
 スミス・トーア
 十月六年五正大 (下
 落墜てに視札日六
 眞寫の時當しせ

スミスの夜間宙返り飛行 (上)
 大正五年六月五日告別飛行に際し同日午
 後八時青山練兵場上空にて行ひたる宙返
 り飛行。
 スミス 歡迎會 (下)
 大正五年六月二日上野練兵場に於ける歡
 迎會。

(下) 行飛樂同空低
 (てに宮部字日一十月六年五正大)



と スミスの中行飛
 (上) 機受其



(419)

に覆い雲物ふ覆を市全東京座黄、米二十三に實速風はに折の行飛の度再てに京東に森。たへ興を動衝な常非に界行飛我は朝來の氏スミス・トーア家行飛年青國米の朝來月六年五正大
 さ高の米百五千四空上所御山青時二後午日四月六。たつ贈をルダメるたし入候を個二十三ドンモヤイダてし激感に大は會協行飛、たじ演をり返宙の回数中風暴てし陸離を場兵練山青
 。たつかなはのもたれさ愛に人國我福氏スミスがたつあ山澤も家行飛人外たし朝來。たつ賜を封一金りよ下陸上今しに在に子太皇じ演をり返宙の回九で

朝來の外人飛行家と民間飛行界



米國飛行家チャンピオン



萩田氏のモーター車「羽風號」



磯部海軍少佐のレンブラー飛行機



大正八年一月下旬來朝、二月一日東京洲崎埋立
場にて曲飛飛行を行った。



ルイス・ロイ夫人(中陸左端)

スタスソン機(大正六年四月來朝)



一 東京大阪間郵便飛行
一 賞賞者佐藤章と愛機



坂本壽一の坂本式複葉機



高左右隆之の高左右式複葉機



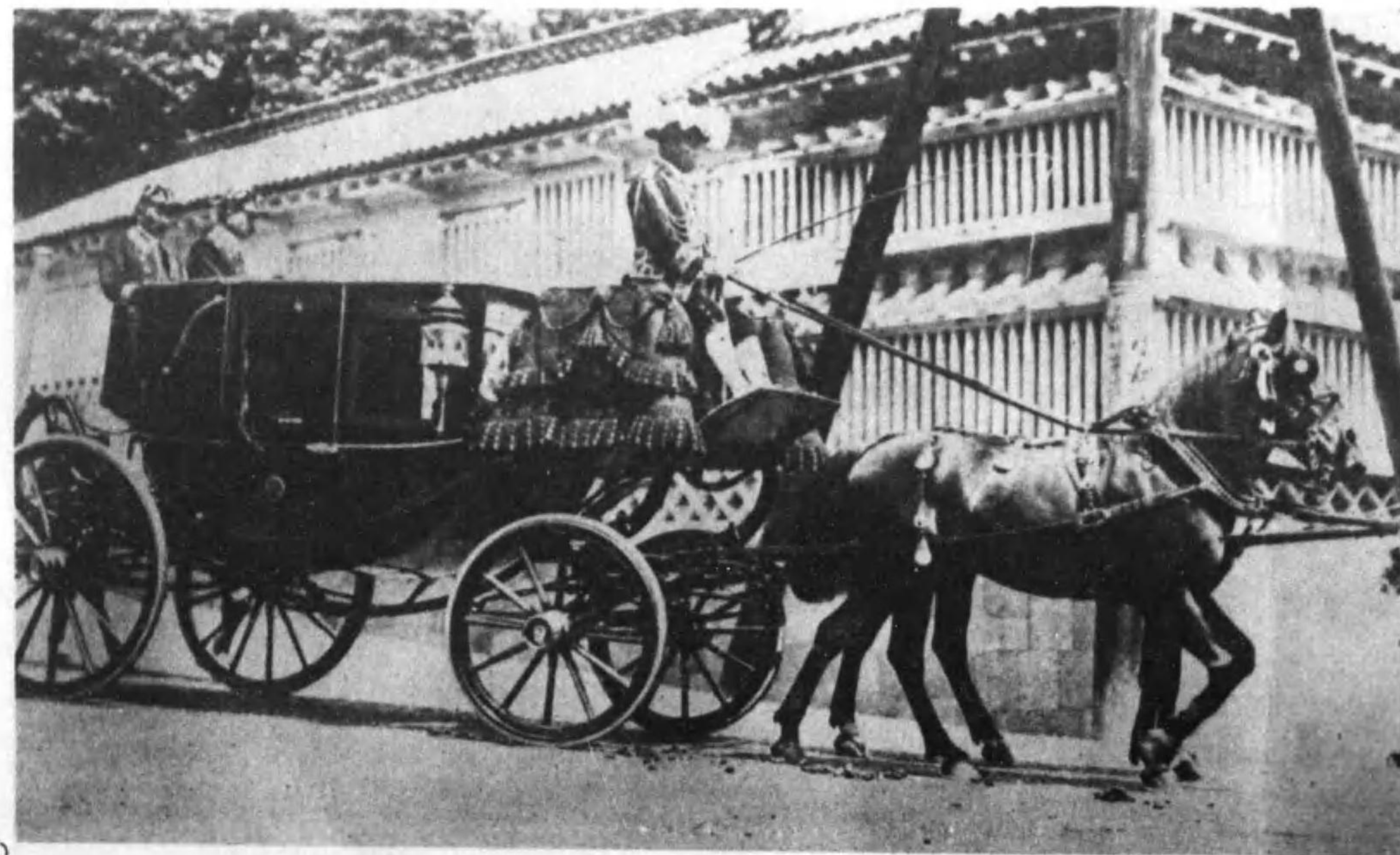
米國曲飛飛行家チャールズ・エフ・ナイルス(上)と大正四年十二月十一
日青山練兵場に於ける得意の宙返へり飛行(左)

。たしを歩進な速急も間民は接聘招班行飛佛英で軍陸年八正大に殊れき滋刺に行飛機上水の妻夫ターオウ・トンサ年同。朝來のスマ・トツバ人米月三年四十四治明は界行飛の本日
界行飛間民らから發の等式岸、式原真奈方一りと朝來のソオビヤチ。人夫ーロ、機ソソソチス。スミス・トープでい次、じ演を行飛曲曲てめ初てに山青に年四正大がスルイナ人米
。たつなと着一の氏章藤佐で分八十時三間時要所し加參氏三の耶太豐縣山、尉中田水、章藤佐び及に行飛更部回一第間阪大京東の日二十二月二十年八正大。た來てしを躍活に大は

朝 來 御 の 下 殿 王 李



(日九月六年六正大) 發出御山釜の下殿王李



(421)

陸時十前午日四十、上の息休御は日三十れらせらあ御着に京東日二十月六、發出御山釜にて前肥艦軍分十三時八前午日九りあ發出御城京日八月六年六正大爲の何率機天は下殿王李
。たつなに國歸御陸上御山釜日八十二同後の覽遊御内國がたつなに館歸御分十三時一十前午れらせらあ謁拜に后皇てに間の欄に更、謁拜に皇天てに間風内參御てに裝正御の將大

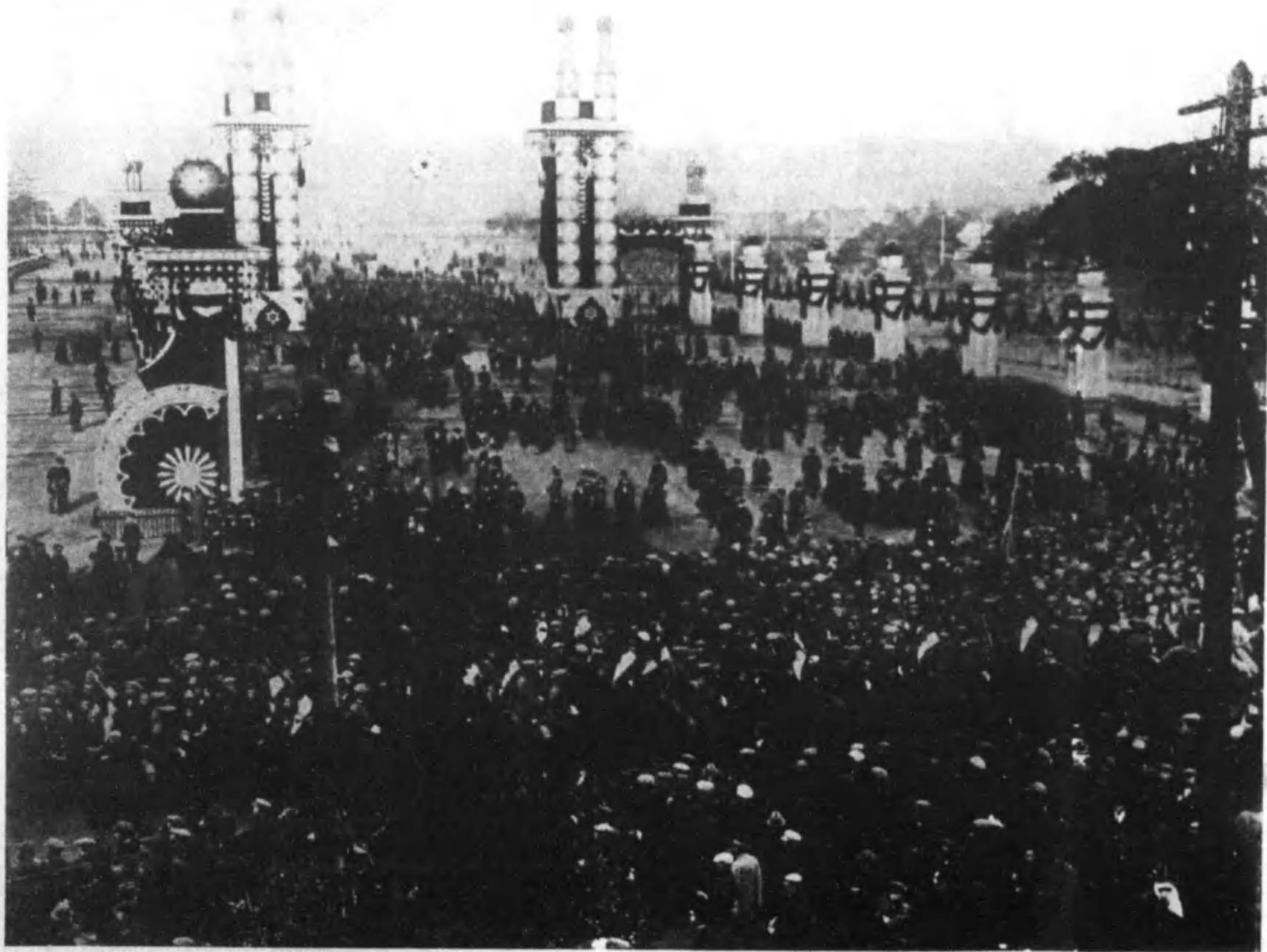


下殿王李の朝來御

内參御の下殿王李、左
様有の通通御近附間ヶ置、内參御時十前午日四十月六年六正大

禮子太立の王親仁裕

(日三月一十年五正大)近附門先場馬の日當禮子太立



下殿王親仁裕宮進の日當禮子太立
(るさ召を袍御殿開丹、儀馬直空)

奠 都 五 十 年 祭

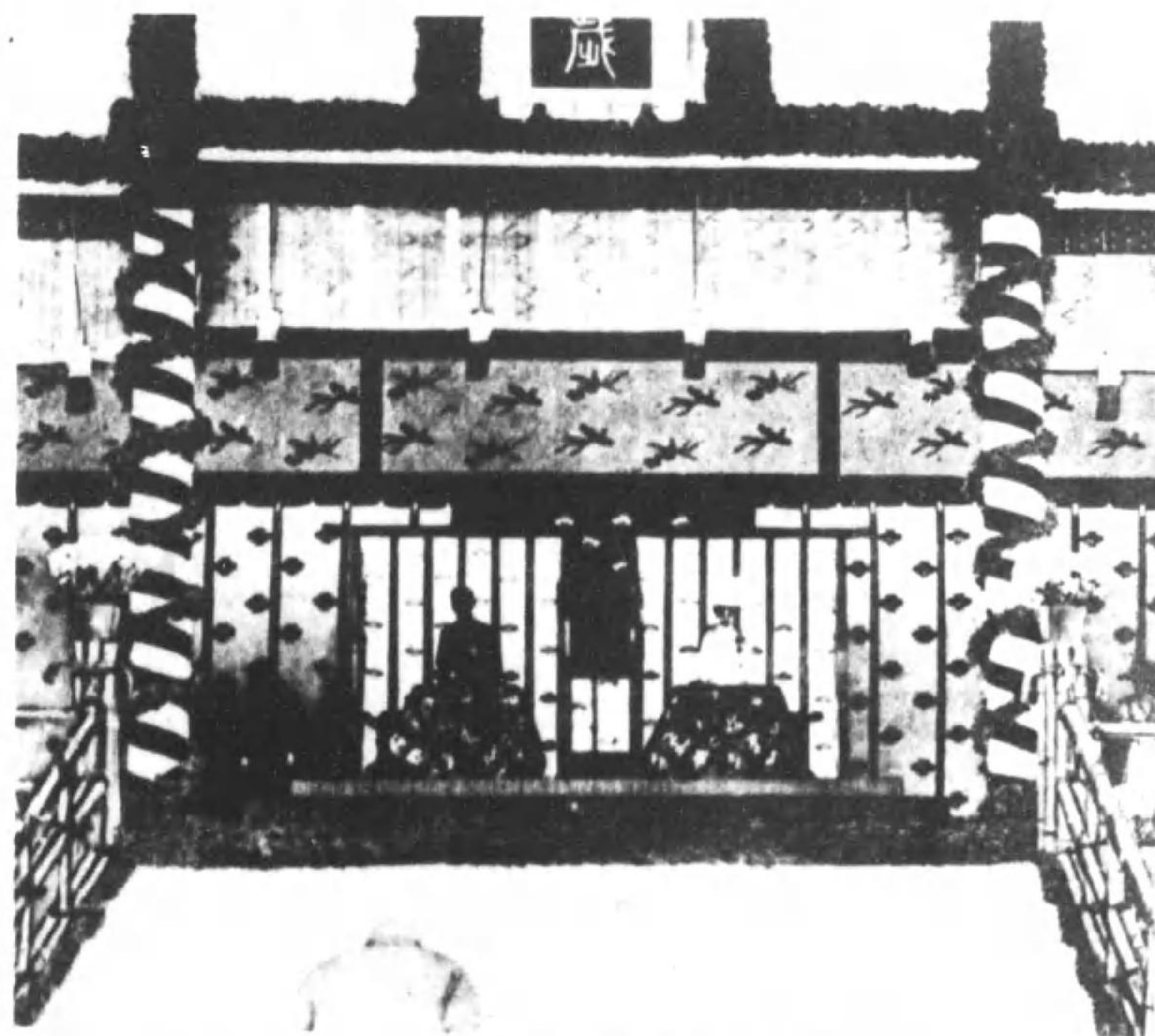


長市尻田。吏外岡長。相農木山りよ右。宴祝大市京東

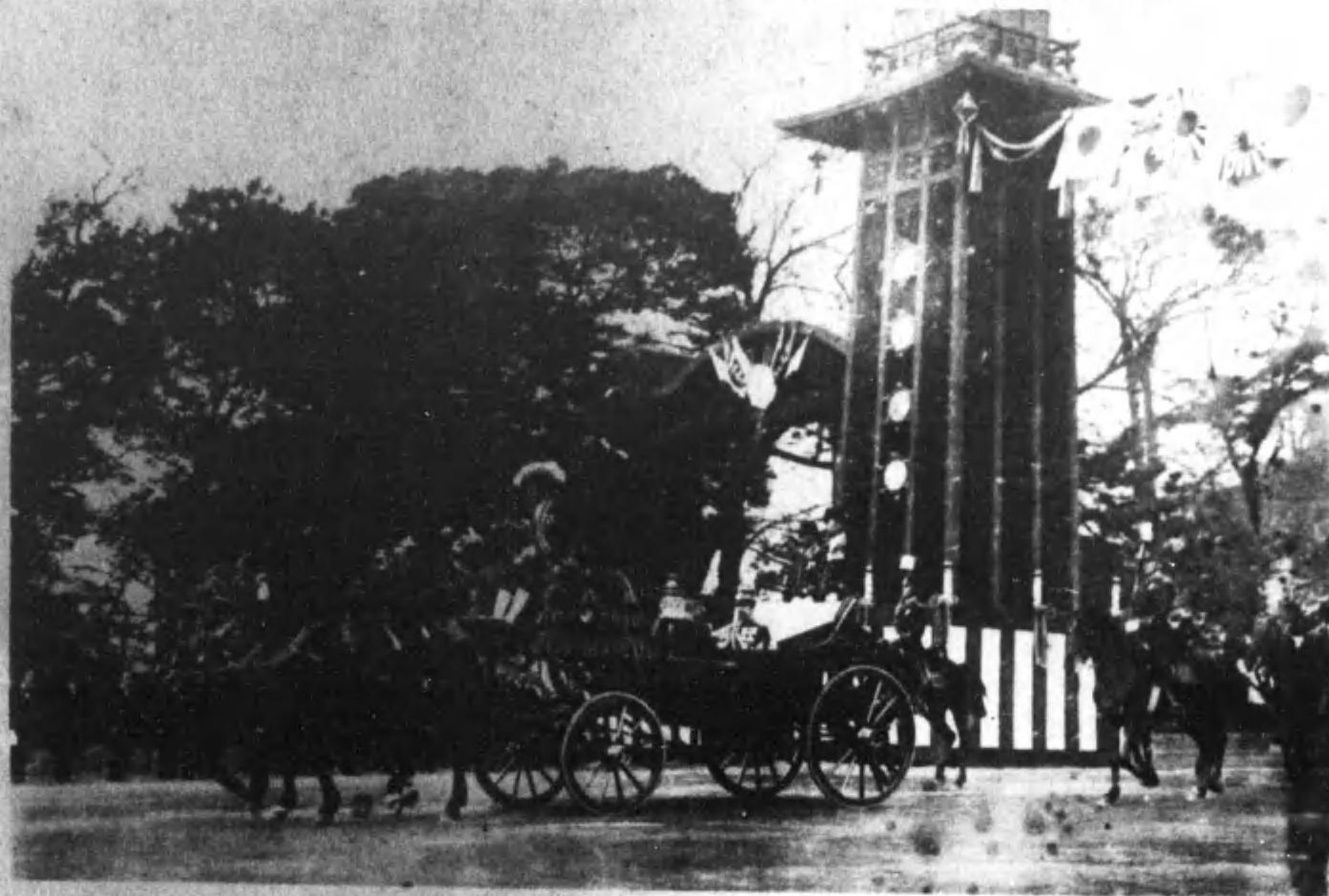


列行名大の前驛京東

(長徳侍町親正は衆陪御)皇天正大ふ給せは向に場式式賀視野上

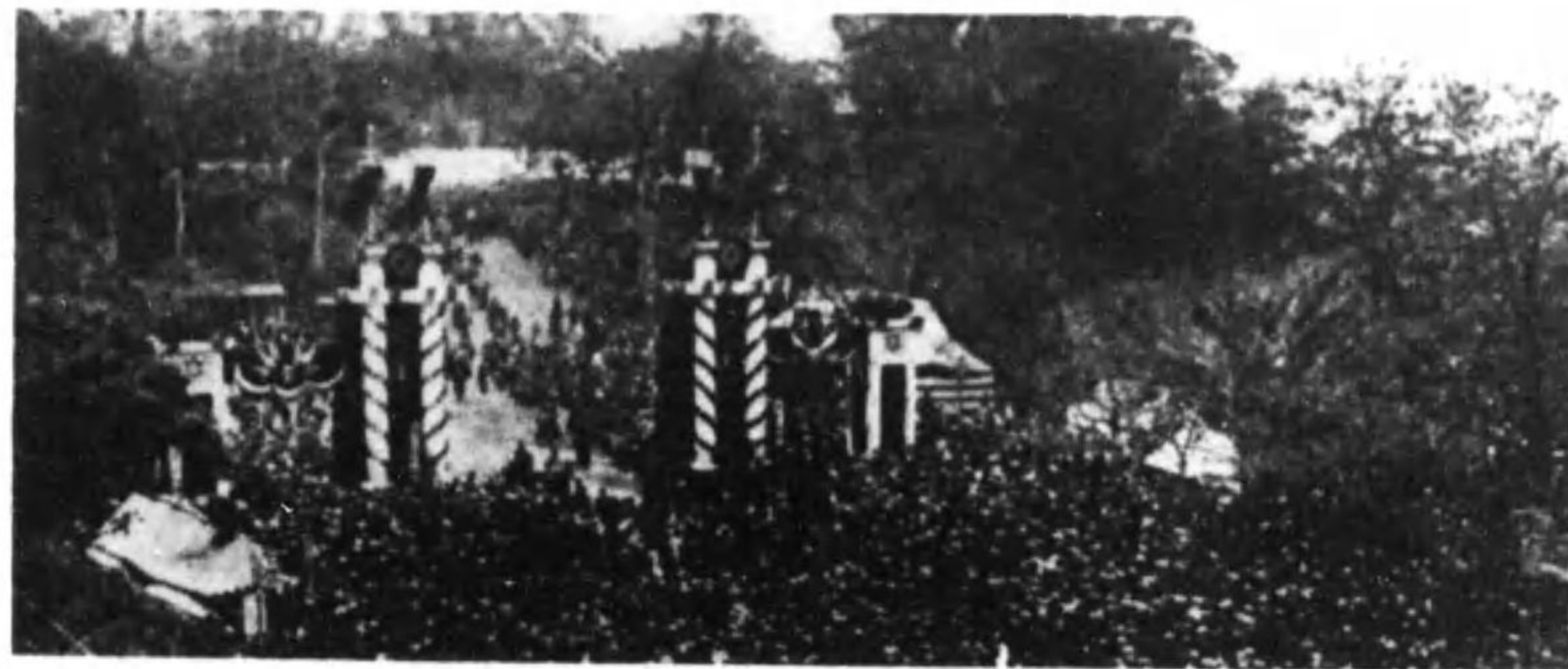


下陸后島び及皇天正大るたれらせらあ御臨に場式式祝奉市京東公野上、上
氏部次相尻田長市京東はるせ爲を禮敬最に前御
聞 雜 の 前 園 公 野 上、下

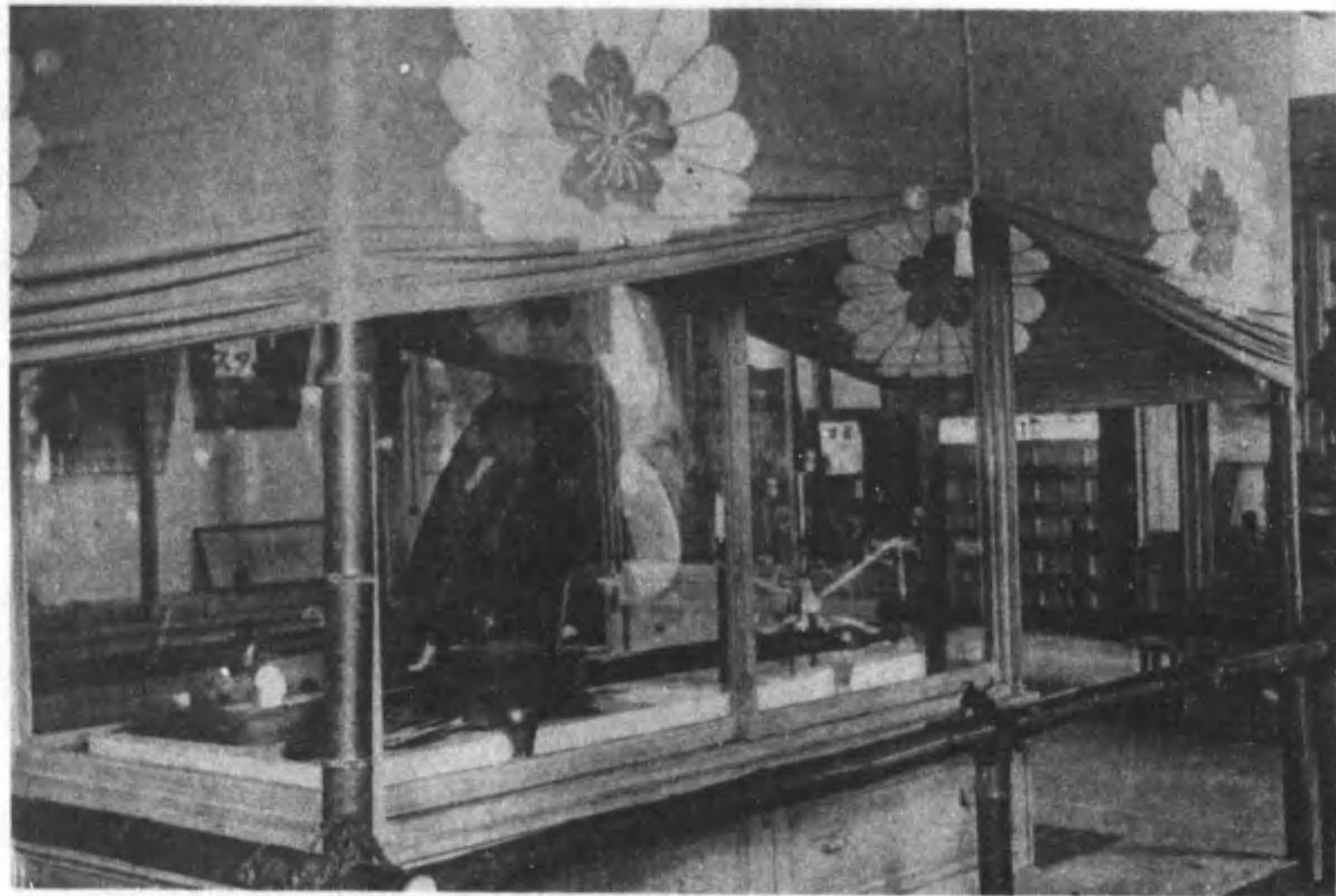


(423)

は向へ野上て經を橋本日、口芝りよ谷比日。門出御城宮時九前午は下陸后島び及皇天正大日此。たれき能に大盛てに場式祝奉市京東公野上日九月八年五正大。は祭年十五都奠の市京東
人たせ寄し押へ野上爲の物見興餘び及製拜雜風、でのたつあが興餘の々種他其び及列行名大は日常。たつなに啓幸還御くしは麗顔龍ひ給せさけ愛を詞賀りよ及市京東尻田。れらせ
たし會散に午正し唱三を歳萬の市京東は相農木山、唱三歳萬の下陸兩長市尻田り移に宴祝大後式。たつあで様育きなも地の錐立に眞は聞雜の後式時一十前午、れらせ註と人萬百に實



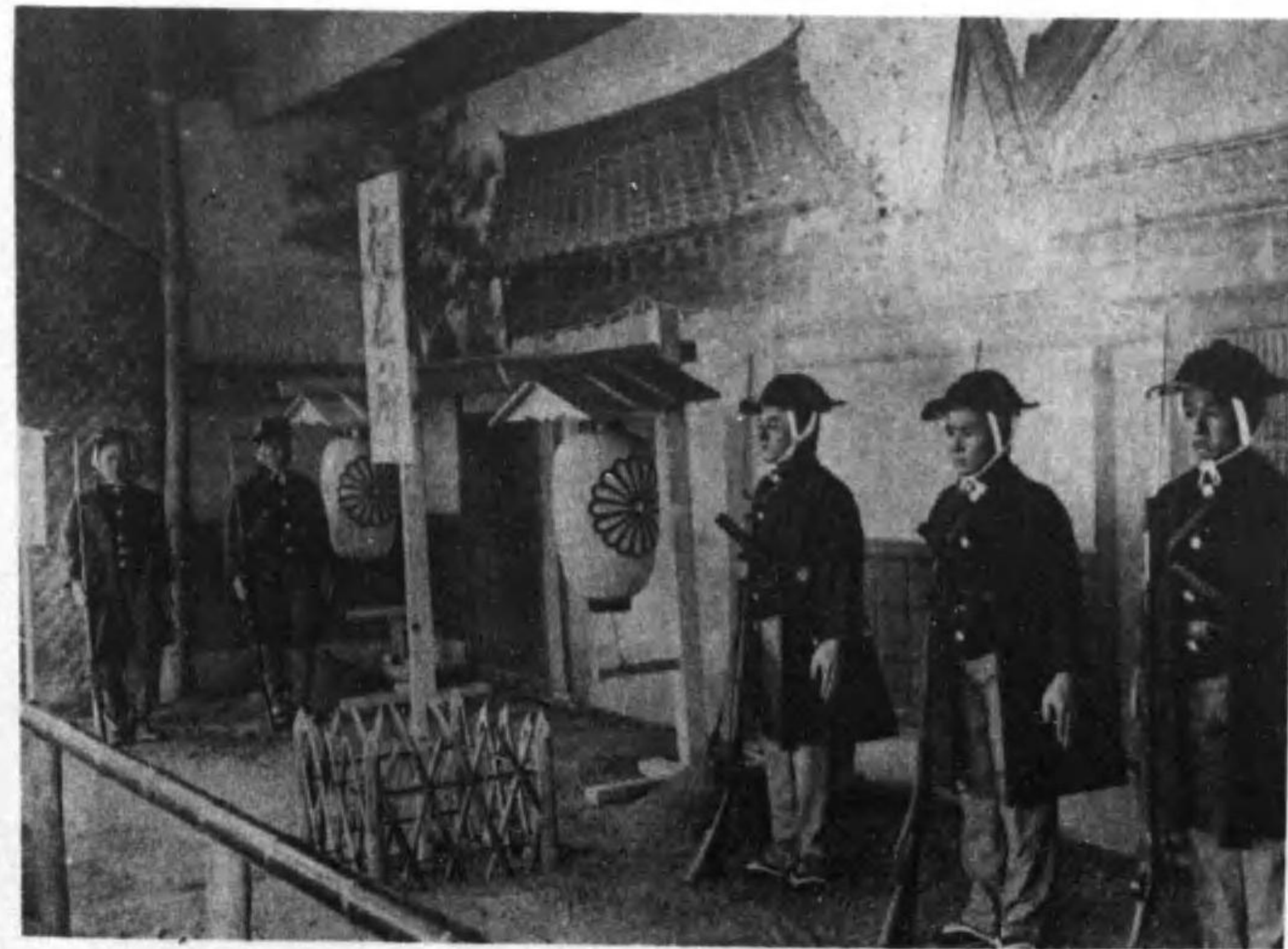
會 覽 博 祝 奉 年 十 五 都 奠



右、奠都五十年奉祝博覽會全景
大正六年三月十五日より五月三十一日迄開會
左、第一 宮内省の御下品を陳列す



シオラマ「東海道芝生村外人拜観」
程ヶ谷と神奈川宿の中間にある一村落にて横濱在留外人に限り御東幸御行列を拜観せしめられたる有様（芝生村は後の横濱市浅間町である）

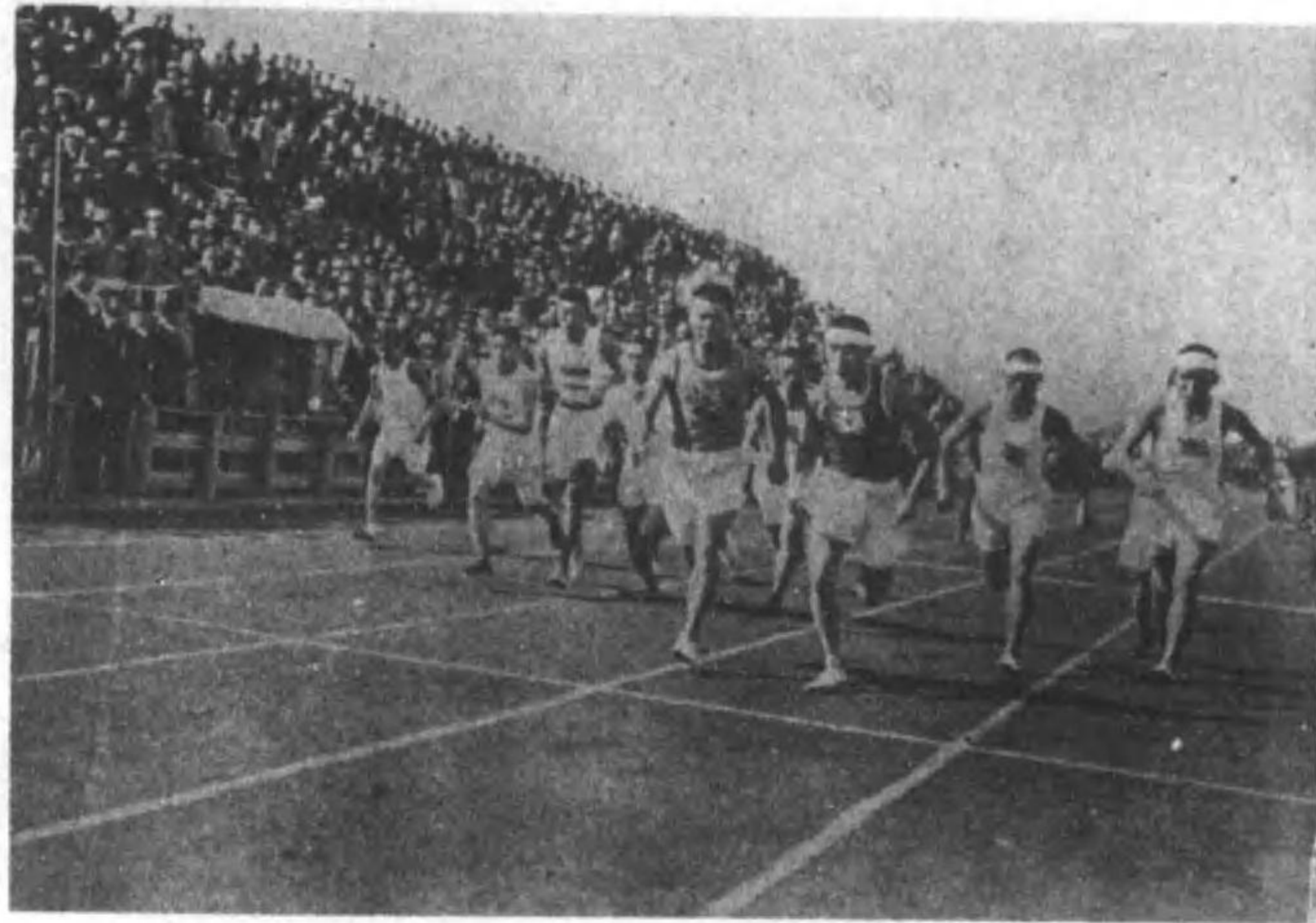


シオラマ「草津宿行在所」
明治二年三月七日行在所となりたる本陣田中七左工門宅に御繁奉迎の有様で此家屋は今尚存置せらる。

(421)

が描か様有の臨京東りよ都京てつあ景六十二がマヲオジの幸東御ばれ入を門正の型機門禮建。たれさ會開に端ノ池野上迄日一廿月五りよ日五十月三年六正大は會覽博祝奉年十五都奠りあが下貸御の他其献文るす關に帝大りよ方族皇各め始を省内宮はに館考藝一第又。るあて伯露柳芳田姓五は者筆。たつあて物び呼の一隨で評好に常非めしらす佛彷彿の時當てれ。たつ居てし穢山が料賣きべす重珍

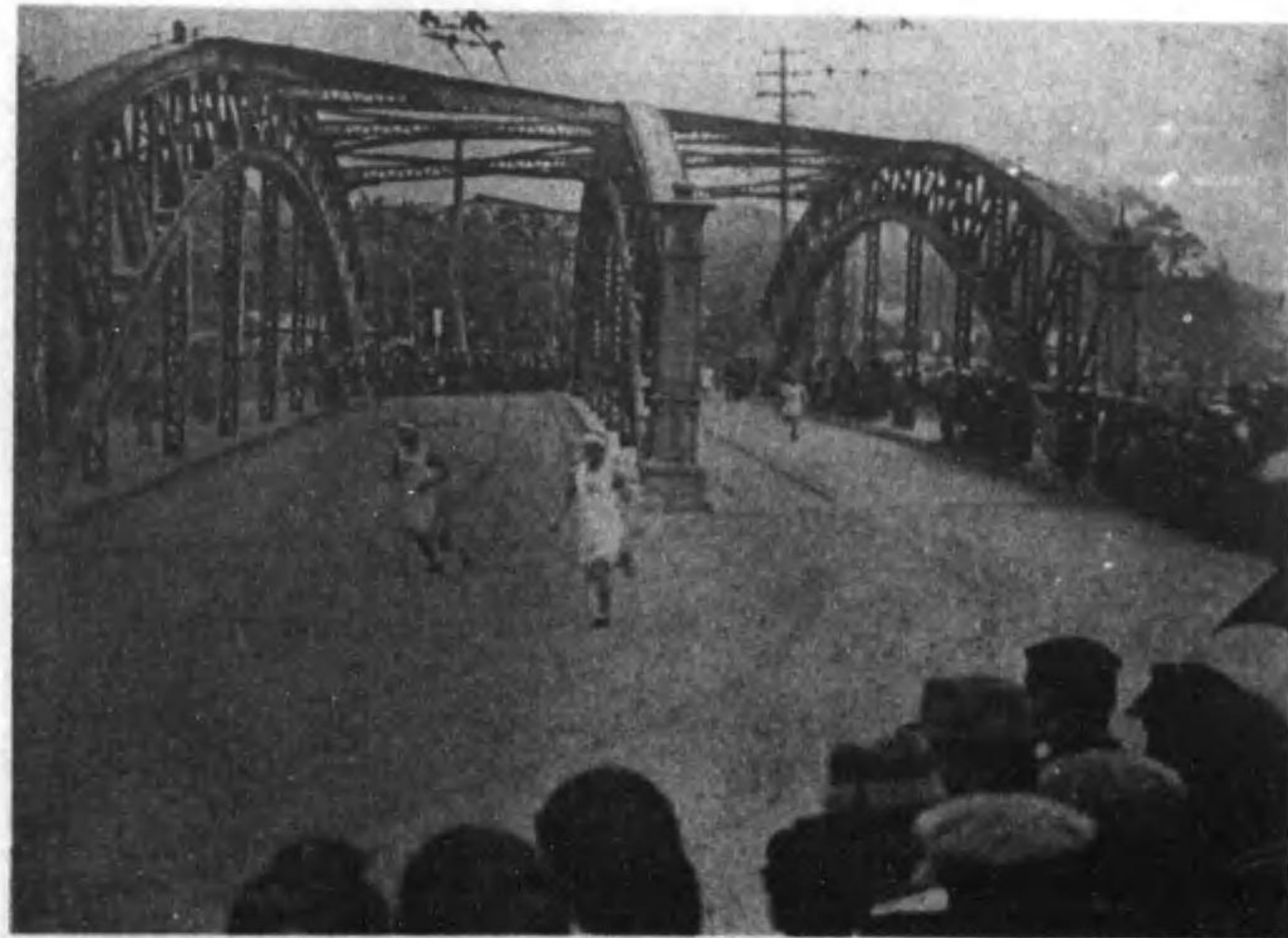
(一) 會大クツピンリオ東極回三第



(會年青江松等一)發出のソソラマ縮短哩十日九月五
一の分五秒七十五分五十五市源本橋



と式場入會大クツピンリオ東極回三第るけに浦芝日八月五年六正大
辭の會開の伯隈大長會譽名



(市源本橋着一) 過通橋鐵山ツ八川品 。ソソラマ哩五十二日二十月五



技競本球排ソソラマ対那支日一十月五
(軍勝支)



勝決泳水のドーヤ十二百二の日二十月五

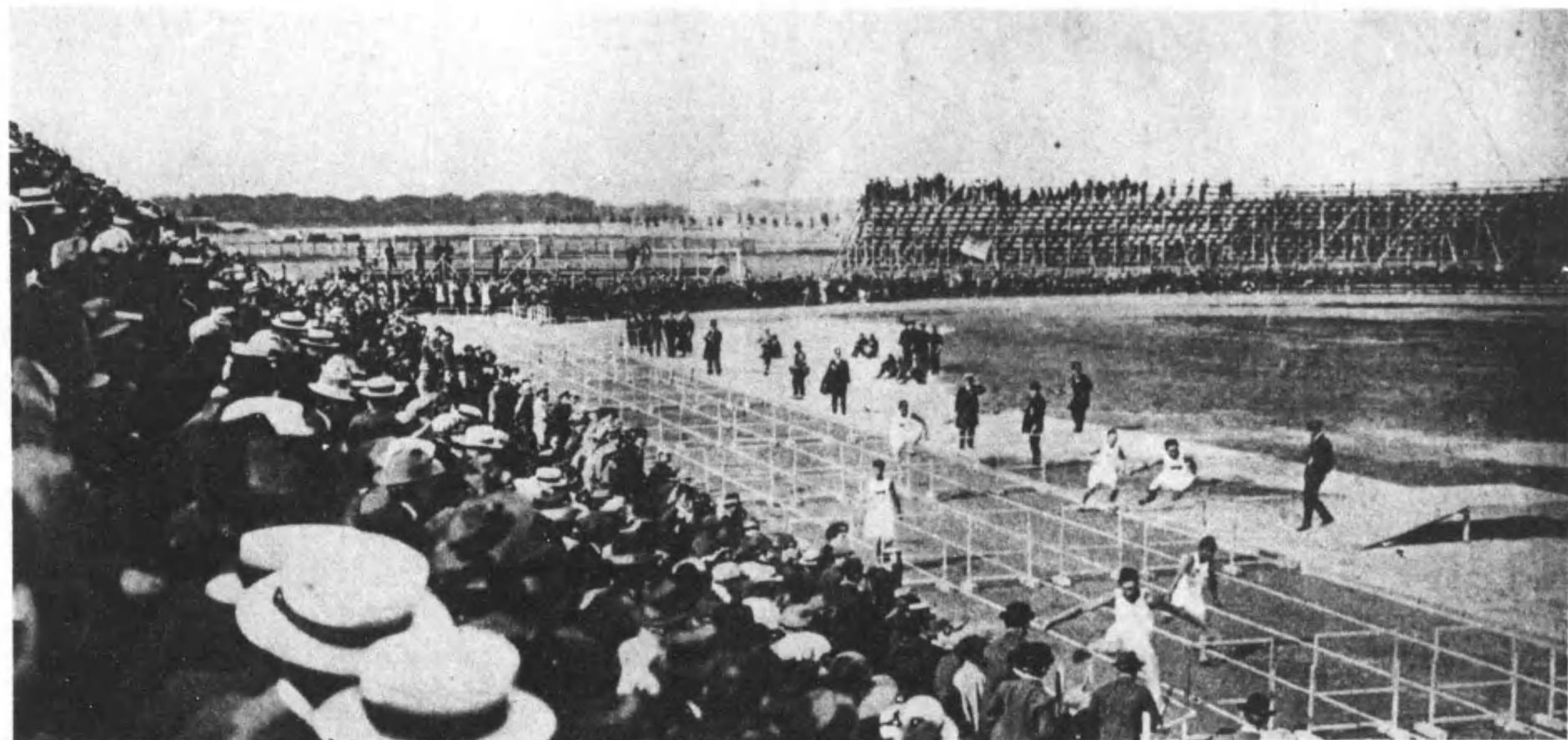
(425)

大は長會譽名れば行でムーエヤタス設急の地立埋浦芝迄日二十りよ日八月五年六正大は會大次三等で技競るれき備に年隔に間年青國三ソソラマ及び支、日は會大クツピンリオ東極
が技競大てつをも辭の會開の伯隈大ひ行を式場入して勝を旗國各てしと手旗が手運郎西儀久多の本日び及鈴奎施の那支ヤイバラの島ヒ時二後午。たつあて氏郎五治納加は長會。伯隈
冠榮の管一第にソソラマ哩五十二、哩十が君市源本橋の會年青江松。たつ行を式會開事無に日二十で會盛な常非てめ埋を場衆觀の祿萬二で晴快の好絶てれ晴雨の來夜日此。たれか開
。たつあて丸評て得を

(二) 會大クツピンリオ東極回三第



(師高)吉能藤壽、等一投槍
。十五上水又は氏同。時六呎三十四百
。るなと等一もに方双のドーヤ百



百二十ヤード・ハイ、ハードル決勝
第二日目の百二十ヤード高障壁競走であつて一着比島選手ラマヤ十七秒
五分ノ一。二着支那選手張信宇十七秒五分ノ二。三着比島選手ロザダ・
十七秒五分ノ四。



(426)

スレバルア、等一げ投丸砲
(島比)。ラニマカ



郎四儀久多、着ーレロ星一
(學中一第知愛)



彌一谷熊勝優スニテ



祥慶真、等一飛高走



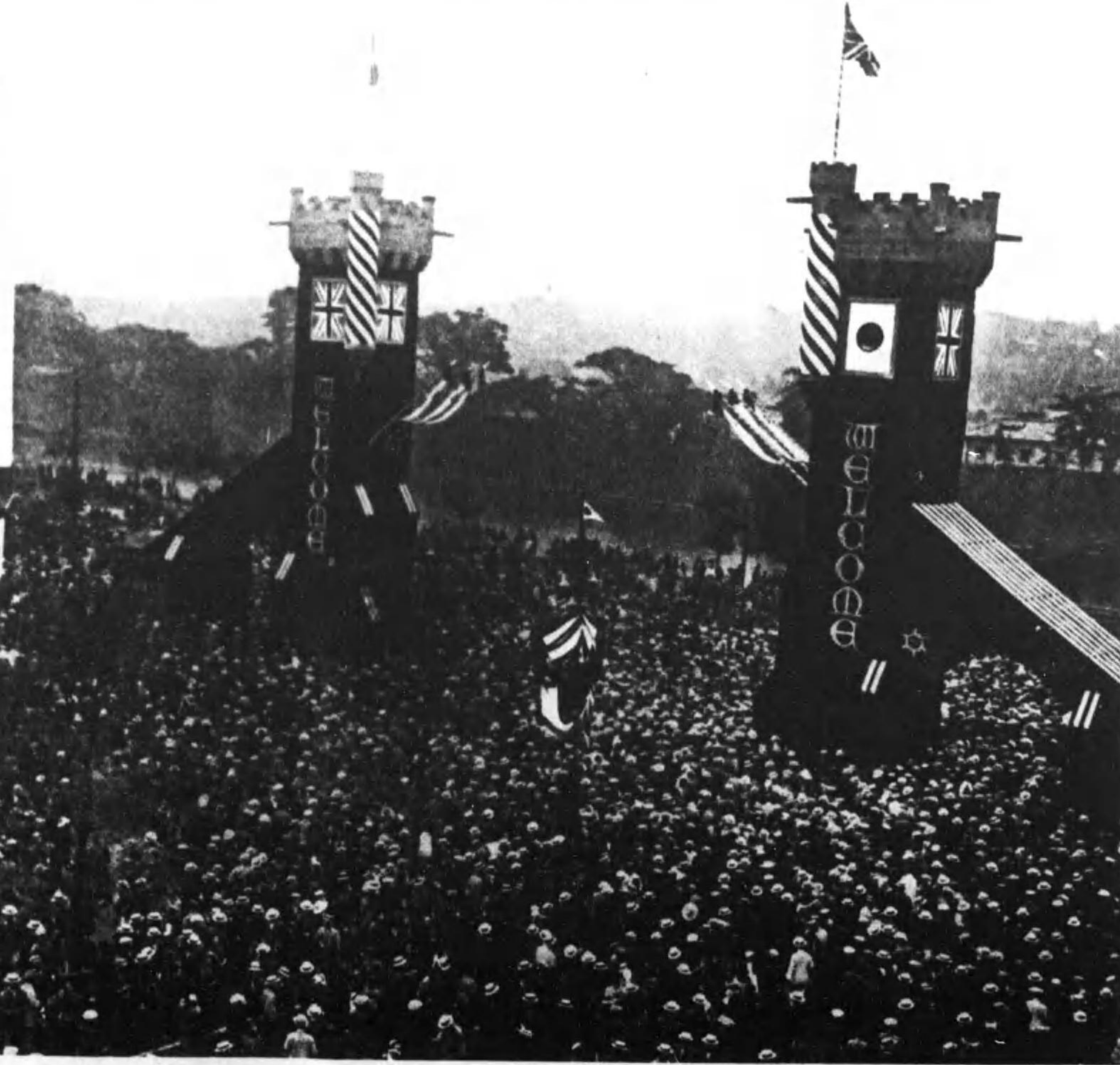
十八百八び及ドーヤ十二百二上水
(大農機札)。保正田内。着ードーヤ



着ーソソラマ哩五十二
(會年背江松)市源本橋

朝 來 御 の 下 殿 ト ノ ン コ

民 市 の 迎 奉 と 門 迎 歡 の 前 驛 京 東
し 集 綱 と 門 迎 歡 の た れ ら て 立 に 通 前 驛 京 東 爲 の 迎 歡 下 殿 ト ノ ン コ ・ ア オ ・ サ ー ア 甥 皇 國 英 の 朝 來 御 日 八 十 月 六 年 七 正 大
民 市 の 萬 歳 る た



上、御参内のコンノート殿下
大正七年六月十八日御参京ありたるアトサー・アオ・コンノート殿下は翌
十九日午前十一時接伴員伊集院元帥と御同乗、霞ヶ關離宮御出門、宮城
二重橋より御参内、暫時休憩の後、正殿に参進、中央玉座には大正天皇
御あり、左右には伏見宮以下各皇族殿下、及び山縣元帥以下陸海軍各
元帥各大臣等並列し、コンノート殿下は拜禮の後玉座の階段を昇りて英
國皇帝の御親書を捧呈、次いで海老茶色の高貴の器に納められたる元帥杖
を捧呈せられ、英國々歌の吹奏禮に捧呈式は終りて午前十一時三十分宮
城を御退出になつたのである。

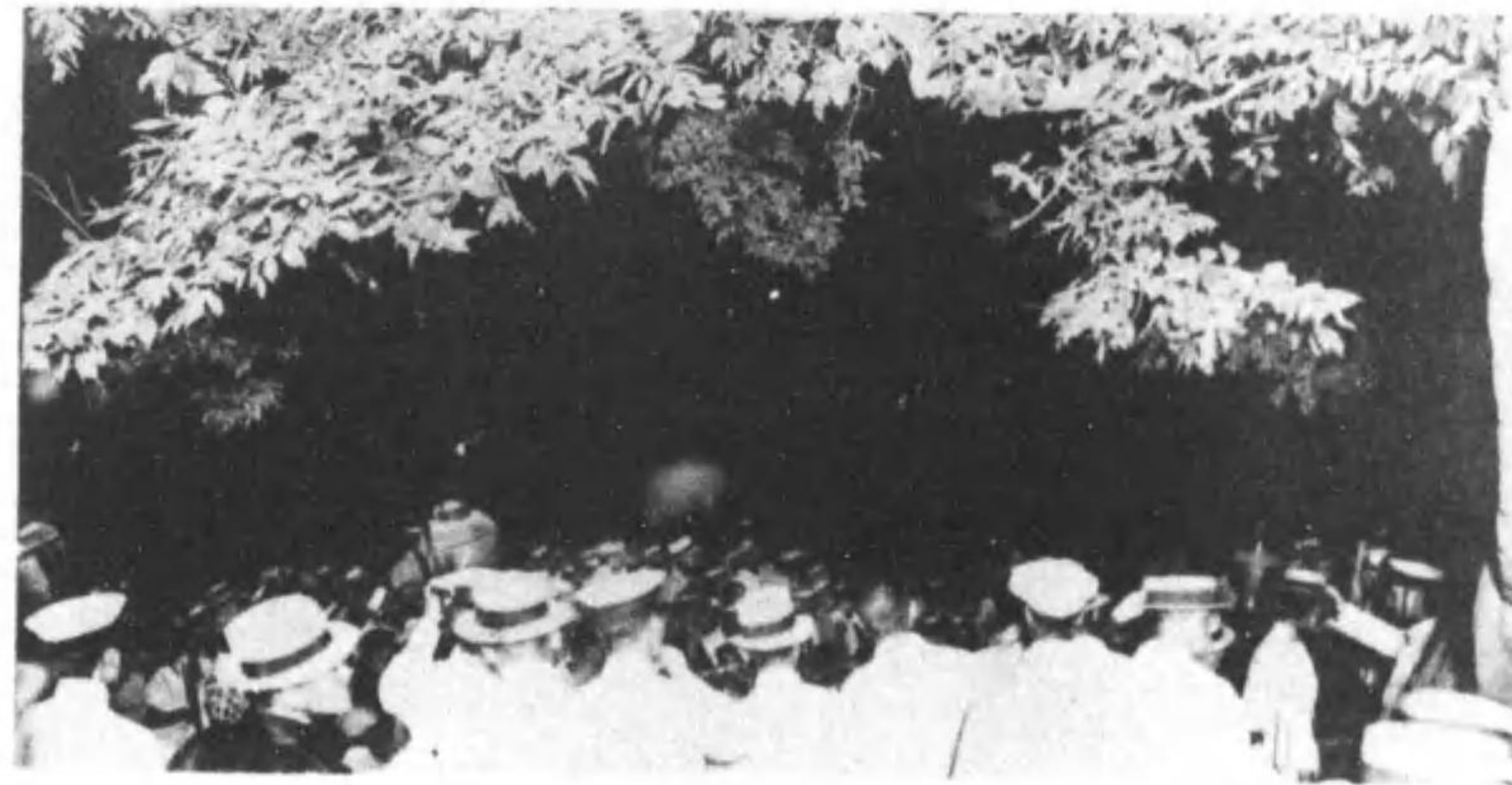
(427)

あ 迎 出 御 に 驛 京 東 く し 親 は に 皇 天 正 大 も く 長、り 着 御 に 驛 京 東 て へ 従 を 員 隨 の 下 以 將 中 イ ネ ト ー バ は 下 殿 ト ノ ン コ ・ ゲ オ ・ サ ー ア 甥 皇 國 英 分 十 三 時 一 十 前 午 日 八 十 月 六 年 七 正 大
な 大 壯 は に 通 大 の 前 驛 し 列 塔 兵 歩 の 團 師 一 第 び 及 衛 近 よ に 道 沿 の 間 の で と 宮 基 關 を 露 り よ 頭 嚮 て り 乗 同 御 に 車 馬 御 と 下 殿 宮 見 伏 東 は 下 殿、ひ 給 せ さ は 交 を 手 握 御 へ る 恣 情 懇 御 て り
築 駒 御 は と 本 日 で 目 回 三 度 丁 は 朝 來 御 の 度 今 の 下 殿、た し よ 深 を 感 御 の 下 殿、し 瀝 波 を 意 の 迎 歡 て し 呼 連 を 『 萬 歳 』 は 民 市 の 萬 十 數 て け かに 道 沿 の 過 通 御 り よ 近 附 此 又 り 門 迎 歡 へ
る あ て 方 き 深

米騒動(二)東京市の恩賜



恩賜券の賣渡(右)外米券(左)内米券



大正七年八月三十日東京市日谷公園警署の警衛



米券を付配する警署の田尻市長



東京府より献上せし外米及朝鮮米



白米巡廻販賣
大正七年八月十三日夜東京に起つた米騒動は十四日に至つて益々不穏となつたので東京府は十五日より外米一升十錢にて、白米組合は内地米一升三十五錢にて販賣した。高嶺は十四日下谷青年義勇團の白米巡廻販賣。

此米騒動の長崎も。此米騒動の長崎も。たつと益々不々益りよ夜日四十ひ藝を店商屋米に團公草邊、橋本日、盛銀りよ環半時七夜間は徒暴、し標傳に東京日三十月八年七正大に途は動暴の方々神阪京
陸皇天又。たつ賣を米るす當相に枚百三千五萬四十二券米賣渡し寫と一テ賜恩てつ以を節長天の日一十三月八は市京東づ先りあ賜下御てしと賣性賑を團萬百三金幣内御はに皇天正大
。たつあて事ふ云とたつ奉に御供の下産爾もく長午正の日三十二翌はで省内宮、し上賦を米鮮朝び及米外日二十二月八は府京東てつよに召恩の下

名 士 の お も か げ



有 森 殿



高 崎 正 風



品 川 彌 二 郎



大 島 圭 介



叔 垣 退 助



佐 木 高 行



三 浦 新 三 郎



芳 川 顯 正



大 浦 兼 武



林 權 助



後 藤 新 平



河 野 敏 鑑



清 浦 奎 香



伊 東 巳 代 治



福 羽 美 静

醫學界の有名士と女流教育家



岩野 金太郎



石黒 忠雄



長 興 宗 直



長 谷 谷 川 泰



橋 本 綱 常



榎 方 洪 鹿



北 条 隆 三 郎



高 峰 國 吉



入 源 進 吉



曾 山 鳳 通



ス ケー ト



ス パークス



(431) 嘉 悦 幸 子



山 崎 房 子



榑 橋 駒 子



下 田 敬 子

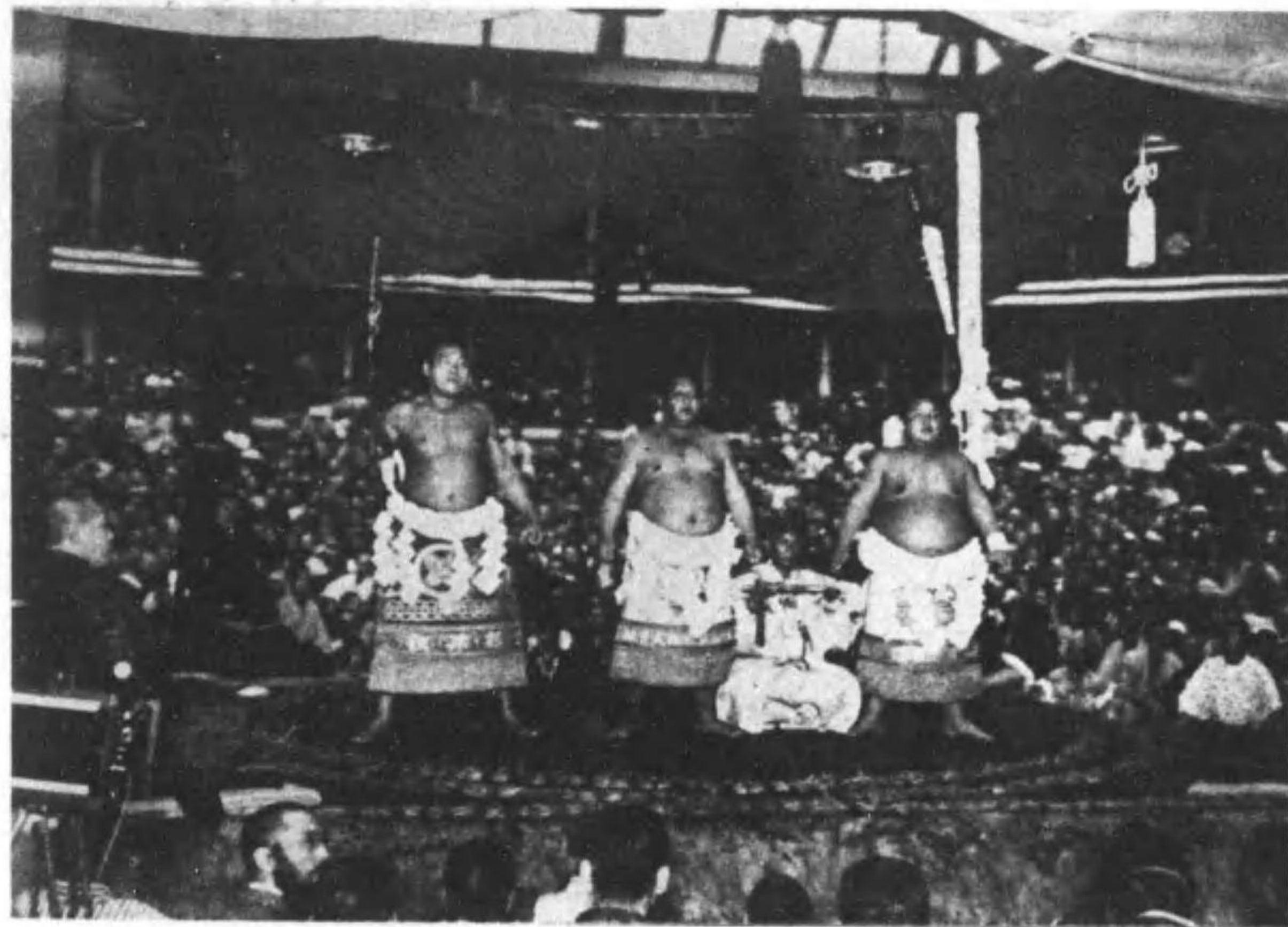


奥 村 五 郎 子

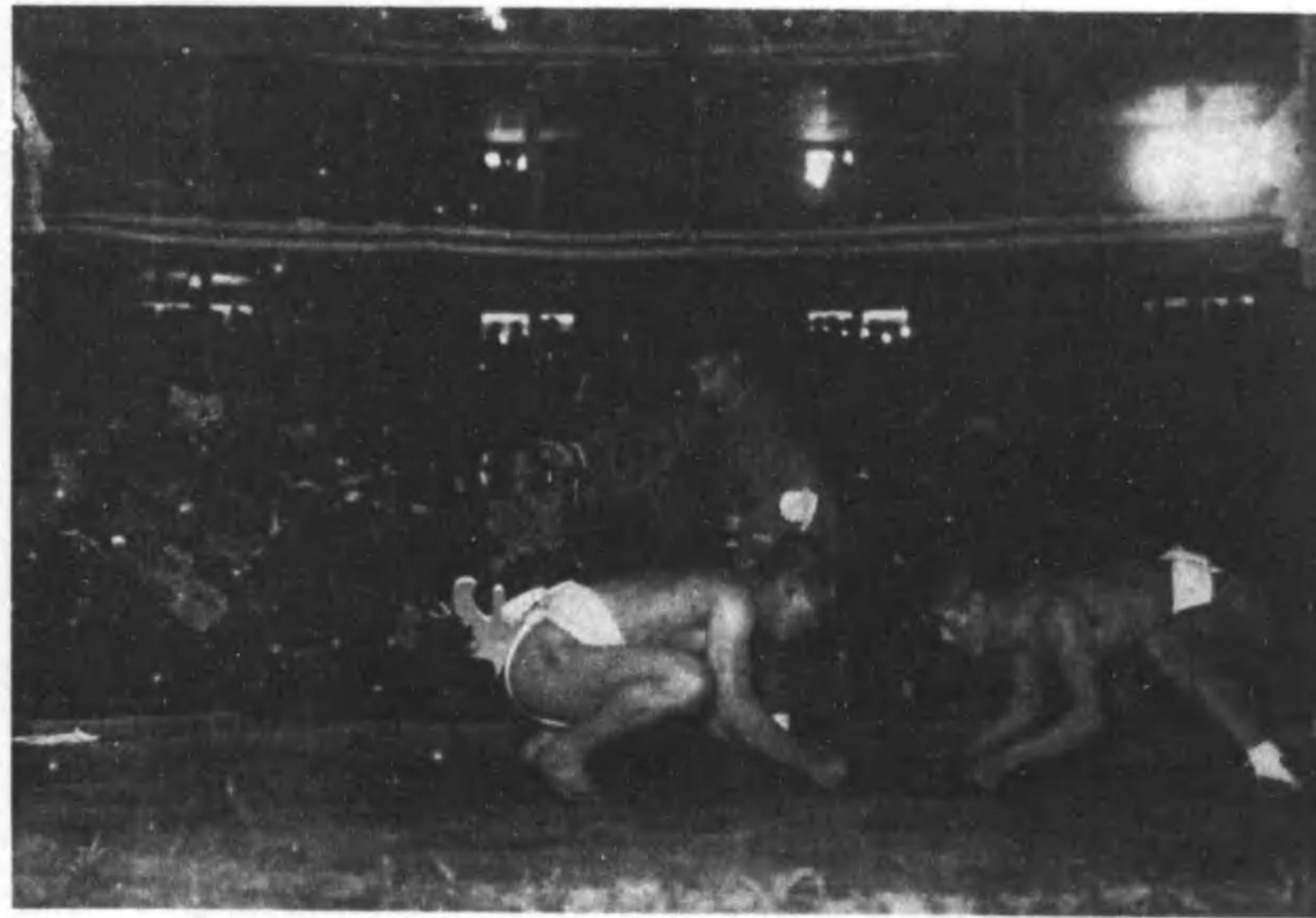


親 所 敬 子

大 正 初 年 の 相 撲 界



村木司行、谷ヶ梅、りよ右。日五十月六年三正大。入俵土の柳横三撰相退引山陸常。山刀太、山陸常、助之庄



加參八十校學門專。十二學中。行舉てに館技園日一月二年二正大。撰相生學回一第。たつあで況盛ふ云と人萬五衆觀。人十七百手選



(432)

公寺王天日九月三年五正大。み込畢阪大の撰相京東。手操のと(五)錦大阪大と(左)錦大京東。會迎歡園

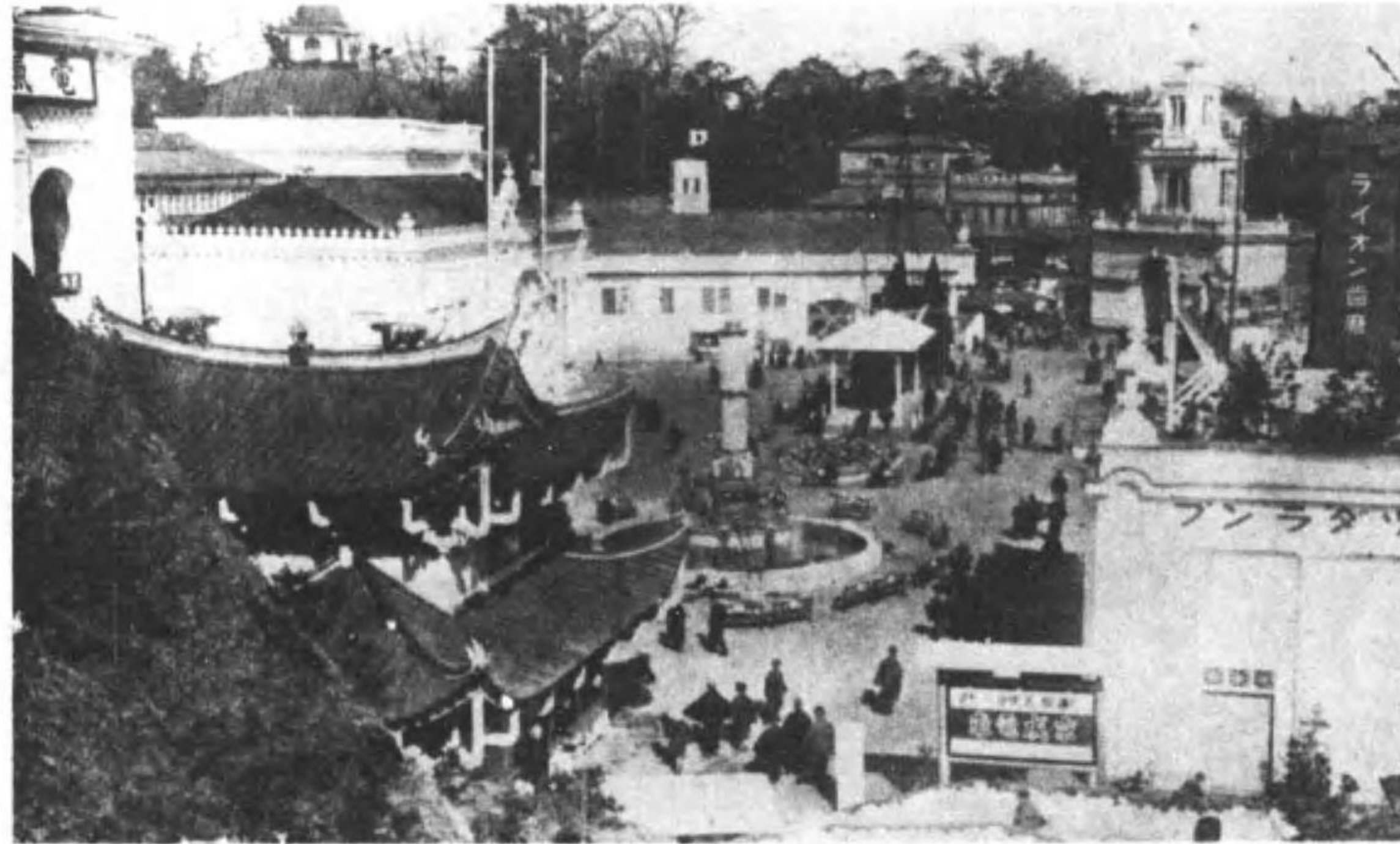


山木術持刀太。日七月三年六正大。り入俵土の錦大。陸常小拂露、太勸し出呼、錦大、夫太錦司行



(寸寫てに邸自)日七十月二年四正大。り入俵土の風。耶太勸守式司行、戸柏持刀太、濱船御ひ拂露

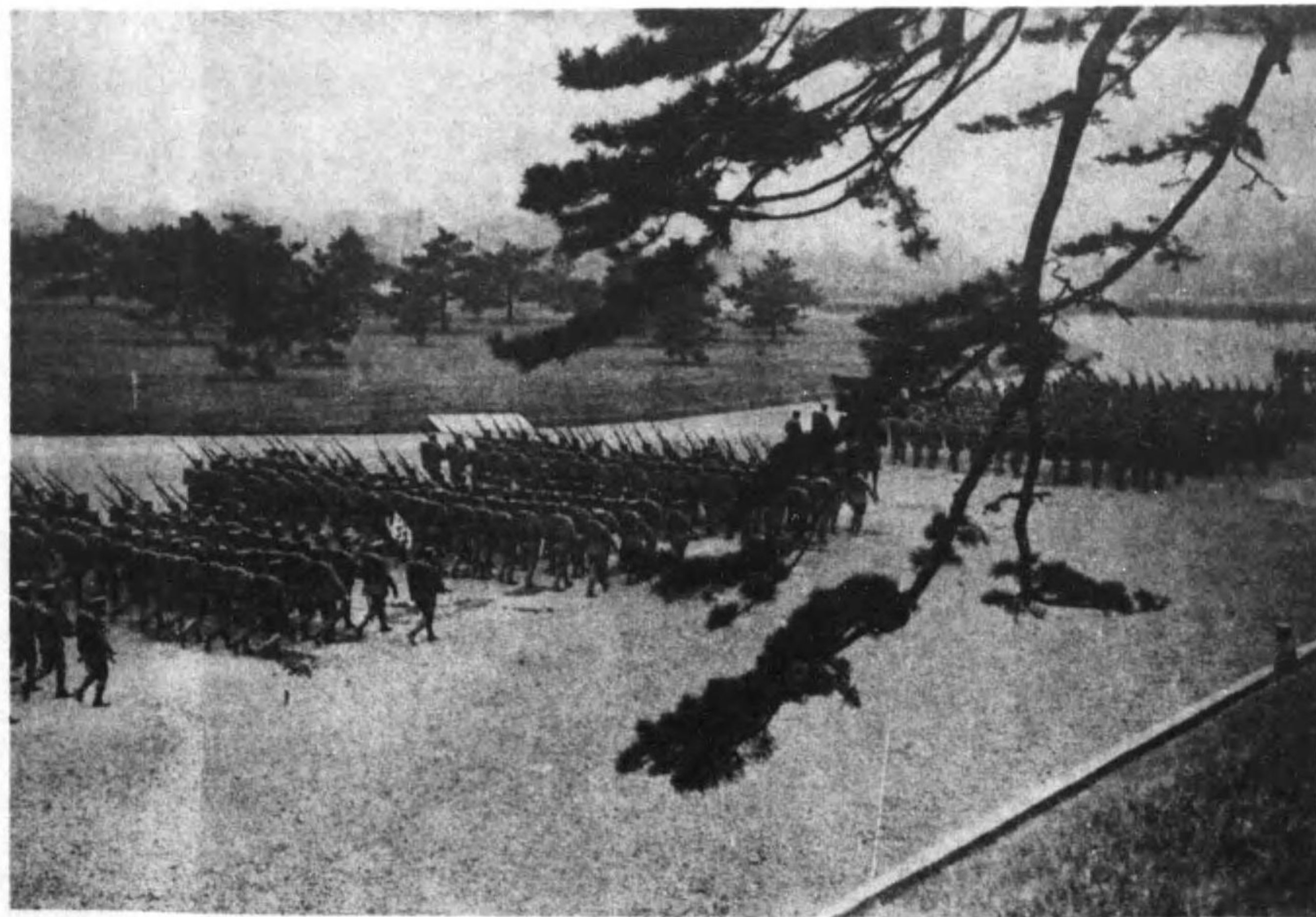
宮城前城の觀兵式・大隈侯の文士招待



下、宮城前の觀兵式
大正七年一月八日の宮城前外苑に於ける陸軍始大
觀兵式。
左、電氣博覽會
大正七年三月二十日より上野不忍池に開會された
電氣博覽會。



右、大隈侯の文士招待
大正八年六月十四日大隈侯邸にて
中央侯爵、其左、建部博士侯の右は小守菊子、三津木貞子、
の藤正宗白鳥、貞子の後上司小館、建部博士の後は岩野池鳴、
上、古式蹴鞠の復活
奉讓會にて大正七年四月公開せるもの。



大日四十月六年七正大又。たつなに親親御てれさ召に「鳥豊」馬愛仰は天正大れは行で場廣苑外の前橋重二には始軍陸の日八月一年七正大がたれは行で山青は又木々代坂大は式兵觀
園西に前はてしと者學文がたじ論を來將の藝文我てし待招に邸自を者學文るたし筆執來以號刊誌同でのす當相に年周一月六年八同し行發を「觀大」誌雜刊月るす宰主の分自は侯隈
たし從を總發の遊斯てめしせ活復を就蹴式古り作を會讓奉が族率上堂の都京てれさ遊刺に典勃の熱動運の國我後戰大は鞠蹴式古。たつあで會談愚の來以てれらせ待招に會擊雨の公き
るあでの

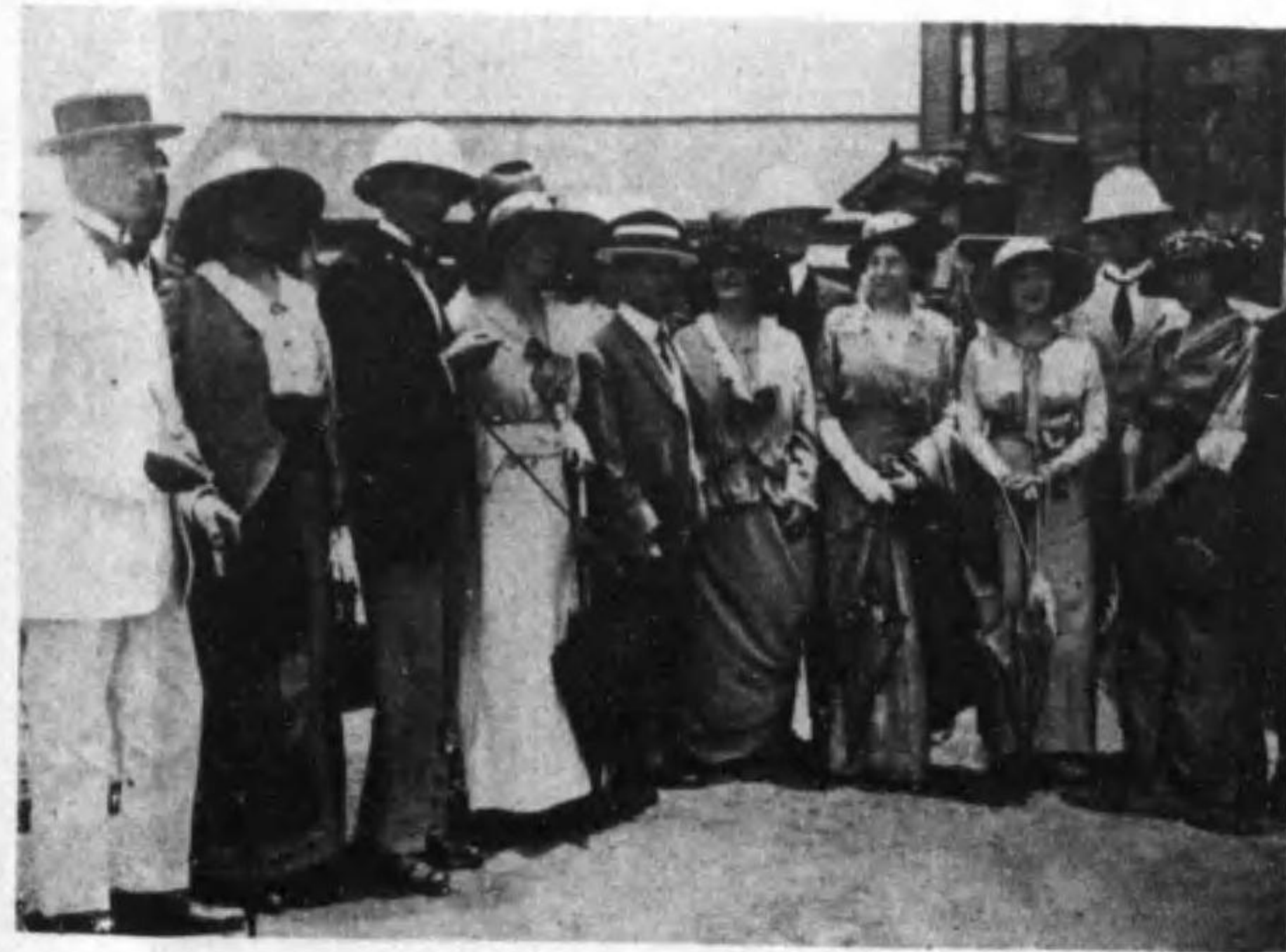
歌劇の全盛時代



寶塚歌劇團「羅祭」(上右)
大正七年五月二十二日より二十六日迄
帝國劇場にて上演
バンドマン歌劇團の來朝(下右)
大正三年六月二十六日より七月二日迄
帝國劇場にて上演
富田山木帝國劇事務及び歌劇團



家庭踊 (上左)
大正八年頃より音樂家田邊尚雄氏の創案せる家庭踊。
右端田邊夫人
觀音劇場喜歌劇「マスコット」(下左)
大正四・五年頃の淺草觀音劇場にて上演。中央清水金太郎、其向つて右、清水静子。左、杉寛。



出演な楚寄り起が劇歌女少に探寶に年末の治明。たつあで形花が史女環田榮で初最がのたれらぜ演が「オエフルオ」のケツルゲてつよに志有徒生員職校學樂音京東年六十三治明は劇歌
郎太金水清、し散解くなも問がたしげ上旗てしと心中を郎太金水清、子信原に坂赤はーシーロ、すか行く旨がたし演を等『野熊』てし聘をーシーロ人ーリタイは劇帝。たし博を評好に
の團劇歌アジロの月九年八正大はラベオの眞し然。たつあで勢るす巻席を街畫映は時一て來出が團劇トツレベオは又ラベオ所る至りなと興勃の熱劇我ち忽ゆるす演上てに草淺が派一
るあでらか朝來

東京驛の開通

中央停車場として數年前より麹町區丸之内に建設中であつた東京驛は、工事全く竣成を告げたので、大正三年十二月十八日開通式を擧げた。該工事は起工以來七ヶ年の歳月を費し、總經費三百餘萬圓、使用職工は七十四萬人を要した。今其の概要を記さんに、停車場の敷地は總面積六萬五千三百坪、木屋は長さ百八十四間、幅十一間より最大二十二間に至り、其建坪は二千三百四十一坪にして、内二十七坪は一階建五十六坪は二階建、其他は總て三階建である。而して南北兩端部には各地下室を有し、其南方の分は二百五十五坪、北方の分は七十四坪、各階を通じたる全部の延面積は七千二百四十二坪である。建物の高さは普通三階建の部分は軒高地上約五十四尺左右八角廣最上部塔の頂部天頭までは約百五十二尺である。停車場木屋の様式はルネッサンス式で、其技術上に關しては、明治三十九年工學博士辰野金吾氏に囑託し、同博士及び葛西萬司工學士の兩人に依つて設計され四十二年十二月を以て完了した。又内部の雜作は四十五年三月に着手し、大正三年三月竣工を告げたのである。斯くの如く大規模の建築にて、其の内容外觀ともに善美を盡し、寔に帝都の玄關を飾る一光彩たるを失はぬものである。

明治神宮御造營費確定

明治天皇に關する神社奉祀調査會は大正二年十二月二十二日勅令を以て之が官制を公布せられ、同時に會長以下委員幹事の任命ありて、爾來着々として調査を續行され、神宮奉建地は代々木御料地内と決定した。此地は元加藤清正の下屋敷であつたが、後井伊家の所領となり明治十七年四月同家より宮内省に献上して御料地となつたもので、坪數二十四萬四千五百二十二坪で、南は武藏野に連り、遠く富士の靈峯を望み得べく、苑内には清冽なる井泉があり、長くも明治天皇陛下には數度御臨幸あらせられ、御遺愛の樹木も尠からざる奉祀する神社名稱に就ては千代田神宮、武藏野神宮等の説もありしが、終に明治神宮と稱し奉り、官幣大社と確定し、祭日は十一月三日と決定した。而して神社の設計は内苑及び外苑を設け、社殿には本殿、拜殿、神門、廻廊、勅使殿、直會殿等あり、様式は日光東照宮香取、平安、兩加茂各神宮、出雲大社、靖國神社等を參照し「流れ造り」中、最も高尚莊嚴なるものを選び材料は總て日本領土内より産する檜の良材を以て素木造りとし、代々木の内苑には泉水あり、樹木あり、之等を利用して、土地に多少の高低を設け、尙ほ三十萬本の常磐木を植え、神殿の周圍には特に丈高き大樹を植えて神聖幽嚴の趣を添へ、神宮前には南北二筋の參拜道路を造り、車道、人道、非常磐木を植え、且つ人道の兩側には杉を植え、又煙害、砂害、火災等を防止する爲め境内の周圍約二里半に涉り土壘を築きて之に潤葉樹を植え、境内に約三百坪の御物殿を設け明治天皇御六十年間の御料品を陳列す。外苑には民間の奉養金を以て運動場、美術館、圖書館、博物館等種々の記念事業を興し又苑内には清砂芝生を敷き、且つ天然的の神苑たらしめ、之が設備として概算百五十萬圓を要する事となつた。

斯て明治神宮御造營費として政府は大正三年十二月十六日左の如く豫算費目を衆議院に提出したるが同十九日貴衆兩院とも滿場一致を以て之を可決した。

大正四年度歳入歳出追加豫算六十一萬六千二百三十三圓(内務省所管)

△神宮々域擴張費 五萬八千九百九圓△明治神宮御造營費 五十六萬五千四百二十四萬圓(内、御造營費 四十一萬五千四百二十四圓△

境外道路補助費 五萬圓△土地買収及土工費 十萬圓)

尙ほ明治神宮御造營費總豫算は三百四十五萬七千三百七十九圓で、之を六箇年度に亘り繼續費と爲す、其内譯項目は左の如し

△御造營費 三百二萬八千九百六圓△境外道路補助費 三十萬圓△土地買収及土木費 十二萬八千四百七十三圓

明治天皇紀編修

明治天皇紀編修の爲め、宮内省に臨時編修局を設置することとなり、十二月一日皇皇令第二十二號を以て其の官制職員を左の如く任命された。

總裁正二位勳一等伯爵土方久元、幹事宮内大臣秘書官近藤久敬、編修長正三位勳一等股野琢、編修正五位勳五等文學博士三宅米吉、編修從五位重田定一、編修從六位池邊義家、顧問正二位大勳位功一級公爵山縣有朋、顧問正二位大勳位功一級公爵大山巖、顧問正二位大勳位侯爵松方正義、顧問正二位大勳位侯爵井上馨、顧問從一位大勳位公爵德大寺實則、顧問正二位勳一等侯爵西園寺公望、顧問正二位勳一等子爵杉孫七郎、顧問正二位勳一等伯爵香川敬三、御用掛圖書頭學博士山口銳之助

大正四年

大正天皇御即位大禮

大正天皇の御即位式は、大正三年秋冬の間に於て行はせらるべき旨、曩に大正二年一月九日公布あり、次で大禮準備委員規則が御
治定され、委員長以下の任命があり。二年七月三十日諒闇明けとなつたので、三年の秋には即位禮及び大嘗祭を行はせ給ふべく、二年
十一月二十二日大禮使を置かれ、翌三年一月十七日を以て即位禮は同年十一月十日、大嘗祭は同月十三日に行ふ事に定めさせ給ひ、次
で二年二月五日に齋田點定の儀を行はせられた。然るに不幸にして大正三年四月十一日、昭憲皇太后の崩御あらせられたるに依りて、
世は再び諒闇となりたるを以て、大禮使を廢せられ、總ての準備も中止せられた。然も曩に定められたる齋田は其儘存置せらるゝ事と
なつた。次で三年四月十二日諒闇の期盡くるに及び再び大禮使を置かせられ、同年四月十九日に至り、勅令を以て即位禮は大正四年十
一月十日に、大嘗祭は同月十四日を以て行はせらるゝ旨、其期日を發布せられた。

〔齋田點定の儀〕 曩に神殿の前庭に齋場を設備せられて齋田點定の儀を行はせられて左の如く勅定せられた。

悠紀齋田 は愛知縣碧海郡六美村大字中島ノ上、丸ノ内早川定之助所有の田

主基齋田 は香川縣綾歌郡山田村大字山田岩瀬辰三郎所有の田

因に、齋田は、大嘗祭を行はせらるゝ際に、悠紀、主基兩殿で天皇陛下が御親ら供進せられる神饌並に白酒、黒酒の神酒を御料に充
てさせられるところの新穀を作る爲めの御田である。即ち此の御田を指定されるのが齋田點定である。

〔齋田拔穂式〕 主基齋田に於ては大正五年九月十七日大祓式を行ひ、同十八日拔穂使河緒掌典を始め香川縣知事若林氏、掌典補、雜
色並に縣廳高等官、大田主參列の上齋殿の裝飾を行ひ、數臺の神饌を供へられ、河緒拔穂使は恭しく祝詞を奉讀し、撤饌後大田主は雜
色十名を従へ齋田に入り稻穂を抜き取り拔穂使の檢分あり之を齋殿に納む、又悠紀の齋田に於ては同月十九日に大祓式を舉行、同二十
日齋田拔穂式を大田主の齋田に於て行ふた。此日拔穂使北郷掌典を初め松井知事掌典補雜色並に大田主參列の上主基齋田と同様の儀式
を行ふた。

〔齋田供納米〕 は十一月六日悠紀齋田大田主先導の下に五箇の唐櫃の中に納めらる一石の米を二基の長机に載せ午後二時大禮使一
木検査官の下に納入せられた。又主基齋田の供納米一石も同様の方式にて十一月七日同じく一石の米を五箇の唐櫃に納めたるを納入せ
られ、兩田よりの供納米は何れも清水式精米機敷島精米機にて精製せられた。又庭積机代物として供進せらるゝ各地よりの獻穀は京都
大禮使迄何れも納入済となつた。是れより先、各地に於ける獻穀田にても夫々机代物積物の祭式が行はれたのである。

〔大禮使と大禮費〕 大禮使の官制は曩に大正二年十一月二十二日勅令を以て發布せられ、其の大禮使任命は大正三年四月十二日左の
如く決定された。

大禮使總裁大勳位功二級伏見宮貞愛親王、大禮使長官公府鷹司熙通、大禮使御用掛(四名)男爵細川潤次郎、同子爵伊東巳代治、同子
爵江木翼、同子爵石原健三、典儀部長伯爵戸田氏共、典儀部次長公府伊藤博邦、調度部長馬場三郎、造營部長片山東熊、車馬部長藤
波言忠、鐵道部長古川阪次郎、主計部長濱口雄幸、長官々房主任(四名)牛塚虎太郎、天岡直嘉、同近藤久敬、同男爵小原隆吉、評
議會幹事(三名)牛塚虎太郎、同馬場鎮一、同吉田平吾

大禮費は三百九十貳萬八千四百二十二圓で此の内譯は左の如くであるが、此外に御内帑金も御支出になりたれば、是等を合する時は
八百萬圓に上つたと言ふ事である。

大禮費内譯

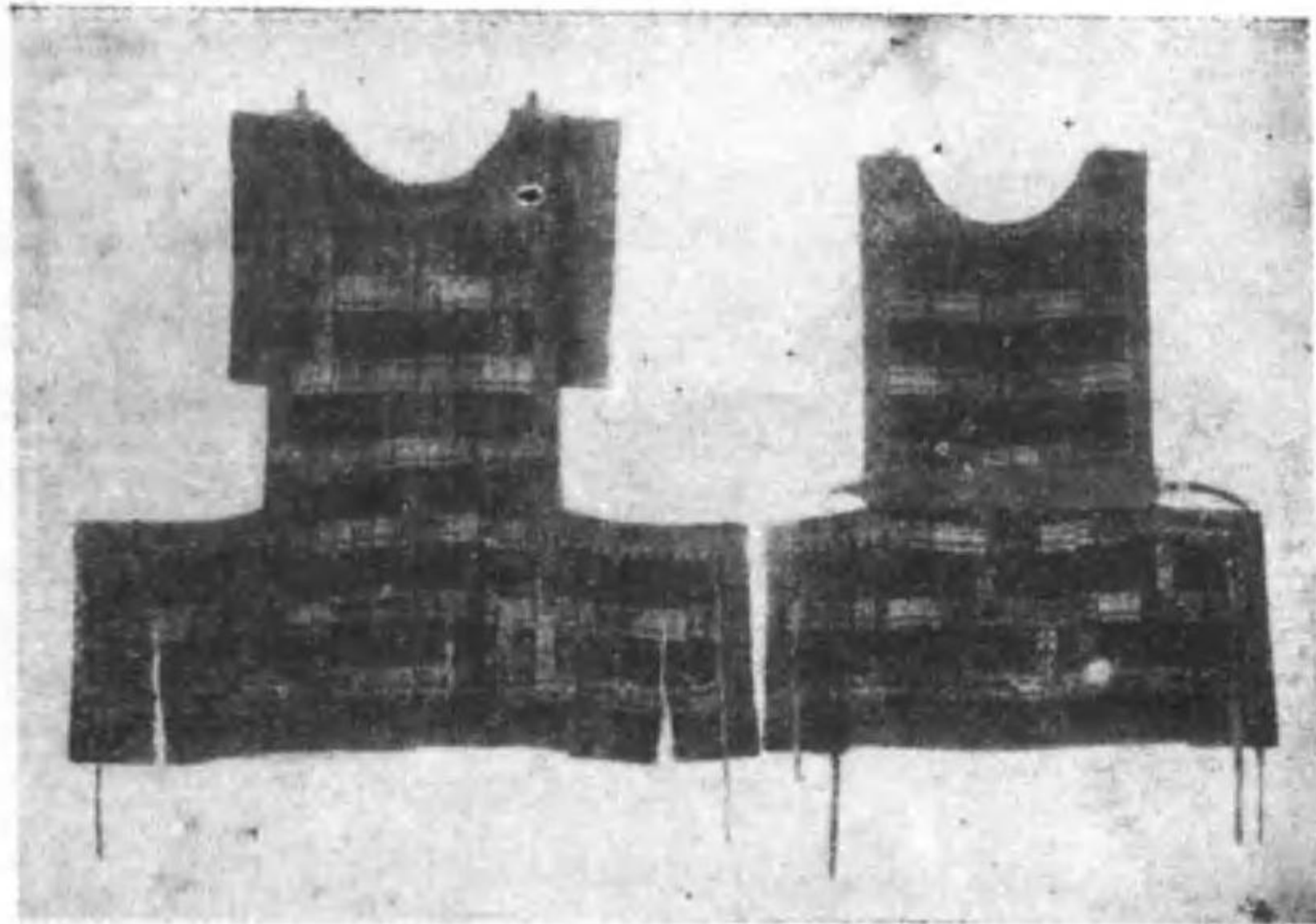
祭典費 六四、七八一圓、工費費 一、二五七、〇三四圓、調度費 一、三七五、〇三三圓、饗宴費 二二二、八〇〇圓、接待費
三二一、一二二圓、諸給費 六九八、六五三圓

〔諸儀式御日取と大禮舉行地〕 御大禮御舉行の期は左の通り決定された。

(十一月六日)賢所奉遷京都行幸之儀、(十一月七日)賢所奉興殿渡御之儀、(十一月十日)即位禮當日皇靈殿神殿に奉告の儀、即位禮當
日賢所大前の儀、即位禮當日紫宸殿の儀、(十一月十一日)即位禮後一日賢所御神樂の儀、(十一月十二日)神宮皇靈殿神殿並に官國幣
社に勅使發遣の儀、(十一月十三日)大嘗祭前一日鎮魂の儀、(十一月十四日)大嘗祭當日神宮に奉幣の儀、大嘗祭當日の皇靈殿神殿に
奉幣の儀、大嘗祭當日賢所大御饗供進の儀、悠紀殿供饌の儀、(十一月十六日)即位禮及大嘗祭後大饗第一日の儀、(十一月十七日)即
位禮及大嘗祭後大饗第二日の儀、即位禮及大嘗祭後大饗夜宴の儀、(十一月二十日)神宮に親調の儀(外宮)、(十一月二十一日)神
宮に親調の儀(内宮)、(十一月廿四日)神武天皇山陵に親調の儀、(十一月廿五日)明治天皇山陵に親調の儀、(十一月廿六日)孝明天
皇山陵、仁孝天皇山陵、光格天皇山陵に親調の儀、(十一月廿七日)東京に還幸の儀、(十一月廿八日)賢所温明殿に還御の儀、(十一月
廿九日)東京還幸後賢所御神樂の儀、(十一月三十日)還幸後皇靈殿神殿に親調の儀、(十二月二日)特別大觀兵式、(十二月四日)特別
大觀艦式、(十二月九日)東京府奉祝會

〔大禮本儀、賢所移御之儀〕 大正天皇には十一月六日曠古の御盛典を行はせらるべく京都に向はせらる皆宮中にては午前三時齋戒沐
浴せる數名の掌典は大奥の温明殿を裝飾し、同三時半大禮使參與官渡邊地方局長、田所普通學務局長、蜂須賀式部官の三名は大禮服にて
岩倉掌典長、九條掌典次長、北郷、園池、中川、佐伯、神谷、堤の各掌侍並に多忠孝以下九名の樂官は、衣冠單、九名の掌典補は布衣

單にて賢所移御之儀を奉仕すべく着床す、聽て、奏樂中を、北郷、園池の二掌侍は謹み長み進みて靜肅に御屏を開き終れば、九條掌典



(七口カカ) 甲掛の用管位本儀威禮大

日午前九時五十分名古屋停車場御發車、同日午後一時五十分分京都停車場御發車、直に京都皇居に移らせられ、午後三時二十分賢所を奉じて建禮門より入御あらせられ常御殿に入御、賢所は建禮門より直ちに春興殿階下に進御あらせられた。春興殿は掌典裝飾を奉仕し道家、岡、齋藤の三大禮使事務官大禮服にて着床、九條掌典次長以下各掌典、掌典補は何れも衣冠單にて八瀬童子の手より春興殿内に賢所を渡御し奉り神饌を供し、岩倉掌典長祝詞を奏し、終りて天皇陛下御代拜日根野侍從の禮拜に次で皇后陛下御代拜東久世皇后宮主事の拜禮ありて神饌を撤し、茲に滞りなく賢所渡御の儀を終らせられた。

〔即位大禮紫宸殿の御儀〕十一月十日午後一時三十分威儀の人々は紫宸殿の殿上殿下それらの本位に就く。三時十分に至るや紫宸殿上の東南隅に在りし慈光寺式部官の口より警蹕は傳へられ、其聲を受けて西北隅なる蜂須賀式部官更に聲高に警蹕を殿下の諸員に傳ふれば、天皇陛下には黃櫨染の御袍を召させられて、午後三時十六分を以て高御座の背後北階より靜々と壇上に昇御あらせらる。同三時十九分、鉦聲を合圖に諸員最敬禮中に、陛下には玉音助かに左の勅語を下し給ふ。

勅語

朕祖宗ノ遺烈ヲ承ケ惟神ノ寶祚ヲ踐ミ爰ニ即位ノ禮ヲ行ヒ普ク爾臣民ニ語ク
朕惟フニ皇宗國ヲ肇メ基ヲ建テ列聖統ヲ紹キ裕ヲ垂レ天壤無窮ノ神勅ニ依リテ萬世一系ノ帝位ヲ傳ヘ神器ヲ奉シテ八洲ニ臨ミ皇化ヲ宣ヘテ蒼生ヲ撫ス爾臣民世世相繼キ忠實公ニ奉ス義ハ則チ君臣ニシテ情ハ猶ホ父子ノコトクヲ以テ萬邦無比ノ國體ヲ成セリ
皇考維新ノ盛運ヲ啓キ開國ノ宏謨ヲ定メ祖訓ヲ紹述シテ不磨ノ大典ヲ布キ皇圖ヲ恢弘シテ曠古ノ偉業ヲ樹ツ聖德四表ニ光被シ仁澤遐
阪ニ霑洽ス
朕今丕續ヲ續キ遺範ニ遵ヒ内ハ邦基ヲ固クシテ永ク磐石ノ安ヲ圖リ外ハ國交ヲ敦クシテ共ニ和平ノ慶ニ賴ラムトス朕カ祖宗ニ負フ所極メテ重シ祖宗ノ神靈照鑑上ニ在リ朕夙夜兢兢業業天職ヲ全クセムコトヲ期ス朕ハ爾臣民ノ忠誠其ノ分ヲ守リ勵精其ノ業ニ從ヒテ皇運ヲ扶翼スルコトヲ知ル庶幾クハ心ヲ同クシ力ヲ戮セ倍國光ヲ顯揚セムコトヲ爾臣民共レ克ク朕カ意ヲ體セヨ
同三時二十九分大隈總理大臣は南階に歩を進め鞠躬如として南榮の下に直立し謹み長みて左の壽詞を奏す

壽詞

臣重信謹みて言す伏して以みるに
陛下萬世一系の寶祚を踐み乾綱を攬りて坤維を總べ茲に天津高御座に昇御し即位の大禮を行ひ給ふ遠邇瞻仰し億兆抃舞す臣重信誠懼誠喜頓首頓首伏て惟みるに
皇祖無窮の神勅を皇孫に錫ひて八洲に君臨せしめ三種の神器を親授して五部の神を臣事せしめ給ふ萬世不易の皇基確然として爰に定まる 皇宗英武聖明

皇祖授國の宸意を體し天業を恢弘せむとし皇師を帥りて中州を平定し皇位に即きて萬機を親裁し大に經綸を行ひ洪範を後聖に貽し給ふ而して皇孫に奉事せし諸部の子孫亦成先志を繼ぎて皇讓を翼賛す億載一統の皇業蔚爾として維れ崇し
先帝登極の初め復古の廟策を定めて維新の皇圖を啓き開國の鴻猷を宣べて萬邦の善長を採り藩封の舊制を廢して一途の治化を施し不磨の大典を布きて立憲の政揆を明にし兵制を制定して陵海の戎備を嚴整し文教を闡敷して黎元の智徳を啓養し産業を殖興して厚生

道を擴め制度を釐革して庶政の規を宏にし給ふ是に於て乎國家の綱紀廓如として光張し邦運の旺盛駁々として止まず
陛下大統を承け繼績を續き給ひ

皇祖 皇宗暨 列聖の宏謨に遵ひ丕基を鞏固にし徳光を宣揚して天職を全くせんとし零衣肝食聖衷を勞し給ふ今大禮の吉辰に方り明
詔を下して肇國の大本の申明し臣子の恒道を提誨し給ふ臣等感激已む無し伏して見みるに

陛下仁孝恭儉の天資を以て至隆の治を圖り給ふ
皇祖 皇宗暨 列聖の神佑

陛下の聖躬に在り 皇業愈々昌にして徳澤益々渾く頌音四海に洋溢せむ臣等夙夜勤勉力を戮せ心を固くし忠盡の節を勵まし報效の誠
を竭し以て聖旨に答へ奉らむことを誓ふ臣等幸に盛儀に班列し瑞雲の風殿を繞り仁風の錦幢を瞻すを望みて豈慶躍悦の至に任ふる無
し臣重信帝國臣民に代り恭しく大禮を贊し千萬歳の壽を上つる 臣重信誠謹誠喜頓首頓首謹みて言す
大正四年十一月十日

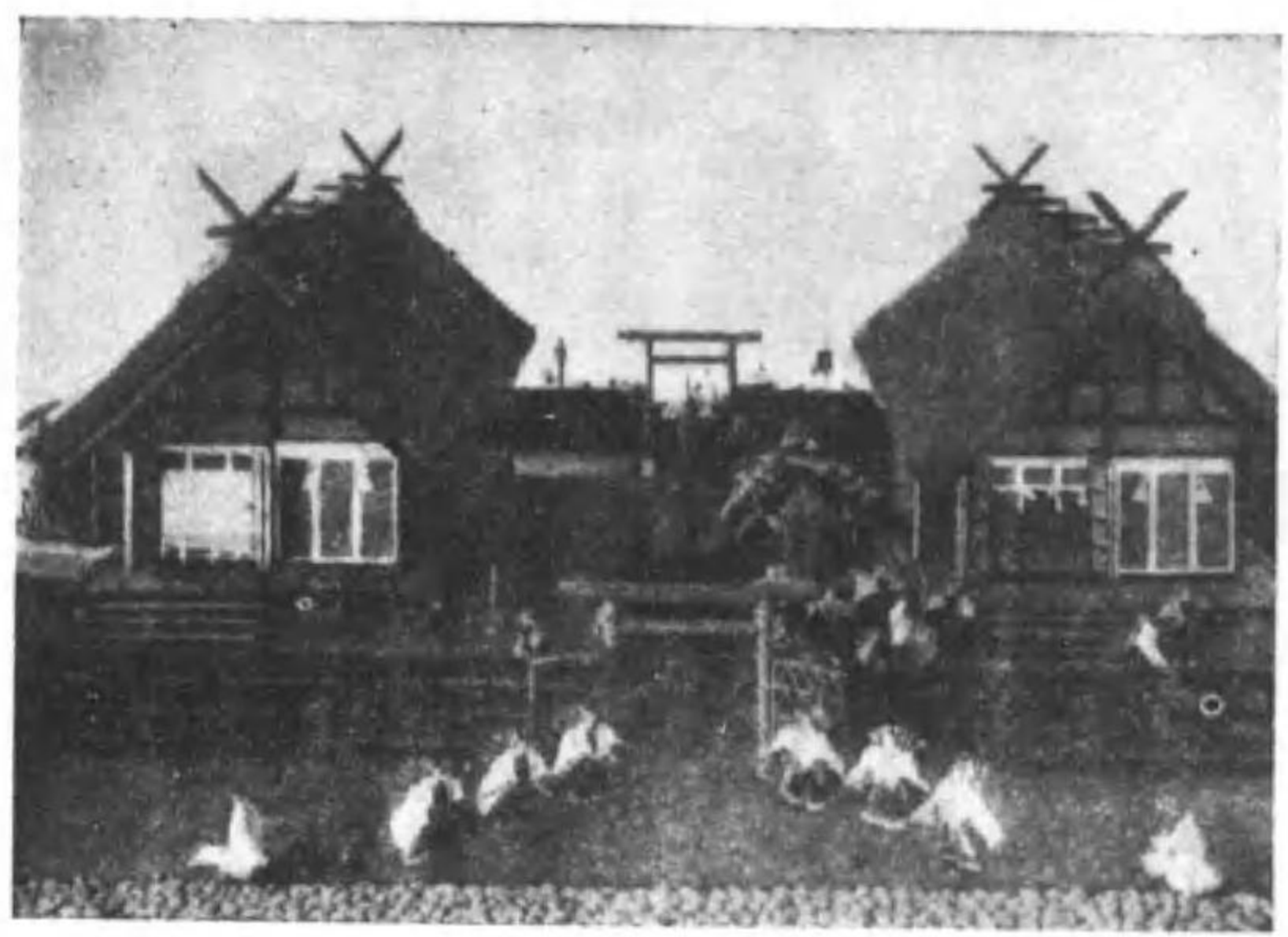
内閣總理大臣正二位勳一等伯爵 臣 大隈重信

終りて再び南階を下り兩萬歲庵の中央に立ち一聲高く「萬歲」と唱ふれば、參列せる三千の諸員は之に和して萬歲を唱へ、三度萬歲
を和唱す。時に午後三時三十分、此時豫て期したる如く京都洛中は勿論全國に涉り、砲聲と警笛と鐘聲と一時に起り、之を合圖に市街
の電車は其駛走を駐め、道行く往來の人々も其歩を止め、萬民等と萬歲を奉唱して祝意を表した。斯て大隈總理大臣は南庭を退き西階
に復したるが三時四十分、侍従の發する警蹕の裡に諸員最敬禮中に、天皇陛下には龍顏麗はしく入御遊ばされ、三時四十二分打出す鉦
鼓三擊に各員退下、御儀式は全く終りを告げられた、實に三時四十五分であつた。

〔賢所神樂の儀〕 翌十一日午後三時三十分より御即位の御終了ありしを謝して神慮を慰め給ふべく賢所神樂の儀を行はせられた。即
ち午後四時第二朝集所の諸員百四十二人、春興殿屬兩幄舎に參進し續いて第一朝集所の諸員百四十八人全く其席に著くや伶人は神樂歌
を奏し、掌典は恭しく御屏を開き神饌を供進し、岩倉掌典長は諸員起立の中に祝詞を奏し、次で皇后陛下御代拜朝香宮允子内親王殿下
には各宮殿下と共に四時三十三分御着床、次で午後五時、天皇陛下には黃檗染の御袍の御束帯いと々神々しく田内式部官の前行にて、
鷹司侍従長を初め大山大臣等の供奉にて出御、内陣の御座に着御、陛下には恭しく御拜あらせられ次で皇后陛下御代拜、各皇族殿下の
御禮拜あり。斯て夜半十二時式は全く御終了と共に、天皇陛下には入御あらせられた。

〔大嘗祭〕 天皇陛下には十一月十四日御代の初めに新たに積れる穀物をもて御饌神酒を供へさせられ、皇祖皇宗天神地祇を親しく祭
らせ給ふ大嘗祭の御儀を執り行はせられた。是より先、大嘗祭に附帶する諸儀式が相次で行はれた。即ち御禊の儀（十一月十一日午後
一時小御所に於て）、大祓の儀（同日建禮門内に鋪設の大祓所に於て）、神宮皇靈殿、神殿並に官國幣勅使發遣の儀（十二日清涼殿に於
て）、大嘗祭前一日鎮魂の儀（十三日午後六時より小御所に於て）、賢所御饌供進の儀（十四日嚴肅に行はせられた）、神宮奉幣の儀（伊
勢神宮奉幣の儀十日皇太神宮に於て）、夫々行はせられた。

〔大嘗祭、本儀悠紀殿供饌の儀〕 十一月十四日夕より曉にかけて我國固有の古典に則りたる森嚴崇高なる大嘗祭を行はせらる。先づ
悠紀殿供饌の儀は午後六時より行はせらる、朝集所に參集の諸員は大禮使高等官の先導にて左右の幄舎に入り各々其本位に着く。此時



悠紀殿及主基殿（模）

悠紀殿東方の奏樂舎より樂人の奏する稻舂歌が靜かに聞え來る。午後七時三十
五分に衣冠束帯に威儀を正せる岩倉掌典長は本殿に參進の上、恭しく祝詞を奏
し奉る。總て天皇陛下には戸田式部長官、波多野官相の前行にて左右各々脂燭
を乗り廻立殿より長廊下を肅々と進御あり、直徑四尺の御菅蓋を後より騎し參
せ、海江田、落合の兩侍従は垂れたる菅蓋の白絹の緒を左右より持ち、東園侍
従は恭しく御裾を捧持し、靜々と玉歩を進ませらる、前なる侍従は雙鷹を延べ
後なる侍従は之を卷き行く、鷹司、内山初め各侍従御後に候し、各宮殿下親王
供奉し、肅々として本殿に著御、外陣御座に著御あり、稻葉大禮使官は國柄の古
風を奉奏すべく樂官十名を從へて本殿兩庭の本位つく、悠紀地方長官たる松井
知事も黒袍の束帯にて本位につく、茲に樂官は國柄の古風を奏し、續いて悠紀
地方の風俗歌を奏す。此時愈よ神饌行立の御儀を行はせらる。供饌種々に白酒
黒酒をも供へさせられ、又各地よりの獻穀は庭積の机代物として供へらる、斯
て陛下には畏くも行立せられたる神饌を順次親ら供へさせられ、御告文を奏せ
らる。親饌終れば陛下には内陣の御座に復らせ給ふて御直會を開きさせ給ふた
是にて森嚴崇高なる悠紀殿供饌の御儀は了らせられ、午後十時二十分廻立殿に

還御あらせられた。

大嘗祭の諸歌 (其一)

稻 春 歌

悠紀地方(六美村)
八束穂のたり穂の稻を刈り積みて
春くや村人むつみあひつつ
主基地方(山田村)
玉ももしさぬきの山田あらた代の
秋のたり穂の稻や春くらむ

大嘗祭の諸歌 (其二)

國栖の古風

かしのふに、よくすをつくり、よくすに
かみし、おほみき、うまらに、きこしも
ち、おせまろが
(此歌の意は、かしのふと云ふ土地
にてよくすをつくりかもせしおほみ
きを、うまくたべよわが父、といふ
のである)

大嘗祭の諸歌 (其三)

風 俗 歌

悠紀地方(音聞山)
君か代を千代もと呼はふまつかせの音も
絶えぬ音聞の山
主基地方(鼓ヶ岡)
雲井まで高く響かむ里人の鼓ヶ岡に千代
呼はふ聲

大嘗宮の供饗

鯛	三尾
鯉	三尾
鱈	三尾
鰯	十二尾
寒天 (紅白)	十本
昆布	十枚
和布	十五把
人參	五本
若布	十五本
葉生薑	十五本
干柿	百五十箇
栗	三升五合
作葉 (紅葉形紅白)	四十箇
同 (山路菊紅白押物)	三十箇
同 (寒菊押物)	四十箇
花桔梗 (紅白)	三十箇

惟ふに帝國友邦の君主及び元首に於て該勅語に對し深く満足せらるべきは疑ひを容れざる所なり陛下が皇祚を踐ませらるゝが爲め大典を舉行せらるゝに方り外交團は謹て茲に至敬なる祝詞を陳奏し併せて衷心より陛下、皇后陛下、親王、内親王、王、女王各殿下の福祉健康を祈る

外交團は帝國の利益帝國國民の幸福並に帝國と爰に代表せらるゝ各國との間に存する親好關係の爲陛下御宇の永く隆盛多祉ならむことを切に冀ふ

〔主基殿供饗の儀〕 主基殿供饗の儀は悠紀殿のそれと御同様であるが、唯だ時刻の相違がある。即ち十一月十五日午前一時三十分より儀式は行はれる。十五日午前一時

八分衛門及び威儀參進同一時十五分參列諸員參進着床、同二時各宮各妃殿下御着床、同時に稻春歌を奏し五分間にて終る。次で塚本大禮使事務官、國栖の樂官を率ゐて參進同二時九分天皇陛下廻立殿に渡御、同二時十二分岩倉軍典長祝詞を奏す。同二時二十分天皇陛下廻立殿より主基殿へ出御、同二時三十分本殿に着御、同二時四十分國栖の古風並に主基の風俗歌を奉奏し、同二時五十分諸員一齊に禮拜す。同五十四分神饌行立の儀あり、同四時三十分天皇陛下御拜御告文を奏し給ふ。同五時十四分神饌を撤し、同五時二十四分廻立殿に還御同五時三十分諸員退下し、同六時天皇陛下頓宮御出門、同六時三分皇宮に入御あらせられた。

天皇陛下が十四日より十五日に亘りて大嘗宮悠紀、主基の兩殿大前に於て奏させ給ひし御告文の大體は左記の如くと拜承す。

御 告 文

伊勢の五十鈴の川上に在ます天照大神天神地祇の諸の神達に申して白さく我諸神のしろき護りに依りて國の中平らかに稔穀豊かにして高き卑きを覆ひ諸の民を救はん依りて今年新たに得たる處の新物を奉る又身の上犯す可き災を未萌に拂ひ除きてまがまく悪しき事犯し來る事ならん又高き山低き谷處々の名を記るしてまじない祭らんのみな悉くけし亡さん事天神地祇の厚き護りを被りて致す可きものなり。

〔大禮後大饗宴之儀〕 大禮後儀として大嘗後一日即ち十一月十五日午後二時より鎮魂の儀(前一日鎮魂の式と同様)を執行せられ、同四時終了した。次で大禮後の大饗宴第一日の儀は豐樂殿にて行はるゝ筈なりしも御都合により二條離宮に於て行はるゝ事となつた。即ち十一月十六日正午より大宴は開かれ、參列有資格者參列の外、十八ヶ國の縮盟諸外國特派使節も參列した。參集の諸員四十間四面の饗宴場に溢るゝ許りである。此時天皇陛下には君ヶ代の奏樂裡に出御まし、玉座の左右は悠紀主基地方風俗歌の兩屏風にて五彩あでやかに飾られてある。供奉員各本位につくや、玉音いとも朗らかに左の勅語を賜る。

勅 語

朕大禮ノ典儀ヲ舉行シ爰ニ饗宴ヲ開キ各國代表者並ニ諸大臣等ト歡ヲ共ニスルコトヲ得ルハ朕ノ大タ喜悅スル所ナリ
茲ニ友邦ノ君主及大統領ノ健康ヲ祝シ併セテ交際ノ益々親密ナラムコトヲ望ム
大隈首相は勅語を拜受すれば參列諸員を代表して左の奉對文を奉る

首 相 奉 對 文

大禮の盛儀を舉行せらるゝに方り群臣を召して大饗の御宴を開かせられ優渥なる勅語を賜ふ天恩涯りなく臣等感激の至りに堪へず臣重信群臣に代り恭しく寵眷の厚きを拜謝し敬て寶祚の無窮を祝し聖壽の無疆を祈り奉る
續いて長老順に依り外國使節を代表して露國大使マレンスキー・マレウイツ氏は左の如く此式を壽き奉つた。

露 大 使 奉 對 文

外臣は茲に列席せる外國代表者の名に於て外交團に賜はりたる優渥なる勅語に對し深甚なる感謝を奉呈するの光榮を有す

次で原侍從御前に進みて白酒黒酒を供し奉れば戸田式部長官御前に罷り出で悠紀主基兩地方の獻穀の色目を奉奏す。時移りて久米舞は奉奏せらる。久米舞了つて悠紀主基兩地方の風俗舞を行ふ。暫くあつて五節の舞姫は兩の太鼓の持てる間より南の階級を静々と登り來りて、五節舞の奉奏が行はれる。此時の舞姫は左の五名である。

清閑寺歌子 高倉則子 石野和子 萩原種子 松橋幸子

右の奏樂終つて參列の諸員は陛下より各自に御挿華を賜はる。

斯くて陛下には諸員起立、君が代奏樂裡に御退出遊ばされ、午後二時二條城より皇居に入御あらせられた。

〔大禮後大饗宴第二日の儀〕 大饗宴第二日の儀は十一月十七日午後六時より使節及大勳位、親任官、貴衆兩院議長、供奉勅任官、供奉女官を召させられて、大饗宴を賜ふた。天皇陛下には戸田式部長官、波多野宮相を前行にし、其他應司、内山以下諸司を従へさせられ、午後六時十九分諸員最敬禮中に出御、着座あらせらる。管絃樂は肅々として起る。此樂の指揮を掌るものは雅樂部長芝葛嶺、演奏者は同部の樂師である。其曲目は左の如し。

一、マーチ(式部職作) 二、フランテニス(佛) 三、アワードルー(佛) 四、ボンヘルカワツト(佛) 五、ウエルジーア(佛)

〔大饗夜宴の儀〕 二條城に於て行はせられたる大饗夜宴の儀は十七日午後九時よりである。此宴には、賢所大前の儀以來各儀に參列したる大勳位以下の諸員悉皆二千餘名を召させられ午後八時十五分參進用意の合圖にて一同所定の舞樂陪覽場に入る。斯る間に天皇陛下には饗宴場に出御、舞樂殿の玉座に着御あらせらる。九時三十分樂官は萬歳樂(舞人は辻則承、奥好壽、辻英吉、奥好祭)を奏し、引續き太平樂(舞人は多久毎、豊時好、芝忠重、岡孝太郎)を奏す。午後十時二十分舞樂終るや陛下は入御あらせられ、諸員休憩所に退下す。十一時十分參進用意の合圖によりて以前の舞樂場に參進す。君ケ代の奏樂裡に陛下御あらせられると、再び君ケ代の奏樂起り次で管絃樂起る。此の指揮官は式部職樂官芝葛嶺、海軍々樂隊瀬戸口藤吉、陸軍々樂隊山本銳三郎であつて曲目は左の如くである。

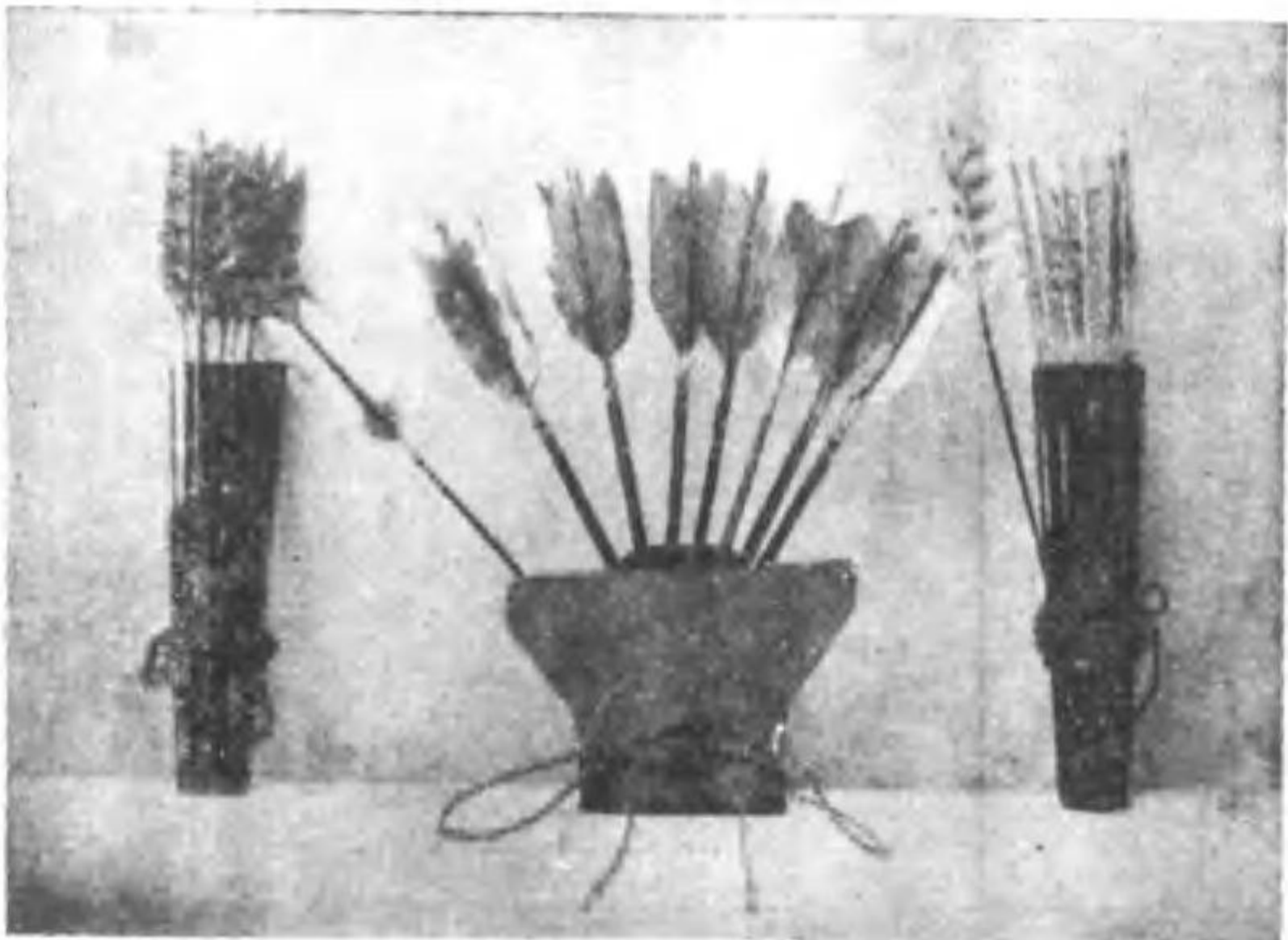
一、マーチ 二、アワツル 三、ハンチーユ 四、セレクシオン 五、ウオルシヤ 六、アハーツル 七、セレクシオン 八、シユイツト 九、ウエルス 十、ポトアレー 十一、セレクシオン 十二、マーチ

陛下は十二時二十分諸員起立敬禮中に入御あらせられ十二時四十分皇居に還御あらせらる。

以上を以て大饗夜宴は全く終りを告げたのである。是れより神宮及び山陵親謁の儀を行はせらるのである。

〔神宮親謁の儀〕 天皇陛下には十九日午前八時二十分京都驛御發車午後一時四十五分山田驛御着、伊勢行在所なる神宮司廳に入御、翌二十日には豊受大神宮、二十一日には内宮を御禮拜あり、皇后陛下の御名代北白川宮妃房子内親王殿下御禮拜あらせらる。

大 典 用 平 胡 録 と 壺 胡 録



〔神武天皇山陵親謁の儀〕 越へて二十四日午前八時三十分天皇陛下には京都皇居御出門、應司侍從長御陪乘、伏見總裁宮殿下を初め波多野宮相、内山侍從武官長、大森京都府知事、侍從等供奉、近衛將校儀仗兵、警部御警衛の下に午前九時京都驛御發車、同十一時十五分敵傍驛着車、直ちに神武天皇山陵に親謁あらせられ、同日午後零時四十五分敵傍御發車同三時京都に御還幸あられた。

〔前帝四代の山陵親謁の儀〕 翌二十五日午前八時五十分京都皇居御出門同日午前九時京都驛御發車同九時半桃山停車場御着、直ちに明治天皇山陵に親謁あらせられ、同午前十時四十分桃山停車場御發車、同午前十時五十分京都停車場御着車にて京都皇居に還御あられた。翌廿六日には孝明、仁孝、光格三天皇の山陵に夫々御親謁あらせられた。

〔東京に還幸の儀〕 天皇陛下には大禮の諸儀を悉く御終了遊ばされ、愈よ同月二十七日京都より東京宮城に還幸あらせらるべく、賢所を奉じて午前九時四十分京都停車場御發車、名古屋離宮御一泊、翌二十八日午後四時三十分、東京停車場に御着車、文武高等官多數、庶民の奉迎を受けさせられる特別公式兩藩にて肅々と東京宮城に還御あらせられた。

斯て即日賢所温明殿に還御の儀を行はせられ翌二十九日には温明殿に於て賢所神樂の儀を行はせられ、續いて三十日を以て皇靈殿、神明殿に親謁の儀を執り行はせられた。

恩 赦 の 詔 書

天皇陛下には十一月十日御即位の大典を擧げさせらるゝに方り同日を以て恩赦の詔書を發せられ、同時に減刑、懲戒又は懲罰免除、出納官吏辨償責任免除、陸軍懲罰免除等の勅令並に軍令を公布せられ、當路大臣又之に關する訓令を發する所あつた。恩赦詔書、及び

恩赦執行の範圍は左の如くである。

詔書

朕大禮ヲ行フニ當リ普ク仁慈ヲ布キ以テ朕カ慶福ヲ頌タムコトヲ念ヒ特ニ有司ニ命シテ恩赦ノ事ヲ行ハシム爾有衆其レ克ク朕カ意ヲ體セヨ

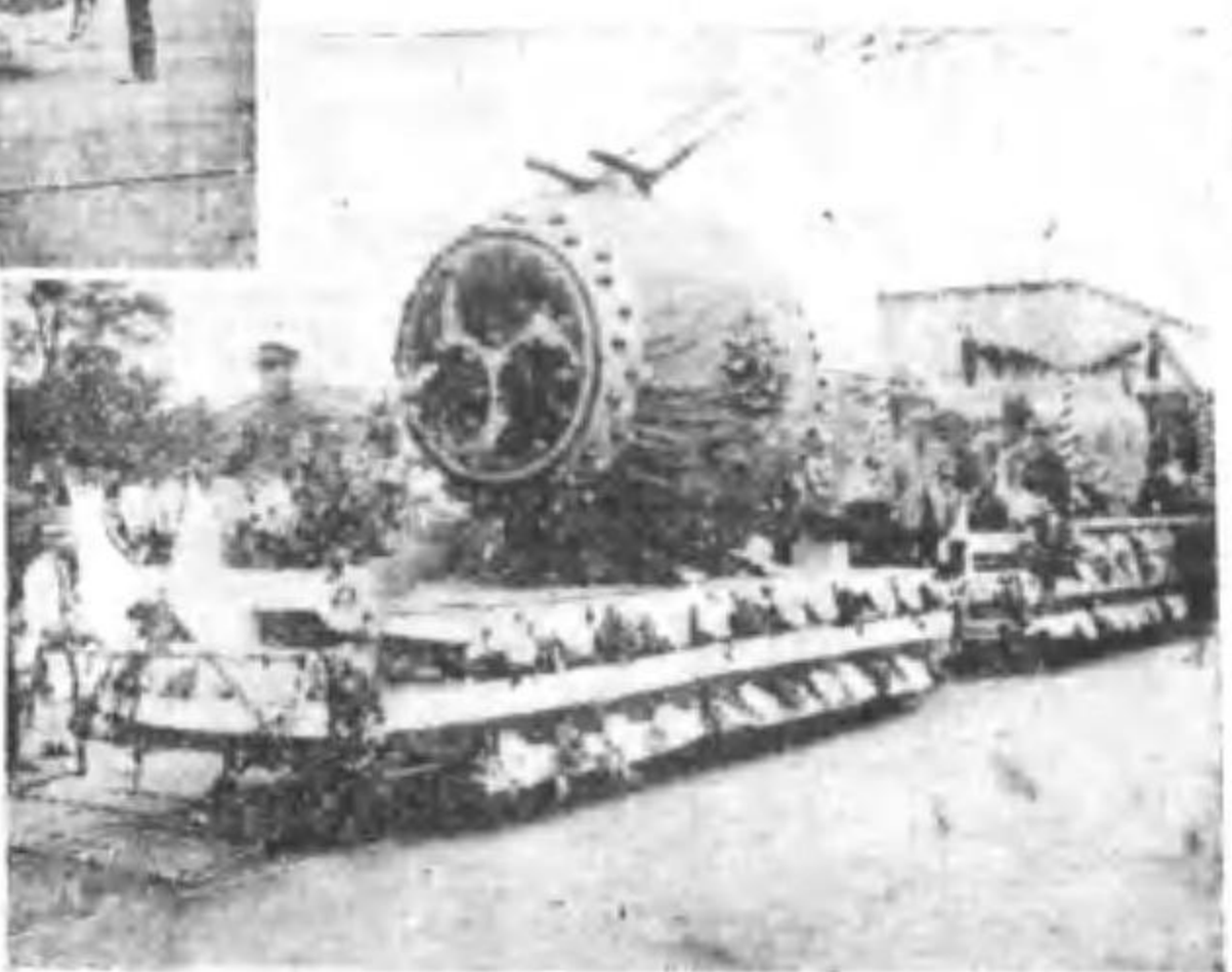
御名御歴

大正四年十一月十日

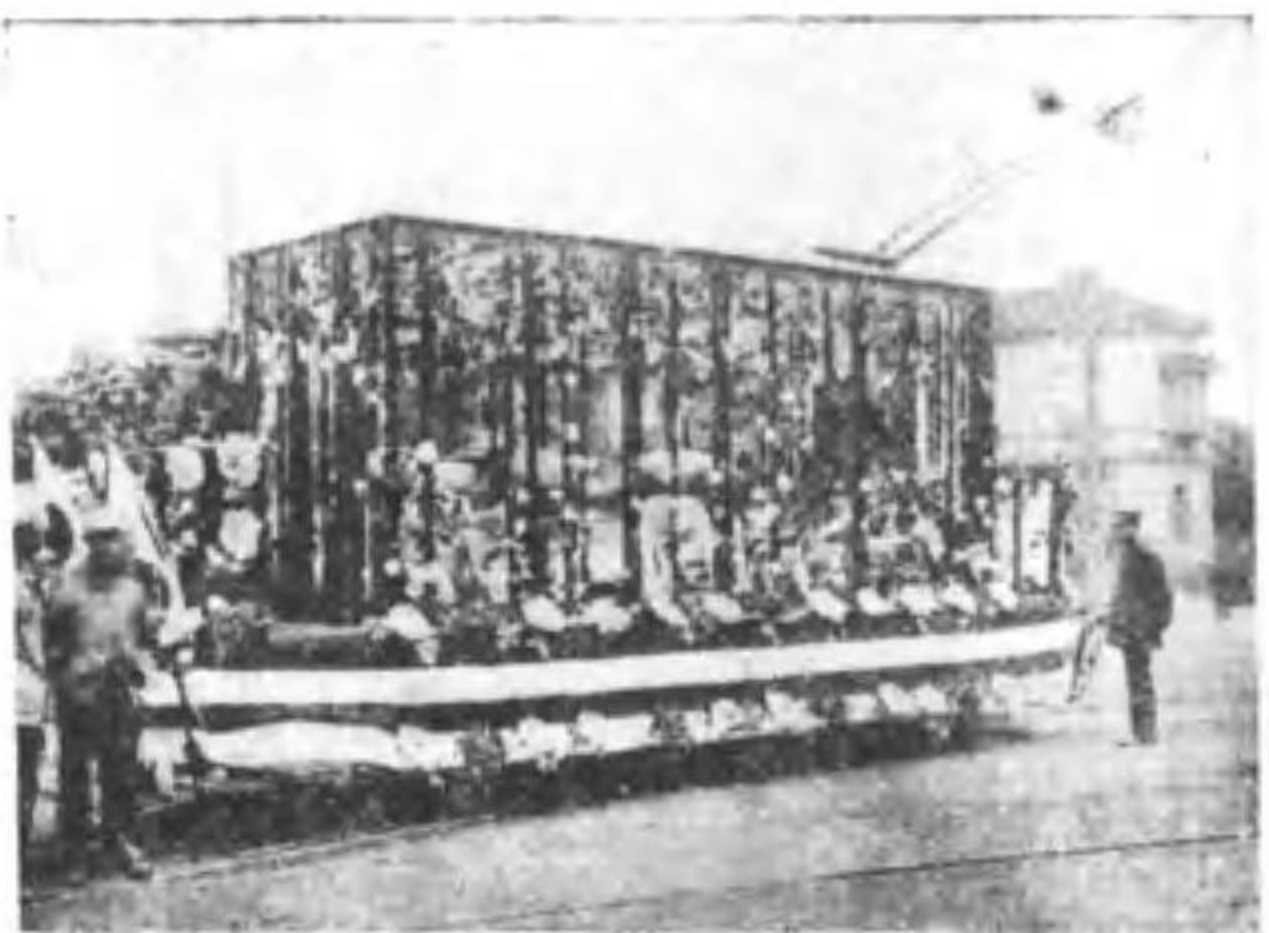
各大臣 副署

恩赦執行の範圍

- 一、今回は大赦行はれずして特赦減刑及復権行はる。
- 二、減刑は勅令を以て一般減刑行はる。



東京市の奉祝花電車



十一月十日、這回の御大禮を機として故人に對し贈位の御沙汰ありて其の功績を表彰せられた、即ち

贈位と敍位敍勳

- 一、特赦減刑の外、復権行はる、復権は刑の執行を終りたる者に付特別の事情あるものに對して行はるゝなるべし。
- 二、特赦特定の者に對する減刑及復権に付ては恩赦令の規定の趣旨に據れば犯罪者の性格素行其他の事情を斟酌して行はるゝものと拜聞す。
- 三、減刑の勅令に依れば忠孝の道に背反する罪其他惡質の罪に就ては減刑行はれず。
- 四、又明治天皇昭憲皇太后の大喪に丁り恩赦を得たる者にして再犯せるものに付ては減刑行はれず。
- 五、減刑行はれざる惡質の犯罪者と雖も大逆罪を犯したるものを除く外は特別の事情あるときは減刑を行ふことを得るの途を開かる。
- 六、勅令に依り一般減刑の恩典に浴したる者と雖も特別の事情あるときは更に特赦行はる。
- 七、特赦の行はるゝ範圍は主として政事犯又は私利私慾を圖るの目的に出でざる犯罪及政事犯に非るも政事上の活動を動機と爲したる犯罪なりと拜聞す。
- 八、特赦減刑の外、復権行はる、復権は刑の執行を終りたる者に付特別の事情あるものに對して行はるゝなるべし。
- 九、特赦特定の者に對する減刑及復権に付ては恩赦令の規定の趣旨に據れば犯罪者の性格素行其他の事情を斟酌して行はるゝものと拜聞す。

贈正一位 故從一位豊后秀吉、贈從一位 故正二位三條西實隆、贈從一位 故正二位山科言繼 (各通) 故從二位北畠具行、故從二位徳川頼宣、故從二位龜井茲盛

贈正二位 (各通) 故正四位下源頼義、故正四位下源義家、故日野邦光

贈正三位 (各通) 故從四位上藤原保則、外二十四名 (以下姓名略)

贈從三位 二十四名、贈正四位、五十六名、贈從四位、百三名、贈正五位、百五十一名、又大典舉行當日、政治、教育、實業其他に功勞ありたる諸氏に對し敍位敍勳の御沙汰があつた。(姓名略)

御即位大禮紀念スタンプ

尙ほ大禮參列各國使節の隨員たる露國大使館參事官シエチシ外十六名に對し十二日附を以て敍勳の御沙汰があつた。

養老賑恤

十一月十日御即位式御舉行當日、畏くも養老並に賑恤の儀に付き左の通り總理大臣に對し御沙汰あらせられ、養老の爲め木金並に酒肴料賑恤の爲め金一百萬圓を御下賜あらせられた。同時に優渥なる左の御沙汰を下し賜はつた。

御沙汰



養老存シ嚮ヲ問フハ人ニ孝ヲ敬フル所以ナリ惠ヲ布キ恩ヲ垂ルルハ民ノ乏シキヲ濟フヨリ先ナルハ莫シ茲ニ登極ノ始ニ方リ宗祖ノ遺範ヲ紹述シテ養老賑恤ノ典ヲ行フ其レ有司ニ諭シテ朕カ意ヲ宣布セシメヨ

大観兵式と大観艦式

十二月二日青山練兵場に於て特別大観兵式を舉行あらせられた。當日之に参加せる兵團は近衛、第一兩師團及び陸軍各學校教導大隊及第二乃至第十八師團司令部以下三十四箇師團(各兵を通じ軍旗約八十旒参加)よりの代表部隊合計約四萬の精兵にして、伏見元帥宮殿下之れが總指揮官として空前の大分列式が行はれた。尙當日飛行船雄飛號及び十臺の飛行機は翼を連ねて代々木練兵場を出發し、觀兵式舉行中青山原頭上を飛翔し、空中にて分列式を行ふた。

同月四日海軍特別大観艦式を横濱港外に於て行はせられた。當日海軍大將片岡七郎男之れが總指揮官に任じた。参加艦艇は左の如くで共數百二十五隻、其總噸數六十萬五千三百八十五噸に上り、實に我建國以來の偉觀であつた。

- △御召艦、筑波△供奉艦、常磐、矢矧、滿洲△指揮官乗艦、扶桑△第一艦隊(第一戰隊)攝津、河内、安藝、薩摩△(第二戰隊)比叡、金剛、榛名、霧島△(第五戰隊)鞍馬、伊吹、生駒△(第一水雷戰隊)八雲(旗艦)、桂、楓、梅、楠、柏、松、杉、海風、山風、櫻橋、樟、桐△(第三水雷戰隊)春日(旗艦)、湖、子日、若葉、朝風、春風、初雪、時雨、初春、叢雲、夕霧、陽炎、不知火、追風、夕風、疾風、村雨、浦風△(第二戰隊)鹿島、三笠、敷島、肥前、朝日、周防、相模、石見、富士△(第四戰隊)日進、阿蘇、宗谷△(第六戰隊)磐手、出雲、吾妻△(第二水雷戰隊)利根(旗艦)、有明、吹雪、霞、彌生、神風、初霜、如月、響、夕暮、夕立、白露、三日月、白雪、野分、松風、浦波、綾波、磯波、朝霧、薄雲、山彦△(第四水雷戰隊)韓崎、駒橋、第十、第十一、第十二、第十三、第八、第九潜水艇、第六十七號、第六十八號、第七十號、第七十一號、雉、鴻、鴨、白鷹、雁、蒼鷹、鶴、燕△(第三艦隊)(第七戰隊)津輕、平戸、筑摩、笠置、千歳△(第八戰隊)對馬、新高、音羽、最上、(第九戰隊)橋立、大和、武藏、千早、嵯峨、宇治△列外、熊野丸、高崎、若宮、松江。

瀆職事件と内閣改造

七月二十八日衆議院書記官長林田龜太郎は代議士買収に關與したる瀆職罪を以て東京控訴院に召喚され、取調の結果收監さるゝに至つた。此事件に關して代議士中には少からず瀆職嫌疑者現はれて收監を見るに至り、所謂代議士瀆職事件として一時社會の耳目を聳動せしめた。而して此事件に關して法相官邸に於て檢事總長、司法次官等會合の上、内務大臣大浦兼武の瀆職に關する重大事件につき擬議する所あつた。其の結果、翌二十九日大浦内相は瀆職事件の爲め辭表を提出したので、首相大隈重信は之を閣下に捧呈して、其事件の顛末を伏奏したる後、監督不行届の責任に就て聖斷を仰いだ。翌三十日大隈首相以下各大臣は首相官邸に參集して緊急閣議を開き、選舉干渉及び大臣以下の瀆職問題に關し、内閣總辭職を決し、首相は直ちに閣員全部の辭表を纏めて之を捧呈した。然るに八月に至り大隈首相は聖斷に依り内閣總辭職を撤回し、内閣の一部を改造して留任する事に決し、同月十日親任式舉行された。而して加藤外相、若槻藏相、八代海相は留任に反對して辭職し、立憲同志會は最高幹部を以て大隈内閣を擁護することに決した。改造大隈内閣は左の如くである。

内閣總理大臣伯爵大隈重信、海軍大臣海軍大將加藤友三郎、陸軍大臣陸軍中將岡市之助、内務大臣法學博士一木喜徳郎、司法大臣尾崎行雄、大藏大臣武富時敏、逓信大臣箕浦勝人、農商務大臣河野廣中、文部大臣法學博士高田早苗、外務大臣男爵石井菊次郎

大正五年

露國大公來朝。首相襲撃さる

五年一月十一日露國ゲオルギー、ミハイロウイツチ大公殿下には軍艦鹿島にて神戸に御入港になり、神戸驛より東京に向はせられ、翌十二日東京驛に御着、天皇陛下には同驛まで御出迎あらせられた。大公殿下には當日御參内の上露國皇帝陛下よりの御親書



露國大公チツキロイハミ

並に御贈進の露國最高勳章金剛石滿飾サンタンドレー大綬章を天皇陛下に、同サント、カタリン勳章を皇后陛下に捧呈し、天皇陛下には殿下に、大勳位菊花大綬章を御贈進あらせられ、次で其夜豊明殿に於て御晩餐會を御催しになった。同夜大隈首相は宮中に於ける夜宴より、自動車にて早稲田の自邸への歸途、半込區山吹町通りに差しかゝるや兎漢の爲め、突然爆裂彈二個を投ぜられたるが、幸に何等の微傷だに蒙らず無事に歸邸するを得たのであつた。越へて十八日に至り、爆裂

を授じたる犯人として下村馬太郎、和田政吉、福田和五郎、鬼倉重次郎の四名は逮捕され、後裁判の結果七月十日東京地方裁判所に於て福田和五郎、下村馬太郎は無期懲役、鬼倉重次郎、和田政吉は懲役十五年、目黒清治、前田九二四郎は同一年(三年間執行猶豫)富田清秋は懲役一年の判決を言渡された。

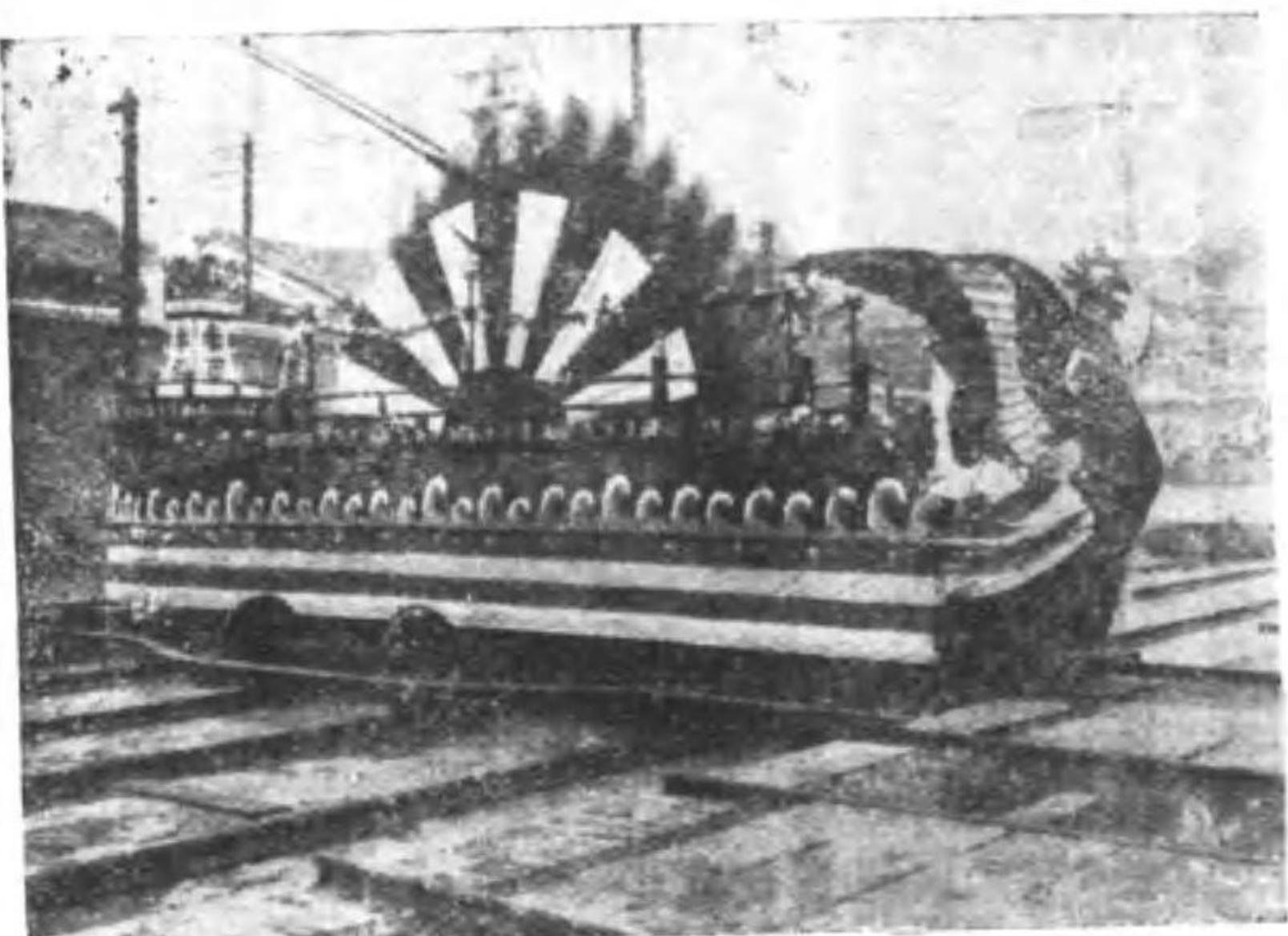
寺内内閣組織さる

九月に入りて政界の風雲は漸次濃厚を呈し來り、是が爲め同月二十九日山縣公は小田原より、西園寺侯は大磯より各々入京し、翌三十日山縣公は参内して大山内大臣に會見後、拜謁仰せ付られ、政局に就て伏奏する所あつた、之れよりして元老及び官僚系の往復の活動は頻々として忙殺を來たしたる結果、十月三日に至り、大隈首相以下各大臣は首相官邸に參集して閣議を開き、いよ／＼總辭職を決定したる後、首相は後繼者を加藤高明子に推薦の爲め同子と早稻田の自邸に會見し、翌四日大隈内閣は辭表を捧呈するに至つた。茲に於て同日山縣、大山、松方、西園寺の公侯等は宮中に於て元老會議を開き、寺内伯を内閣後繼者に奏薦する事となり、其の結果内閣組織の大命は伯爵寺内正毅に降つた。斯くして寺内伯は以來組閣に努め、越へて九日いよ／＼左の顔觸を以て成立したので、同日親任式を舉行された。

内閣總大臣元帥陸軍大將伯爵寺内正毅、内務大臣男爵後藤新平、海軍大臣海軍大將加藤友三郎、陸軍大臣陸軍中將大島健一、外務大臣法學博士子爵木野一郎、司法大臣松室致、文部大臣岡田良平、逓信大臣男爵田健次郎、農商務大臣仲小路廉、大藏大臣勝田主計同日大隈侯に對して特に前官の禮遇を賜ひ、同時に左の優渥なる御沙汰を賜つた。
卿風ニ國事ニ盡瘁シテ大政ニ維新ニ參シ贊襄匡輔シテ以テ朕カ躬ニ及ヘリ今請フ所ヲ允シテ閑ニ就キ老ヲ養ハシム卿共レ加餐自愛シテ尙ホ朕カ意ニ稱ハンコトヲ勉メヨ

立太子禮御舉行

大正天皇には先帝明治大帝の生れさせ給ひたる十一月三日を以て、皇太子迪宮裕仁親王殿下の爲め宮中に於て立太子の禮を御舉行あらせられた。此日行はせられたる御式は立儲令御制定後、最初の御儀であつた。此日は賢所を始め、皇靈殿、神殿に御奉告あらせられた。先づ賢所大前に於て寶劍壹切の御劍を親授あらせられ皇太子殿下に左の勅語を賜ひ同時に立太子禮の詔書を宣布あらせられた。



大正市街鐵道社會の奉祝電車

勅語
壹切ノ劍ハ歷
朝皇太子ニ傳
ヘ以テ朕カ躬
ニ迨ヘリ今之
ヲ汝ニ傳フ汝
共レ之ヲ體セ
ヨ
御宣布詔書
朕祖宗ノ遺範
ニ遵ヒ裕仁親

王ノ爲ニ立太子ノ禮ヲ行ヒ茲ニ之ヲ宣布ス

御名御璽

大正五年十一月三日

宮内大臣 男爵 波多野敬直
内閣總理大臣 伯爵 寺内正毅

又、此日内宮、外宮、神武天皇御陵、孝明天皇御陵に御使を御差遣奉幣せしめられた。此日皇太子裕仁親王殿下には國服、空頂黑幘の儀服を召させられ、賢所御拜禮あり、勅語と共に壹切の寶劍を拜受あらせられ、御式を了はせられたる後、引續き朝見の儀に移り、殿下には御参内正殿に於て天皇、皇后兩陛下に御對顔、前記の如く勅語懿旨を拜受あら

立太子禮奉祝に關する東京市の告諭

立太子禮奉祝に關する東京市の告諭

立太子禮奉祝に關する東京市の告諭

御中 牛込區役所

第一、立太子禮奉祝の期は十一月三日(即ち十月二十五日)に於て行はるべし。

第二、立太子禮奉祝の式は、皇太子殿下の御臨幸に當り、皇宮内閣の御儀に準じて行はるべし。

第三、立太子禮奉祝の式は、皇太子殿下の御臨幸に當り、皇宮内閣の御儀に準じて行はるべし。

第四、立太子禮奉祝の式は、皇太子殿下の御臨幸に當り、皇宮内閣の御儀に準じて行はるべし。

第五、立太子禮奉祝の式は、皇太子殿下の御臨幸に當り、皇宮内閣の御儀に準じて行はるべし。

第六、立太子禮奉祝の式は、皇太子殿下の御臨幸に當り、皇宮内閣の御儀に準じて行はるべし。

第七、立太子禮奉祝の式は、皇太子殿下の御臨幸に當り、皇宮内閣の御儀に準じて行はるべし。

第八、立太子禮奉祝の式は、皇太子殿下の御臨幸に當り、皇宮内閣の御儀に準じて行はるべし。

第九、立太子禮奉祝の式は、皇太子殿下の御臨幸に當り、皇宮内閣の御儀に準じて行はるべし。

第十、立太子禮奉祝の式は、皇太子殿下の御臨幸に當り、皇宮内閣の御儀に準じて行はるべし。

せられた。越へて同月二十七日正午過ぎより内外臣僚一千餘名を召され、宮中豊明殿に於て御饗宴を催され、翌二十八日も前日に引續きて在京の伯子男各爵、有位華族並びに宮内高等官約五百名を御召あり、二十九日には霞ヶ關離宮に於て皇太子殿下最初の御催しに係る立太子禮御祝宴を催ふされ、親任待遇以上の諸官百數十名を召されられた。

因に、壹切の御剣は東宮歴代相傳の御護身用の御剣であると拜承する。萩野博士の談によると、壹切の御剣は後冷泉帝の康治二年禁裡炎上で、御剣は焼失したが、其は太刀の鞘や飾りが焼けた丈けで、中身は何ともなかつた、そこで元の如く鞘は海草などの蒔繪とし、龍の摺具を入れ、飾は青の滑革で、赤地錦の袋に納められた。其後承久亂に紛失した爲め後深草帝の御時は新に鍛へた代の壹切を御授受あらせられたが、次で御剣が発見されて新刀は廢せられた。徳川時代に至り、後西院帝の萬治年中に、又もや内裡の火事で焼けたが、中身は依然として別條なく、うの毛の尖でついた程も瑕瑾がないと記録に傳へられてゐるのであるから、誠に不思議な靈劍と拜察するとの事である。

大正六年

皇后宮奈良女高師へ御歌を賜ふ

奈良女子高等師範學校にては、大正五年四月四日皇后陛下（現皇太后宮）の御臨校遊ばされた際、學風振興の御詠に對し、之を記念せんが爲めに文部省を経て御歌御下賜を乞ひ奉りありたるが、六年一月十六日皇后宮職より文部省に御沙汰あつたので、田所次官直ちに伺候し恭しく左の御歌を拜受し早速奈良女子高等師範學校の野尻校長に急遽出省方を打電したので、野尻校長は直ちに東京出省して恭しく拜受した。

御歌

春日の山に出づる日の　くもらぬ光り仰きつゝ、

かさせや心の花櫻　つよめ誠の教草

源清き佐保河の　みきはの柳うちはえて

故を温ね新しき　道にすゝめや一筋に

御歌は金泥の美麗なる色紙に、いとも畏れど御見事なる御手蹟を以て四句二節に認めさせられ、金縁蒔繪黒塗の御箱に納められたものであつた。同校にては其後右の御歌に曲譜を附して御下賜記念日及び祝日等に奉唱する事となつた。

孝明天皇五十年御式年祭

大正六年一月三十日は孝明天皇の五十年御式年祭に相當するにつき、宮中皇靈殿にては各皇族方を始め、大勳位、親任官、勅任官參列の上、厳かに御祭典を行はせられ、天皇陛下には同日午前十時半出御、親しく御拜あらせられた。又孝明天皇の御陵なる京都の泉山門陵に勅使御差遣ありて嚴肅なる山陵御祭典を行はせ給ふた。

不信任案と衆議院解散

六年一月廿三日、休會後の議會は開會されたが此日憲政會及び國民黨より内閣不信任案を提出した。而して其署名者は憲政會百九十八名、國民黨二十八名、公正會十五名であつて、不信任案は左の如くである。

決議

衆議院は現内閣を信任せず。

理由

現内閣は國民輿論の府たる帝國議會に基礎を有せず學國一致を標榜して毫も其實なく立憲の正道を稱へて自ら其常軌に戻るのみならず方今世界の變局に處して大政を輔翼するの經綸あることなし是れ本案を提出して處決を促す所

以なり。
斯くて該内閣不信任案は越へて同月二十五日上程されたが、討論半ばにして俄然衆議院解散を命ぜられた。越へて三十一日に至り四月十日衆議院議員の

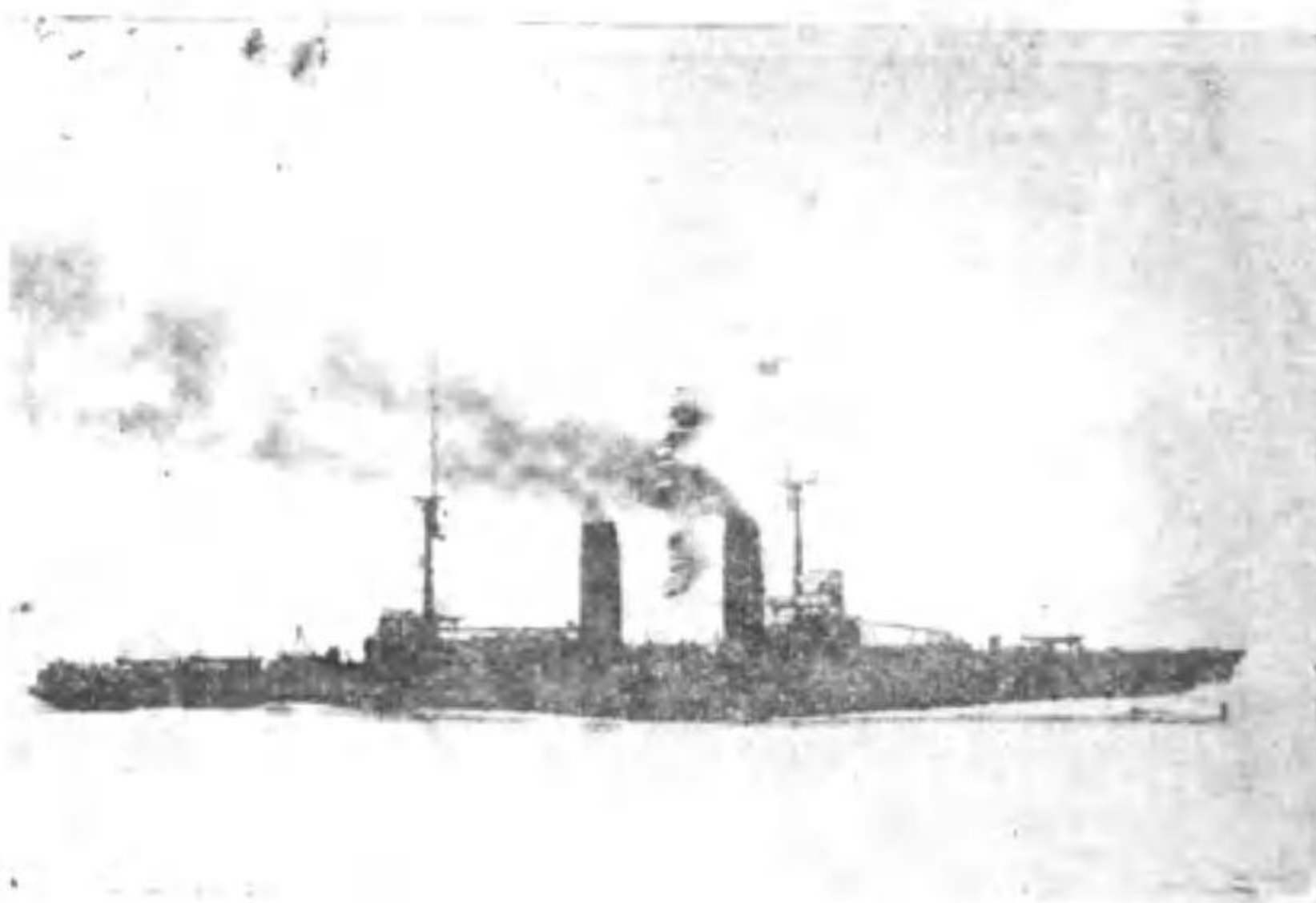


孝明天皇御陵（京都山月輪御陵門）

總選舉を行ふ旨の詔書が出た。

因に、該總選舉は初期以來第十三回目である。尙此の總選舉の結果、各黨派議員候補者と其落選歩合は左の如くであった。
政友會候補百九十八人(落選二十人)、憲政會候補二百十二人(落選四十四人)、國民黨候補四十三人(落選十九人)、無所屬候補百二十一人(落選四十三人)

軍艦筑波の爆沈



爆沈せらるる筑波

豫て横須賀軍港第二區に碇泊中であつた軍艦筑波は、一月十四日午後三時十五分、同艦の火藥庫が轟然たる大音響を立て、爆發し、同時に非常なる震動を爲し爆煙高く揚り、上甲板上の乗組員は此の震動の爲め海中に振り落され、是と同時に艦は大破して午後三時十八分に至り其艦體の後半を現出し、約三十度の傾斜を示して三時半遂に全部沈没した。當日は日曜日にて六百餘名の乗組員に半數上陸を許したれば、爆發の當時艦内に在りしものは約三百四十名にて、爆發の際海上に刎ね飛ばされ、生存者も悉く海中に漂ひ名状すべからざる慘狀を呈した。此際港内には軍艦津輕を始め、河内、生駒、榛名、金剛、其他の各軍艦驅逐艇碇泊し居りたるが急を見て何れも直ちに艦載ランチ、カッターを出して救助に着手し、同時に上陸員全部に非常招集を行ひ百方救護に盡した。爆發の原因は日曜日なので火藥庫を開扉する時に非るは勿論なるが、多分先に爆沈せる松島と同様火藥の變質より生じたる自然爆破にはあらざるかとの説があつた。椿事の當時生存せる各員は、何れも各自の部署に就て沈没まで必死的奮闘を繼續した中にも、軍艦の生命と言ふべき軍艦旗の引卸しは最も壯烈を極めた。爆發の起ると同時に副長前田中佐は直に當番の兵卒を召集し四名の卒は平時と異るなく立ちところに銃を捧げて直立不動の敬禮中に軍艦旗は嚴かに引卸されたが、俄かに旗竿より取り去る能はず力を極めて

竿から折り取つたのであつた。此の刹那艦は全く沈没し水兵は悉く海中に溺れた。軍艦旗を持ちたる水兵は一度渦中に吸ひ込まれて其姿を没したるも次の瞬間に再び波上に現はれて無事故護艇に收容されたのであつた。此の勇敢なる行動を日撃したものは何れも日本海兵の誇りとして感激せざるものはなかつた。
越へて同月二十一日、筑波の殉難者海軍中尉谷口謙一以下特務士官、準士官、下士官百五十一名の合同葬儀は横須賀海軍下士官集會所に於て舉行された。

極東選手權競技大會

第三回極東選手權大競技會は、我が日本が盟主となりて六年五月八日より向ふ五日間東京芝浦埋立地に於て舉行された。當日は名譽會頭大隈重信侯の開會の辭に次で、嘉納治五郎會長の挨拶があり、比島代表者アン、ショー支那代表者張壽春氏の答がありて開會し、日本、比律賓、支那の三國選手は各種の記録を作り、結果採點比軍は八十點、支軍は四十九點に對し、日軍は百二十點の高點を以て我國の優勝に歸したのであつた。

日米共同宣言

十一月二日北米合衆國華盛頓に於て帝國特派特命全權大使子爵石井菊次郎と合衆國國務卿ロバート、ランシングとの間に重要な外交文書が交換せられた。是れ有名なる所謂石井、ランシング外交文書として當時も重要視せられたもの支那の獨立保全、門戶開放、機會均等及び日本の特殊利益を確保したものである。



(中央)氏アンシンラの迎出と(左)使大井石るせ着到にントンシワ

終

